



構築会り
たより
2009 

目 次 構築会たより2009

■ 会長挨拶

03

橋本 彰 (A72)

■ 部門たより

04

社会基盤工学部門／西田 修三 (C教)

建築工学部門／山中 俊夫 (A82)

■ 特集「土木・建築分野の危機管理」

06

設計照査と危機管理—設計コンサルタントの場合—／堀田 毅 (C80)

『自治体の危機管理と、技術者の役割』／福森 一雄 (C81)

「想像力」をもって危機を察知しよう／岡山 渉 (C98)

鉄道会社における危機管理の一例／白神 亮 (C00)

団地再生と危機管理／山下 恒夫 (A72)

建設現場の危機管理—「～かもしれない」と考える—／河原 慎治 (A88)

阪神・淡路大震災の現場から 危機管理について思うこと／宮定 章 (A99)

危機管理／柏 尚稔 (A教)

■ 名誉教授の先生からのおたより

18

フェスティバル・ホールへの懺悔／榎木 亨

土壤の自然由来汚染——トンネルの掘削ずりはどうなる？／村岡 浩爾

建設産業界のピンチをチャンスに／松井 保

訪中談／檜崎 正也

私の実験室その後など／脇山 広三

随想：構造設計は今のまゝでよいのか／鈴木 計夫

歴史的な景観保全／柏原 士郎

安心って？ 安全って？／橋 英三郎

■ 名誉教授の先生からの一言メッセージ

26

福本 喙士

松井 保

五十嵐 定義

鈴木 計夫

井上 豊

甲津 功夫

■ 卒業生たより

- 卒業 50 年 卒業後の 50 年を顧みて／清水 正貴 (C59)
卒業 50 年 卒業後 50 年／木村 公之 (A59)
卒業 40 年 卒業 40 年を振り返って／油谷 進介 (C69)
卒業 40 年 来し方、行く末／大津 俊雄 (A69)
卒業 30 年 阪大土木 C79 (S50 入学) 卒業 30 年会を開催して／大本 和弘 (C79)
卒業 30 年 建築を取り巻く社会的枠組みはかわった／石丸 信明 (A79)
卒業 20 年 卒業 20 年／小野 正博 (C89)
卒業 20 年 20 年目の感想／小野 貴英 (A89)
卒業 10 年 10 年間を振り返って／小池 洋平 (C99)
卒業 10 年 阪大での毎日／安福 健祐 (A99)

■ 学生からのたより

- 研究生活に思うこと／中谷 祐介
二度目の学生 二つの人生／竹村 明久
学生時代とこれからについて／川原 大典
利用方法選択可能長時間、残りわずか／不動 剛志
人生で一番濃い夏休み／吉田 基次
10月14日(水)／仁居 智子
平凡道を非凡に歩め／木下 真一
ENJOY MY SCHOOL LIFE／中安 智子
感謝／木本 早苗
一番熱い夏休み in カナダ／川口 敏子
夢／西本 佳名子
The Freewheelin' Bob Dylan／森下 智史

■ 2009 年度構築会役員会報告	49	■ 構築会会則	59
■ 構築会役員一覧	52	■ 会員動静	61
■ 支部役員一覧	53	■ 教室たより	81
■ 支部たより	54	■ 事務局たより	84
大阪支部		■ 業界案内	85
愛知支部			
東京支部			
兵庫支部			
広島支部			

ごあいさつ



構築会会長
橋本 彰 (A72)

構築会の皆様におかれましては、ますますご活躍のことと、お喜び申し上げます。

このたび、構築会会長を仰せつかり、この1年間、皆様のご協力のもと、構築会の発展に努めてまいりたいと考えております。2009年度「構築会たより」をお送りするにあたり、一言、ご挨拶を申し上げます。

構築会は、学生会員を含め、会員総数が4,800名という大きな組織で、運営については大学の先生方、教室の方々の協力、又、各支部の役員の皆様の協力を得て、ご存知の通り、2年毎の会員名簿の発行、東京・愛知・大阪・兵庫・広島の各支部への活動補助、社会基盤・建築工学部門への補助等の事業を実施しております。ここ数年会費収入が減少する状況が続いており、繰越金をとりくずしながらやっていますが、支部活動、会員名簿発行等に影響が出てきております。この「構築会たより」が届きましたら、忘れず会費を納めていただきたく、お願い申し上げます。

現在、会員名簿につきましては、WEB化の検討に着手し、冊子版をどうするか等各支部と協議を進めているところです。ご意見等ありましたら支部等を通じて提案いただければと思います。又、支部活動については、会員の皆様の貴重な交流の場であり、構築会の中核の活動と考えており、見学会、講演会、交流会（特に若い方も含め）等による支部活動の活性化を各支部にお願いしているところです。兵庫支部では年2回の行事を実施しており、今年は南あわじウインドファーム（風力発電施設）の見学会を実施、「時代を感じる」、「現場の迫力を感じる」等、非常に好評でした。皆様もぜひ各支部の行事に参加していただきたいと思います。

さて、今年の「構築会たより」のテーマは、「土木・建築分野における危機管理」としました。阪神大震災（1995）、9・11アメリカ同時多発テロ（2001）、福知山線脱線事故（2005）、ミネアポリス橋梁崩落事故（2007）、新型インフルエンザ（2009）等近年益々重要性が認識されています。広く産官学の皆様から構造、地盤、河川・海岸、計画さらに、電力、鉄道等の分野についてご寄稿いただいている。ご一読され、今後の皆様の業務にお役に立てばと思います。

社会では、ハッカダム問題に始まり、関空ハブ空港問題、リニア新幹線構想等、国土レベルの社会基盤についての議論があふれています。低成長時代の中で、公共事業の「ムダ」意識の高まりが、国民意識に変化を及ぼし、戦後、策定された国土づくりの「計画技術」が問われています。この議論の中で「ムダ」に始まる経済の視点、政治の視点にかたよることなく「計画技術」の専門性からの議論が、報道等の中で公表され、国民の皆様の理解と評価が必要と思われます。そのためには、我々専門職にとっても、いわゆる「見える化」により、国民に対する説明責任を意識することも必要かもしれません。今こそ、次の100年の治山治水に始まる社会基盤づくりの大系に向けて重要な時期であり、構築会の皆様の今まで以上に、ご活躍が必要な時代に向かうと考えられます。

最後になりましたが、構築会の皆様のご健勝とご活躍をお祈りしてあいさつとさせていただきます。

9 年前に構築会幹事長を仰せつかったときには、「たより」の原稿を依頼する側でしたが、今回は依頼される側にまわりました。この時期、原稿集めと編集作業に追われている幹事の方々のご苦労がわかるだけに、原稿の提出が遅れたことをとても申し訳なく感じています。

ま ず、社会基盤工学部門の異動等についてご報告致します。退職、昇任、採用等の異動はありませんでしたが、長らく水工実験室に居られ技術的なサポートをされていた一宮技術職員が居室を材料構造実験室に移し、いまは、そちらの実験室の管理を中心に業務をなさっています。また、先の話になりますが、中辻啓二教授が来春3月に定年をお迎えになり退職のご予定です。お世話をなった卒業生の方々は、ご挨拶を兼ねて是非来学下さい。

学 生の進路状況ですが、現4年生については37人中30人（約80%）が進学、残りは公務員、NT

T、JR等に就職が決まりました。また、大学院生に関しては、1名の後期課程進学者を除く28名が就職を希望し、皆様のお力添えにより、役所5名、鉄道5名、ゼネコン4名、コンサル3名、高速道路3名、電力2名、商社2名、等、ほぼ希望に添った先に就職が内定致しました。本年度、社会基盤工学科に分属された2年生39人の内12名（約30%）が女子学生で、過去最高の人数となっています。将来、就職状況も大きく様変わりするかもしれません。

部門を挙げて準備を進めてまいりました教育プログラムのJABEE（日本技術者教育認定機構）審査が昨年実施され、今春4月、正式にプログラム認定されました。何人かのOBの方々には教育システムアドバイザーとして、教育プログラムに関するご意見もいただきました。ありがとうございました。JABEEプログラムは、認定されて完了するのではなく、継続的にチェックと改善（PDCA）を進めていくことが求められており、今後とも皆さんからの評価をいただき、教育システムの改善に努めて行きたいと考えております。

□ 社会基盤工学部門の近況



社会基盤工学部門長
西田 修三（C教）

す。また、大学院教育に関しましても、地球総合工学系「国際人材育成プログラム」の立ち上げに向けた協議を開始し、次年度の予算化に向けて動き出しました。対象は大学院学生で、国際的な視点をもち、国際舞台においても活躍できる技術者の育成を目指しています。

研究関連については、昨年3月に締結されましたNEXCO西日本との産学連携協定に基づき、本部門の奈良先生を中心に研究交流が本格的に始まっています。連携推進会議の設置やフォーラムの開催など、当部門以外の方々の参画拡大に向けて動き出しています。また、新田先生が代表となって、「リノベーションまちづくり研究拠点」を立ち上げ、共同研究がスタートしています。副研究科長の要職にありご多忙にもかかわらず、「都市新生」の技術開発に向けて他専攻を取り込んだ共同研究を進めておられます。

最 後に、大学全体の動きについてお話しさせていた
最 だきます。平成16年に大学が法人化され、本年度末までの6年間の第1期中期計画・目標に沿って大学改革が進められてきました。その最終評価が下ると

ともに、大阪大学グランドプランをベースに次期中期計画・目標の策定作業が始まっています。この6年で大学は運営組織をはじめ、大きく変わりました。組織・個人評価、産学・社会連携、人材交流、外部資金導入、弾力的経費運用、事務合理化、等々。この6年間で果たせなかった改革と行き過ぎた改革について、その評価を外部に委ねるだけでなく、内部においてもきちんと評価し、次期計画に反映させることが必要と考えています。総長の掲げた、創発的研究と基盤研究の推進、社会から信頼を寄せられる人材の育成、そして、国際的プレゼンスの向上、という3つの使命を果たすためにも、阪大メンバーである我々教職員と学生だけではなく、同窓生の皆さんのお力も必要としています。今後とも、ご支援ご協力の程よろしくお願ひ致します。

今 年（平成 21 年）の 4 月より、建築工学部門長を拝命し早半年以上が過ぎましたが、これまで大過なく過ごせたことに感謝しています。恒例の部門紹介、建築工学部門のこの 1 年を振り返りつつご紹介申し上げたいと思います。

ま ず去年の秋以降の人事についてですが、今年 3 月 31 日で、第 1 領域（「建築地震地盤学領域」）の馬場研介准教授がご退職され、関西学院大学総合政策学部に教授としてご栄転されました。馬場先生は昭和 49 年に本学建築工学科に助手として着任されて以来、35 年の長きにわたり本学の教育・研究にご尽力賜りました。また今年 4 月同領域に、京都大学防災研で博士号を取得された柏尚穂先生が助教として着任されました。

受 賞関係では、今年第 2 領域（「コンクリート系構造学領域」）の倉本洋教授が日本建築学会論文賞を、第 4 領域（「建築・都市環境工学領域」）の桃井良尚助教が日本建築学会奨励賞を受賞され、今年も部門

にとってうれしいニュースが続いています。

建築工学部門にとって昨年秋のビッグイベントといえば、なんといっても JABEE 受審です。JABEE とは日本技術者教育認定機構のこと、平成 17 年度に大改訂を行った建築工学コースの教育プログラムが JABEE の認定プログラムとして認められました。今年の春以降の卒業生は JABEE 認定プログラム修了生として認められ、技術士の第一次試験が免除されることになります。受審には大変な労力が必要でありましたが、教員全員の一一致団結した共同作業により、無事に乗りきることができました。この受審は、地球総合工学科 3 部門（船舶海洋、社会基盤工学、建築工学）のそろい踏みで行われ、3 部門とも認定されています。本学の教育が高水準なものであることは自明のことと自負していますが、教育改善のシステムを有していることが改めて第三者に認められたことに意義があるものと考えています。

次 に、卒業生の進路についてご紹介申し上げます。
次 今年の春、学部卒業生 46 名中本学の大学院に進学した学生が 34 名で、就職は 7 名、他大学への進学が

□ 建築工学部門の近況

4 名でした。また、博士前期課程の修了生 40 名の進路としましては、設計事務所 10 名、ゼネコン 9 名、メーカー 5 名、住宅、不動産、鉄道へ各 3 名の計 9 名、そして、鉄鋼、銀行、航空会社、電力会社、進学などが各 1 名づつです。以上の様に、建設業関係に約 4 分の 3 が就職しています。今年も来春採用の就職活動はほぼ終了し、再来年の春の就職が動きだそうとしています。年々早くなりつつある就職活動ですが、学業への影響が心配であり、各社各方面のご配慮をお願いしたいものです。一方、博士後期課程の修了生は 2 名であり、なかなか後期課程定員の充足率が上がらないのが悩みの種と言えます。

と ころで、阪大建築の近年の特徴は女性が多いことと言えます。今年、博士前期課程の修了生 40 名中 18 名が女性であり、学部卒業生 46 名中、18 名が女性でした。女性の社会進出を大変頼もしく感じていますが、女性にとって働きやすい環境の整備を社会全体として行なうことが急務であると思います。

また、今年の夏から秋にかけて、日本を代表する世界的な建築家の妹島和世先生を招聘教授としてお招き



建築工学部門長
山中 俊夫 (A82)

して、ワークショップ、公開レクチャーを開催いたしました。学生達の奮闘ぶりが建築のホームページに掲載されていますので、よろしければ是非ご覧下さい。

最 後になりますが、今年度から一級建築士の受験又資格要件（大学院における実務経験要件）の変更により、大学院の前期課程で 120 時間以上のインターンシップによる実務研修を行うこととなりました。今年は始めてのことですいぶん心配もいたしましたが、御陰様で、多くの設計事務所、建設会社各社様のご協力を頂くことでき、多くの大学院生がインターンシップに行かせていただきました。ここに改めまして、ご関係各位に厚く御礼申し上げます。

まだまだ書き切れないことが数多くありますが、あとは 7 月にリニューアルされた建築のホームページやブログをご参照いただければと思います。学会賞受賞をはじめとして、学内外で活躍する学生たちの姿もご覧頂けます。

構築会員の皆様の益々のご活躍、ご健勝をお祈り申し上げます。

設計照査と危機管理 —設計コンサルタントの場合—

危機管理といえば、「災害対策」「事故対策」としての管理が世間一般的と考える。しかし、我々、設計コンサルタントという業種では、「報告書」という成果品を作成すること」が仕事の目的である。もちろん、構造物に対する施工時の事故や、完成後・維持管理時の交通事故などに直面しないわけではないが、構造物を実際に作る、あるいは現場に出ることが稀なため、「クライシス」を対象とした危機管理はあまり問題視されていない、と感じている。

我々が対象としている「危機」は「リスク」であり、「誤設計」あるいは「クレーム」と呼ぶものである。見方を変えれば、自分たちが作り出したものに対する危機管理であり、間違いを起こさなければ良いわけだから「????」という感は否めない。しかし、以下に示す状況から、コンサルタントにとっては非常に重要な問題、課題となっている。

近年、国土交通省から発注される調査設計業務は、これまでの競争入札あるいは随意契約という形態から、標準型、簡易公募型を経て総合評価型プロポーザルへと移行している。評価の中には、企業や予定管理技術者の過去の業務における成績（評価点）が含まれており、この点数が高いほど高評価を得ることができ業務の特定（受注）につながる。業務における成績は、調査設計業務完了後、工事完成までの間の不具合によって減点されることもあり、間違いの無い設計成果品を納品することが必要となる。設計上の判断ミスは当然のこと、単純な計算ミス、転記ミスも減点につながることから、設計コンサルタントは、必死で設計照査を実施している。また、その次のステップとしての「クレーム」が発生した場合の対応方法を手順化して、その影響を最小限に抑える準備をしている。

設計コンサルタント各社は、国土交通省などが定める照査要領に従い設計照査を実施するだけでなく、各社が独自に定める照査方法で設計成果品の品質を高めている。ほとんどの会社がISO9001の認証を受けており、それに基づいて実施したり、独自の要領を作成して実施している。設計の初期の段階での設計条件や対外協議事項



大日本コンサルタント(株)
構造事業部（橋梁部門）
堀 田 豊 (C80)

に関する照査、中盤での計画・検討段階での結果に対する妥当性の照査、業務終盤での設計計算、図面、数量算出に対する漏れ、間違いなどの単純ミスに対する照査など、各段階で必要とされる照査方法は異なっており、それぞれに最適な照査方法を採用している。

例えば、異なる分野（橋梁と道路、橋梁と環境、景観など）にまたがる業務の場合は、各分野の専門技術者を含めて照査したり、計画・検討段階での照査は同様な業務経験を有する他の地域の人材を活用している。単純な数字合わせの照査では、同じ内容を二重に実施して間違いの排除に努めている。

ここからは、私個人の（正しくは仕事上の先輩の受け売りだが）意見となる。それは、「照査は、照査を実施する人の技術力以上の照査とはならない」というもの。対象となる物事の何らかの経験が無ければ、そこに問題が隠れているということに気付かずしてしまって、というものである。より多くの経験を積むことで問題の発見能力は高まるが、まったく知らない分野の照査はやはり困難なものがある。多くの経験の機会のある（大手の）会社はその技術力を維持していくことが可能であるが、機会の限られた会社組織では照査能力を有する人材すら育てられない、という負のスパイラルに陥る可能性がある。技術者が成長していく、会社組織が求められている。

我が国の建設分野（橋梁分野だけかもしれません）では、設計全般をコンサルタントが実施することが多く、設計・製作・施工とすべての事項を知る事を要求されるハードな職種にある。実際、様々な方法を使って知識や経験の吸収に努めているが、適切な分業がなされるべきと考える。基本的な計画や構造上の重要な事項の決定と、施工業者の監理・照査をコンサルタントが受け持ち、具体的な設計はメーカーなどの施工業者が実施するような形態が、ひとつ回答ではないかと考える。1)

参考文献

- 1) 大橋治一：橋梁設計の照査にみる日米の相違とIndependent Checkの意義、橋梁と基礎、2006. 3.

『自治体の危機管理と、技術者の役割』



福森一雄 (C81)

○職歴と印象 大阪府入庁後早25年。危機管理・防災部局約4年、河川部局17年。中でも兵庫の大震災直後の地域防災計画大改訂、西除川激特事業、寝屋川総合治水、安威川ダム周辺整備が印象的。テボドンや新型インフルエンザなど危機事象も情報連絡面で経験。本庁出先往復の中、やはり、土木は現場力であり、特に現場体験や地域住民との話し合い、「思いを形にする作業」が記憶に残る。

○大阪府の危機管理 自然災害に加え、社会的な影響が大きい事件・事故にも対応。平成13年大教大池田小学校事件、平成15年SARS事案の教訓で、危機管理室設置（総合調整機能強化）、府内推進本部設置、部局次長による危機管理情報担当配置（情報共有）、危機管理対応指針策定（現在60事象が対象）、危機管理監設置（統括機能強化）、その後、テロ対策指針や新型インフルエンザのBCP（事業継続計画）策定等様々な事象対応へと展開。ホームステーションプレイ（各部局対応）型を基本に、危機管理室で統制。土木部局では自然災害対応が中心。緊急時の連絡体制整備、水防要領や地震時初動マニュアルに基づく災害時配備体制を整備。

○私が感じる危機管理の現状

1. 意識、心掛け・・プロアクティブ原則「疑わしきは行動」「最悪を想定」「空振り覚悟で行動」に心掛けるも、危機が過ぎ去り、災害がないと意識が薄れる。施策への合意にも影響する。東南海・南海地震対策は、地震の科学的な緊迫性と推進地域指定で加速。意識レベルから実行レベルへと、想定外の対応ができる限り想定内に組み込むこと、そのため、予想・予測・予知など技術進歩が不可欠。如何に格差を埋めるか、その鍵は想像力と経験。一方、法令順守のみならず社会規範としてのコンプライアンスの認識が重要。事前事後対応、被害最小化等危機に対する心構えとして、説

明責任、情報公開、決断力が必要。行政には、専門性と総合性以外にも、予測等に基づく行動（想像力）、実況に基づく行動（柔軟性と決断力）が求められる。

2. P D C Aサイクル・・危機管理の重要性は理解されているが、日々業務の中で最悪想定は意識の隅に置かれやすく、当面の目標が優先処理される。防災・危機管理分野に、権限や地位、人材と言われる由縁。集中と連携、有事にはトップダウン、平時にはトップのコミットメントや目標提示、危機意識を如何に継続するか、見えないもの（潜在危険、波及と影響等）を如何に可視化し共有するか、P D C Aサイクルで確実に身に付けるためには、組織的な「研修と訓練、啓発」は欠かせない。

○私が考える技術者の役割

1. 優先順位と社会的合意・・自然災害を対象に考える。兵庫の地震後、土木構造物等の社会インフラ強化や諸制度の充実等公助対策はかなり進展、一方「住宅耐震化」が最大効果発揮との主張の中、個人補償と投資に対する社会の認識等が壁となる。地震規模等災害が大きくなるごとに諸基準が強化されるが、どこまでやるのかという議論の果ては「社会的合意」とそれを形にする力が焦点となる。社会がどこまで受け入れるかの受容性、その判断は、便益／コストの相対比較が基準となり、他の施策と比較した妥当性が求められ、かつ便益は災害後にしか現れず、社会が危険を認識できないと対策への理解は進まない。近年頻発するゲリラ豪雨、地球温暖化による海面上昇、ハリケーンカトリーナ等構造物で対処できる範囲を超えたものには、個々人の意識改革や社会の変革が必要だが、緊急事態、切迫性のない段階での説得には困難が伴う。行政には、可能性を追求したシミュレーション、思い込みを排除した迫力ある啓発、具体的な行動へつなげる不断の努力が必要だが、自然現象に対する理解、現況施設レベ

ルへの認識や、自ら取るべき行動の認識等住民の判断力が鍵となる。

2. 防災と環境・・非日常（災害）の日常化の鍵は？最近の動向から探ると、①利用者視点のストック活用（高速道路料金一元化、交通のリダンシィと分散化、代替施設によるバックアップ等）、②地域共有の財産として府民協働で守り育てる（ライフサイクルコストを考えたアセットマネジメント、アドプト制度による美化活動等）、③生活の中で日常の延長が備えとなるような取り組み（治水緑地の公園利用、各戸貯留と打ち水、まち緑化と耐災化、ソーラー発電と耐震化等）。如何に少ない費用で効果を發揮するか、意識改革には防災的視点に加え環境的視点が極めて有効である。

「想像力」をもって危機を察知しよう



神戸市道路公社
総務企画部企画課 主査
岡 田 渉 (C98)

「危機管理について、執筆をお願いしたい」と頼まれたのだが、最初は「何を書いたらいいものか」と戸惑った。神戸市に勤めて10年になるが、阪神大震災の復旧に携わったわけではない。また、幸いにも大きな災害にあったことはなく、災害対応を経験してきたわけではない。

しかし、考えてみると、私みたいな実際に対応経験がない技術者は多いはずだ。むしろ若い技術者のほとんどは、経験がないだろう。東南海・南海地震の発生確率が起こるであろう20～30年後には、現場で対応する人間のほとんどが、経験がないまま、先導し、指揮していくかなければならない。加えて、近年の採用抑制が続いた上、事業縮小の中、現場経験が乏しくなっている中で、対応が求められる。

これまでにたくさんの経験をしてきたわけではないが、常日頃より、組織の一員として危機管理には意識をおいている。そんな職員が思うところを書いているものと、読んでいただければと思う。

私は、現在、有料道路を運営する外郭団体に派遣されているが、これまでも道路計画、道路工事、道路管理と、道路に携わる仕事を続けてきた。行政機関の道路管理の視点から、危機管理について考えてみたい。

『危機』といわれて想像することは、地震や台風などの自然災害、テロなど想定外の災害であろう。行政機関の防災計画も、このような災害を想定して作られている。危機管理とは、このような事態から、「市民の生命・財産」を守るために、組織として動くことと考える。

道路を管理する部署においては、まず、橋梁などの耐震補強や法面対策などハード面での対策が求められる。これには、昨今、大きな予算が割り振られ、着実に進んでいるように思う。昨年度の緊急経済対策でも大きな補正予算が組まれたところだ。公共事業の削減が打ち出される中においても、耐震化や維持管理など安全を守る部分に

対しては、予算が重点的に割り振られている。

特に有料道路は、多くの物資や人が移動する重要な路線であることから、緊急輸送路として機能することが求められ、地震時でも機能する高い信頼性が求められる。通行料収入が減少し、経営がきびしくなる中でも、管理費用をやりくりし、安全確保に努めている。

また、ハード面の整備だけでなく、災害時の復旧活動や対応についても、頻繁に研修が行われている。

こういった姿勢から見ても、行政機関における、大災害に対する危機意識は高いと感じる。

さて、危機管理のもうひとつの側面として、「ヒューマンエラー」を防ぐことがある。ヒューマンエラーによって、事故など市民の生命・財産に危害を加えるだけでなく、情報漏洩や不祥事といった会社・組織が損害を被ることもある。

ゼネコンなどで工事現場を任されている部署では、ヒューマンエラーが、大事故につながり、大きな社会的被害を及ぼすことから、特段の注意を払っていることだろう。道路管理においてはどうだろうか。道路上での事故は、利用者の責任によるところが多く、ヒューマンエラーがどこまでかはあいまいで、事故＝ヒューマンエラーという意識はそこまで高くないよう思う。

記憶に新しい高速道路上での事故でも、駿河湾沖地震での東名高速道路の盛土崩壊、中央道多重玉突き事故、首都高タンクローリーの炎上など、どの程度ヒューマンエラーがあったのか、判断は難しい。

しかし、有料道路において、事故が起った時は、道路管理者が批判されることが多い。多くのお客様・マスコミが「通行料金を払っているのだから、安全対策は万全だろう」という先入観を抱いているからと思われる。そのため、大事故が起ったときは、「なぜ道路管理者は適正な管理を行えなかったのか」、「事故の予見性はあった」と非難をあびることになる。

東名高速の盛り土崩壊でも、一部報道においては、「舗装ひび割れが発見されており、危険な前兆はあった」と報道されている。管理する立場から見ると、通常パトロールにおいて見られる舗装ひび割れと、盛り土崩壊を結びつけることは、そう思いつくものではない。私もそういう意識を持って、道路を見たことはなかった。

しかし、批判を謙虚に受け止めると、そういういた意識を持たなかつたことが、ヒューマンエラーと言えなくもない。これまでの常識にとらわれない考えも必要なことは事実である。

公共施設の多くは、高度成長期にかけて作られ、それが一斉に高年齢になろうとしている。今後は、我々が過去に携わったことのないものを、維持・管理していくかなければならない。こういう時代だからこそ、過去の実績や経験にとらわれず、様々な視点から、ものを見る「想像力」が必要と考える。

過去の常識や実績にとらわれ「これまで事故はなかったから大丈夫だろう」という考えは、どんな組織においても少しくらい残っているだろう。これまでの役所生活でも、何度も聞いてきた言葉だ。企業が事故を起こした時に謝罪会見で聞かれるのも、この言葉である。

会員の皆様の中には、経営の中核に携わる方々もたくさんいることでしょう。若手職員のこんな「想像力」に、ぜひ耳を傾けてほしいと願う次第である。

危機意識を維持することは、非常に難しい。今年5月の新型インフルエンザ感染が報道された時も、直後は大騒ぎであったが、わずか1週間もすれば、ほとぼりが冷めている。現在も毎日、うがい手洗いを続けている人はどれほどいるのだろうか。

公共施設の管理や工事現場など、土木・建築分野において想定される「危機」とは、市民の生命や社会に対して大きな損害を与えることであると、まずはその意識と責任感を持ち続けることから、始めてみよう。

鉄道会社における危機管理の一例



東日本旅客鉄道株式会社
白 神 亮 (COO)

「土木・建築分野の危機管理」というテーマについて「鉄道会社の立場」で、という原稿の執筆依頼を受け、私自身が危機管理に対する経験が多くないため、どのような内容にすべきかいろいろ迷いましたが、土木系の立場でも関わることが多いということで鉄道会社の地震に対する取り組みを簡単に書かせていただきます。

鉄道会社の危機管理として重要なものの一つに地震に対する対策が挙げられます。皆さんもご存知のとおり1995年の兵庫県南部地震以降も大きな地震が数多く発生しております。近年のJR東日本管内だけでも、2004年の中越地震（マグニチュード6.8 最大震度7）、2007年の中越沖地震（マグニチュード6.8 最大震度6弱）、岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7.2 最大震度6強）など多くの地震が発生しております。

地震を防ぐことはもちろん不可能なので、大きな地震が起きたとしても被害を最小限にすることが求められます。各鉄道会社と同様にJR東日本でも新幹線、在来線とともに地震に対する対策を進めています。特に新幹線の場合、高速で走行するため、地震による影響をより大きく受けます。JR東日本では新幹線の地震対策として、列車をすばやく停止させる、地震の揺れに対して列車が大きく逸脱するのを防ぐ、構造物の被害を最小限に抑え崩壊を防ぐなどの対策が採られています。

まず、列車をすばやく停止させるのですが、これは新幹線早期地震検知システムと呼ばれるもので、地震計を新幹線沿線や海岸に設置し、地震の主要動（S波）より先に到達する初期微動（P波）を検知してより早く列車を停止させる仕組みになっています。これまでこのシステムの地震推定時間は約3秒かかっていましたが、最近では約2秒に短縮するなどより性能の向上が図られています。

次に、列車が大きく逸脱するのを防ぐということですが、これは新幹線の台車に逆L型にした車両ガイドを設置しています。これにより地震の揺

れで仮に車輪が線路から外れた場合にも車両ガイドにより大きく逸脱することを防ぎます。

最後に構造物での対策ですが、これは土木系の社員が関わることが多いものです。鉄道土木構造物に関しては兵庫県南部地震により多くの構造物が被害を受けたため、耐震設計基準が改訂され、新たな耐震基準を満たさない既設の構造物については耐震補強が行われてきました。これまでにはラーメン高架橋の耐震補強を重点的に進めてきており、JR東日本の例で挙げますと、じん性が低く激しく耐力が低下し、高架橋全体の崩壊につながるせん断破壊先行型の鉄筋コンクリート橋脚について、鋼板を巻くなどの補強をしてきました。現在では、せん断破壊先行型よりじん性がある曲げ先行破壊型のうち耐震性の低い橋脚についても補強に取り組んでいます。これらの対策により仮に地震により高架橋が損傷しても高架橋全体の崩壊を防ぎ安全を確保するとともに、地震後の早期復旧にもつながります。

ここで紹介しました車両や構造物などに対する対策は、いずれも普段鉄道を利用してても気がつかないものばかりですが、鉄道運行の裏側で地道な対策として行われています。特に土木・建築が関わる地震対策は何もなければ注目されることも少ないので、実際に地震が起きた時にはその効果は大きなものになると思います。一方で、土木構造物に対する対策は投資額も大きくなるため、いつ起こるかわからない地震に対する対策は民間の鉄道会社としては効果的に行っていく必要があります。

以上、会社の施策の話になってしまい特筆すべき内容ではなかったかもしれません、鉄道会社の危機管理の例として紹介させていただきました。

団地再生と危機管理



(株)URサポート
山 下 恒 夫 (A72)

長年公團（現UR都市再生機構）を中心に住まいづくり・まちづくりに関わってきましたが、最近の仕事は「団地の再生」計画がテーマです。その中でも阪大工学部がある千里ニュータウンが主なフィールドとなっています。学生時代（昭和40年代半ば）、誕生したばかりのこのニュータウンを眩しく輝く街として感じながら北千里からの道を歩いたのを思い出します。

今回のテーマは「土木・建築分野の危機管理」ですが、私の限られた経験分野であるニュータウンや団地についてその「再生」と「危機管理」について考えて見たいと思います。

ニュータウンの再生：近隣住区と歩行者専用路ネットワーク

千里ニュータウンの計画は近隣住区理論に基づき、土地利用が用途純化されており、戸建住宅地と集合住宅地、学校・保育所など、そして商業・生活サービス施設が集積した近隣センターとが整然と、小学校区を基本としてひとつの纏まった住区を構成しており、住区内の各ブロック間および各住区間を歩行者専用ネットワークによって結ばれ、それが幹線道路等とは分離されながら鉄道駅および地区センターまで結ばれています。当時想定された居住者像は、核家族・専業主婦・子育てファミリー層を中心のベッドタウンであり、通勤者である夫のみが夜間帰宅、女性・子供は日の活動のみで夜間は出歩かないというようなものでした。

しかし40年が経ち、状況が大きく変化しました。居住者の高齢化、世帯の縮小、女性の社会進出・共稼ぎ世帯の増加、少子化、ライフスタイルの多様化、生活圏の拡大、生活時間の長時間化、モータリーゼーション、介護・子育て支援など生活支援サービスのニーズの増大などです。これらを背景として、団地の再生と危機管理とを結び付け、生活の安全・安心について2つの点の課題について述べます。

①防犯対策：防犯に関しては、居住者や新たに

居住しようとモデルルームに来る人などのアンケートによると夜間の通行に不安を感じるところがいくつか指摘されています。まず最寄り駅から各近隣住区内の居住ブロックまでネットワークとしてつながっている歩行者専用路です。

公園内や公園沿い・学校敷地沿いなど夜間通行人の少ない・人の目の届かない部分がかなり多いことです（監視カメラが設置されたりしていますが）。集合住宅地内では、長大な駐車場や幹線街路の歩道、樹木や設備棟などに遮られた死角部分など。住棟内では共用廊下の死角部分などです。最近の分譲マンション建て替えでは「ゲーテッドハウス」も出現していますが、ニュータウンの魅力でもあるオープンな屋外空間を活かしつつ、通り空間・住棟・住戸など各領域の安全性を如何に確保するかが再生計画検討の大きな課題となっています。戸建住宅ゾーンでも高齢者のみ世帯（単身、夫婦）の増加や空家の増加の問題があります。空き巣・強盗、放火・ Vandarism の心配があり、セキュリティ会社との契約ステッカーが貼られている家も目立ちます。

②医療・介護・生活支援ニーズへの対応：施設整備面では、ニュータウン内では施設立地のための用地確保が難しいという問題があります。従って、今後の公的住宅団地再生事業などに伴い、高齢者・子育て層向けの施設が立地することが期待されています。また、在宅サービスを受けるための住宅側の対応では特に階段室型中層住棟のバリアフリー化が、費用、工法（居付工法）、モジュールなどの面が大きな課題です。不法駐車を防ぐためのロボットゲートも緊急時・夜間時、訪問介護等のサービス提供時に利用が不便との問題があります。

以上の2点の外にも、耐震改修の問題も大きな課題としてありますが、いずれにしても居住者の在る中の再生事業プログラムは極めて複雑なものとなざるを得ません。

建設現場の危機管理 —「～かもしれない」と考える—



鹿島建設㈱関西支店 建築部
生産計画グループ長
河 原 慎 治 (A88)

奇しくも「危機管理」というテーマで本稿の執筆依頼を受けた1週間後のことです。高校一年生の長男が新型インフルエンザを発症しました。タミフルのお陰で、本人は二日後には高熱も下がりクロッとしていましたが、親の方が大変。幸い家族への感染には至りませんでしたが、妻は、急遽仕事を休んで付きっきりの看病、ゼネコンで働く私も、社内規定により暫く出勤停止となりました。感染防止の観点から、同居発症者が完治した後5日間、家族全員分の1日3回の体温記録を会社に提出し、医師の許可を得て出社可能とする規定があったからです。この間、会社のノートパソコン（万全のセキュリティ機能付き）を自宅に持ち帰って、ネットとメール、さらに携帯電話をフルに活用し、何とか仕事を継続しました。このような突発的事態に対する対策として、日常から同一ジョブの主副複数社員での担当、会議スケジュールや取り扱い情報の部署内共有化等を講じていましたので、大事には至りませんでしたが、部下や同僚にかなり迷惑をかけたと思います。改めて危機管理の重要性を痛感した次第です。

さて、前置きが少し長くなりましたが、私は今春まで、建築の現場代理人として施工管理の仕事に従事していましたので、ここでは、「建設現場での危機管理」について私見を述べたいと思います。

建築物は、大雨・強風・地震などの自然現象のリスクや、火災・盗難などの人為的リスクから、人命や財産、事業活動等を守れるように設計されています。しかし、これは、あくまで建物が「完成してこそ」のことであり、建設途中においては、これらのリスクに対しては、設計段階では殆ど考慮されていないのが一般的です。また、建設現場では、一般的な企業活動に共通的にあるリスクに加えて、その生産形態の特殊性、つまり「受注一品生産」、「現地・屋外生産」、「下請け分業型・労働集約型生産」であることに起因する様々なリスクが考えられます。工事中の台風・地震・雷・寒波・猛暑などの気象的リスクはもとより、現場作業に関わる墜落や飛来落下、足場や重機・火気の使用等に関わる様々な労働災害のリスク、図面のミスや作業員の技能不足、施工管理の不備等による品質的リスク、資材の高騰、部品の製造中止、現場への交通障害、施主や下請け会社の倒産など、納

期や収益に影響するリスク、その他、現場での火災・盗難・情報漏洩、反社会的勢力からの圧力、等々。建設現場でのリスクは枚挙に暇がありません。建築施工における現場での管理項目は、Q・C・D・S・Eの5項目であるとよく言われます。Qは品質管理 (quality)、Cは原価管理 (cost)、Dは工程管理 (delivery)、Sは安全管理 (safety)、そしてEは環境管理 (environment) です。建設現場では、このQ・C・D・S・Eに関わるリスクが上述のように非常にたくさんあり、我々のような建設現場の施工管理の仕事に携わる者は、おそらく「危機（リスク）管理」という言葉が一般的に使われるようになるずっと前から、このような現場で起きうる様々なリスクに対して「いかに予測し、予防していくか」、「危機に面したとき、どのように対応するか」ということが、施工管理そのものである（施工管理=危機管理）と教えられてきたように思います。

『「～だろう」ではなく、「～かもしれない」と考えろ！』、これは15年程前、担当工事の施工計画を立案する際に、現場のベテラン所長に言われた言葉で、今も私が後輩たちに時折指導していることのひとつです。「大丈夫だろう。うまくいくだろう。」と高をくくった施工計画や施工管理は、リスクに弱く、万が一の際に致命的なダメージを受けることになります。「ここでミスが起こるかもしれない。こんな不可抗力が働くかもしれない。」とイメージを膨らませて、常にフェイル・セーフ的な手段、万一の事態に備えた次善策、危機に陥った際の対応ルール等を事前に検討しておくことが、信頼性の高い施工計画・施工管理につながります。

百年に一度と言われる不況の時代、国際化・情報化・高齢化、そして多様化の時代、筋書きのないテロや犯罪、異常な自然現象、新型ウィルスの流行…。変化の激しい昨今、我々建設分野に降りかかるリスクも常に変化していると言えます。社会に大きな影響を与える我々建設分野に携わる人間としては、常に時代に見合った高い危機管理意識を持ち、予測・予防に重点を置いた先手管理とともに、危機に際しては、スピーディーで正確な情報収集と分析、これに基づく柔軟な判断と的確な行動ができるよう努めたいものです。

阪神・淡路大震災の現場から 危機管理について思うこと



宮 定 章 (A98)

6,434名の命が奪われた1995年1月の阪神・淡路大震災から今年で15年になります。

私は、卒業（2001年）後、神戸市長田区御蔵地区という4.6haの地区で、まちづくり支援を目的に立ち上げられたグループに在籍しています。

地区は、阪神・淡路大震災において、火災により地区の8割が延焼する甚大な被害を受けました。震災当時テレビで映し出された火災の光景が思い浮かべられると思います。

そこで私が、見聞きしたことを元に、危機管理にまつわる話を、書かせて頂きます。

我々のグループは、年間2,000人の修学旅行生や自治体、町内会等を対象に、震災や復興まちづくりの学習を受け入れています。その一場面で、「阪神・淡路大震災で一番多い死因は何だと思いますか？」と、訪問者に質問をします。あの火災映像のインパクトの大きさか、「死因は、火災」と答える方が多いです。

しかし、皆様もご存じのように、窒息・圧死が4,224人（77.0%）です。（厚生省大臣官房統計情報部人口動態統計課・発表より）

原因を明らかにして対策を立てることが大事です。まずは「耐震補強」「家具の転倒防止」です。各救助組織の初動体制の批判も多く指摘されましたが、救助組織が早く駆けつけられても、阪神・淡路大震災のように多くの人が一斉に被害に遭った場合、窒息・圧死した人たちの多くは誰も救えないようです。大規模広域災害では、すぐにはレスキュー隊が来てくれない。ということは、「最初の救助者になれるのは、（そこにいる）助かった人しかいない」。それは家族、近所の人の助け合いで。日頃から近所の人に存在を知っておく“人と人のつながり”が大事です。読者の皆様は、2軒先の家族構成がわかりますか？

また家が潰れなければ、避難や救命活動もしやすいので、火災の危険性も減ります。自分の家の倒壊の有無は、自分の家の事ですが、道路を塞

ぐ可能性等その影響は、自分の家だけの話ではないと思われます。

その後、ようやく皆様の地区でもしている防災訓練が役に立ちます。

それから復興の過程で課題になるのが生活再建。被害にあった状態から、元の生活に戻るのは大変です。我々が活動する住商工混在の下町地域では、15年経た今、従前居住者の1／3しか戻ってきていません。地域生活は激変しています。

危機管理として、今の自身の生活が、どのようにして成り立っているかを把握しておく事が大切です。震災後は変化への対応が迫られます。

●災害の危機管理の継承の難しさ

来訪者に、耐震補強や避難グッズと伝えていますが、多くの事はできない可能性が高いです。震災学習や研修で来られる方も、「実は地震は起こらないと思っている」「思っているけど備えられない」と本音では、言われます。危機管理と一緒に、まちづくりもなかなか必要性を説明されても、地域の方は納得・行動するのが難しい。我々のグループは、工学だけでなく、社会学や心理学の専門家と共に、また住民や現場に来られる皆様自身から、どうイメージしているか等を学ばせて頂いています。被害の原因をしっかりと共有し、対話の時間をしっかりと濃密にとり、少しでもイメージしてもらう時間を作り、納得してもらうことを模索しながら伝えています。

今年で阪神・淡路大震災から15年。10年目より急激に風化しているような気がします。物理学者で随筆家の寺田寅彦も「天災は忘れた頃に来る」と伝えています。読者の皆様の中で経験された方が多いと思われますので、皆様からも次世代の若者へメッセージを伝えていっていただければと思います。我々は災害の継承も危機管理の一つだと思い、微々たるものですが、これからも阪神・淡路大震災の現場で、学生や地域の方々の危

機管理のイメージの一助になればと思い受入を継続しています。

神戸の現場にも是非お立ち寄りくださいませ。

連絡先：阪神・淡路大震災まち支援グループ
まち・コミュニケーション（電話：078-578-1100
メール：m-comi@bj.wakwak.com）まで。



1995年1月17日8:30頃（長田区菅原通3丁目）



1995年1月17日10:00頃
(長田区菅原通3丁目：上記と同じ場所)

危機管理



柏 尚 稔 (A 教)

私は本年度より大阪大学に勤務しており、社会人となって間もない身であり、知識も経験も不十分で誠に恐縮なのですが、せっかく戴いた機会でありますので、私が思うところの「危機管理」を述べさせていただきます。

建築の危機管理と私の研究

危機管理を述べる前に、現在私の取り組んでいる研究を紹介いたします。私が博士時代に取り組んだ研究課題は基礎一地盤系で生じる強非線形現象について、実験を通じて明らかにするということです。この研究の発端は兵庫県南部地震です。兵庫県南部地震は耐震を専門とする研究者にとっては非常にショッキングな地震だったことはご存じの通りです。この地震で記録された地震動は、それまで耐震設計で考えられていた地震動レベルをはるかに超すものでした。ところが、記録された地震動が入力されれば完全に崩壊すると計算される建物に、大した被害がなかったという矛盾が起きました。この原因として考えられたものの一つが基礎一地盤系における強非線形相互作用効果です。基礎一地盤系の相互作用効果は非常に複雑である一方で、関係する実証研究が非常に少ないため、当分野には未解明の部分が多く残されています。以上のような背景を踏まえて、私は図1に示す実験装置で杭一地盤系の強非線形現象を調べる研究をしてきました。実験結果の一例として図2を示します。これは杭に対して繰返し載荷した時の杭周辺地盤の変形状態を示しています。杭の周りが大きくすり鉢状に変形し、さらに杭と杭との間に地盤が滑った痕跡を見るることができます。これらの現象は杭の水平抵抗に何らかの影響を及ぼしていると考えられ、設計に対してどのように考慮するべきかが次の焦点となってきます。



図1 試験装置

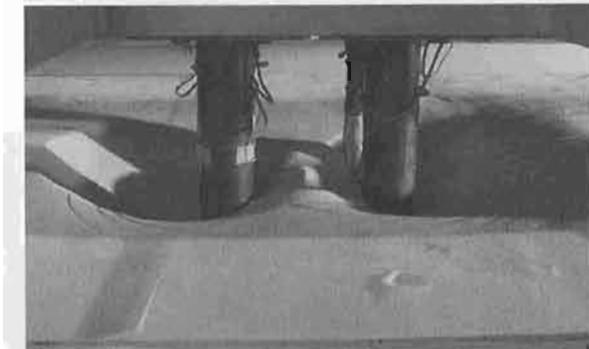


図2 実験結果—地盤の変形状態

建物の地震時挙動を精度良く予測するためには上述するような基礎一地盤系の非線形相互作用現象を適切に考慮することが必要不可欠です。逆を言えば、建物の地震時挙動の予測精度が悪いと、構造設計するときはもちろん、地域の地震被害予測にも、現実との大きなずれが生じると考えられます。地域の住民に地震対策を推進するための指標となる地震被害予測の信頼性が低くなると、住民は何を信じていいのか分からなくなり、本当に地震対策が必要な地域において対策が進まない原因になりかねません。数十年後に発生が確実視されている南海・東南海地震と、それに伴って発生するといわれる内陸直下型地震に対して、人命保護はもちろん、経済的損失も最小限に抑えるためには、建物の地震時挙動の精度良い予測は必要です。私の行っている研究は、大地震に

に対する住民の危機管理意識を高めることにもつながる研究だと考えています。

仕事・私生活の危機管理、危機察知

仕事上では選択を迫られる場面が多くあると思いますが、その時に重要なことは、その選択の重要度を把握して、必要によっては危機を察知し、適切に判断することだと考えています。特に私はのんびりした性格であるため、他の方より危機察知を意識する必要があると考えています。このことは博士時代に失敗した経験から学んだことです。これは仕事に限らず私生活でも当てはまることがあります。例えば、私は結婚を控える身であり、只今結婚の準備のために多忙を極めているところですが、その中で自分で判断できることと、相方の意見を仰ぐ必要のあることと、これらを適切に見極めることは一つの危機管理でしょう。今のところ、大した問題は起きていないため、結婚の準備に関する危機管理は合格点だと思います。ただ、油断するとろくなことがないので、このままの調子で頑張りたいと思います。

最後はとりとめのない事を書いてしまいましたが、結局、上手く危機管理を行うことで、様々な利に繋がることは間違いないと思います。

フェスティバル・ホールへの懺悔

名誉教授 権木亨

古いことながら私どもの結婚は昭和35年の4月であり、家内との交際は昭和34年秋の頃、私の友人の岸田兄のお母さんの紹介であった。交際をはじめて日曜日毎に家内は吉野から京都まで出向いてくれた。今思えば吉野から京都まで約2時間かけてよく通ってくれたと思う。結納も終わり、昭和35年の年明け早々だと記憶しているが、奈良の義姉の家に招かれ、その後大阪フェスティバル・ホールで開かれているベートーベンの音楽会に家内が案内してくれることになった。私にクラシック音楽の音楽会は今でも似合わないが、その時は結婚相手の申し出でもあり、音楽会というのも初めてで喜んでそのお誘いにのった。ところが奈良での夕食時に、誘われるままにお酒を飲みすぎ、また義姉の子供と相撲をとつて暴れたため泥酔した。しかし予約してある大阪フェスティバル・ホールに行くために近鉄に乗ったのはよいが、途端に吐き気をもよおし、途中の駅で一度降りて吐き、それから会場へと向かった。その途中駅は後で聞くと石切駅で、阪大定年後勤めた大阪産業大学に行くのに新石切駅を利用していたことを考えあわせると、何かの因縁があったのかも知れない。酔っているので、家内が音楽会は止めましょうといつてくれたが、私ががんばってフェスティバル・ホールの会場に入った。京都生まれで京都育ちの私は当時フェスティバル・ホールが何処にあるのかもわからず、家内の案内のままに入場したわけであるが、演奏中にも拘わらず何回か立ちあがって便所にいそいだ。演目はベートーベンの交響曲とのみ記憶している。外へ出て梅田の方に行く途中また川べりではいた。今思えば渡辺橋の南詰めであり、今日窓から毎日その場所をみている。このように家内の最初のコンサート招待はさんざんな状態であったが、その後これにこりてか、家内から結婚後もコンサートのお誘いはなくなった。このフェスティバル・ホールは今の勤務先の災害科学研究所がある大阪朝日ビルの向になるが、2009年春から取り壊しが行われており2009年9月現在四ツ橋筋に面した建物部分だけが残っているようである。非常に身近にあったフェスティバル・ホールも超高層ビルに生まれ変わろうとしている時にあたって、約50年前のフェスティバル・ホールでの思い出に浸りつつこの雑文をしたためている。

土壤の自然由来汚染——トンネルの掘削ずりはどうなる？

名誉教授 村岡 浩爾

土木も建築も足を大地にしつかりつけて仕事をするものである。従って常に土壤、地盤と向き合って仕事をする。この仕事は工事中も工事の完了後も安全が第一である。この安全の確保のために、これまで基本的には力学的な安全性が要求されてきた。工事中もその後も、人々が安全に活動することができるような場を確保するためにである。ところが最近これとは別に、人の健康を守るために安全性がこの世界にも要求されるようになった。いわゆる土壤汚染からの安全の確保である。

1991年、土壤環境基準が制定され、現在、人の健康に及ぼすと考えられる有害物質25項目が汚染防止の対象となっている。ところが基準が制定された以上、本来達成されるべきはずのこの物質が、市街地土壤汚染として1970年代以降続々と顕在化され、現在もなお汚染が見え隠れしている。その実態は、土木・建築の諸工事に随分と大きい影響を与えてきたはずである。その後、2002年になってやっと土壤汚染対策法が制定された。しかしこの法は適用上種々の問題があり、従って2010年4月に改正施行されることになっている。一方、大気汚染や水質汚濁の場合は予防の意味を持つ防止法として1970年には施行されたのに対し、土壤汚染は予防も防止もする手だてもないまま汚染が進んでしまった結果、汚染の対策法として約30年も遅れて施行されたわけである。なぜだろうか。

土壤汚染は「見えにくい」「対策が（技術的にも経済的にも）取りにくい」ということがあって、これを逆手に取り、「見えない振りをする」「土地を塩漬けにする（ブラウン・フィールド(BF)化する）」という事態が生じ、現実に土壤汚染の実態が公表されにくく、土地の不動産売買が滞ることが多い。その結果、土地の有効利用が進まず、経済発展にも支障が生ずる。もちろん、このことは住民に不安や不信感をもたらすことにもなる。今回の改正・土壤汚染対策法はこの点の改善に重きを置いたものと言える。

実はこの短文で言いたいことは市街地で見られるような人為的汚染ではない。自然由来に基づく土壤（地盤）汚染である。端的に問題提起をするなら、「トンネル工事の掘削ずりにヒ素や鉛がでてきたりどうなる？」ということである。日本は列島を上げて火山地形の固まりであり、どこを掘ってもヒ素、鉛、水銀といった有害重金属が出てくると言っても過言ではない。もちろんこれらは土壤の環境基準項目に入っているし土壤汚染対策上の指定物質にもなっており、もとは山に眠っている物質であっても鉱山事業、金属精錬事業、これらの重金属を扱う事業などで土地の形質に変更のある行為があれば、認められた汚染物質に対する対策が義務づけられている。早い話が、閉山になった鉱山でも、止まることのない浸出水に含まれる有害重金属に対してほぼ永遠に水処理をしなければならない。

改正される土壤汚染対策法では、汚染対象物質が自然由来であっても人為的行為により環境の場に暴露される土壤については法の対象になるようである（註）。ということは、山岳丘陵地帯などの地山の大型建設工事で遭遇したりトンネルの掘削ずりに含まれる土壤成分中の自然由来の汚染対象物質についても、土壤の有効利用や処分に伴って何らかの汚染対策を講じなければならないことになる。しかし、掘削ずりの場合は細粒土成分はあるものの、市街地の工場跡地の土壤成分と同じだろうか。環境汚染を前提とした場合、岩石と土壤の区別はどうあるべきなのか。

建設事業に欠かせない各種の土壤・地盤工事における自然由来汚染物質の対応が、改正・土壤汚染対策法において未だ条件整備が十分でない面があるようだ。

（註）：これまでの「法」では沖積平野や河口域底質等に含有する堆積型自然由来重金属は、専門家の判断により対策を猶予することができた。

建設産業界のピンチをチャンスに

名誉教授 松井 保

アメリカ合衆国ばかりでなく、日本にもチェンジの波が訪れた。8月30日の衆議院議員選挙で、50年以上の永きにわたって続いた自民党政権が民主党政権へと移行した。その後、組閣された直後の新大臣会見は深夜にまで及んだが、これまでと違って各大臣が自分の言葉で話をしていたので、眠たい目をこすりつつ、ついつい最後まで付き合ってしまった。このとき感じたのは、「政治家一人ひとりが脳細胞を活性化させ、変化の激しい時代に前向きに対応するとともに、その結果には責任を取るべきである」ということである。

民主党のマニフェストによれば、ハッ場ダム中止に象徴されるように、建設産業界にとっては厳しい前途が待っている。最近示された来年度予算の概算要求でも、総額は史上最高であるが、国土交通省関連は10数%の縮減である。実施予算はさらに減額される。建設産業界にとって、バブル崩壊後10数年にわたって、耐えに耐えてきた上での追い討ちである。あたかも、ボディブローを数多く打たれたボクサーが強烈なパンチを食らうようなものであろう。建設産業界は大ピンチであるといつても過言ではない。

しかるに、この10数年の建設産業界を思い起こしてみると、このようになる兆候はなくもなかつたが、最初の約10年間は、常に“待ちの姿勢”で対応してきたようと思われる。その後、現在までの目立った対応は、平成17年4月に施行された「品確法」と平成18年1月に施行された改正独禁法に伴う「脱談合宣言」であろう。「品確法」に伴う総合評価方式は、国レベルでは浸透してきたが、わが国全体の7割近くを占める地方自治体レベルでは道半ばであり、十分な効果を発揮するまでには至らず、また、これら以外の2の矢、3の矢の対応は見られない状況にある。

昨年の構築会たよりも書いたが、このところの建設産業界は、明治維新や戦後改革に匹敵する危機的状況にあり、小手先だけの対応ではこの状況を開拓できないと考えている。このピンチをチャンスとして生かすためには、次世代の建設産業界が活性化する仕掛けを目指して、周到なパラダイムチェンジが必要であろう。そのための具体案となると非常に難しくなるが、日ごろ考えているいくつかを述べてみたい。

民主党のマニフェストに流れている考え方には共感できる点が多い。しかし、基本的に欠落している点は、数10年から100年先を見据えた国家の将来ビジョンである。この将来ビジョンを策定するとともに、これに裏打ちされた「社会資本整備基本法」の制定の必要性が指摘できよう。このことにより、國家プロジェクトの開かれた合意形成が容易になり、コスト縮減のみが叫び続けられ技術が無視される愚が避けられるようになるなど、パラダイムチェンジの根幹であろう。

「コンクリートから人へ」は、公共工事大幅削減の民主党のスローガンである。某大学のコンクリートの先生がコンクリートを悪者にするなどメールで抗議したそうである。一方で、このようなスローガンがマスコミや一般大衆に簡単に受け入れられる世の中であることも認識しなければならない。その意味で、「安全・安心な社会基盤整備」はマスコミや一般大衆向けのスローガンでは必ずしもない。理由は、ひとたび大地震や台風に襲われると必ず犠牲者が出るので、安全・安心が保証されていないのではないかとの批判が出るからである。むしろ「快適な生活に向けた社会基盤整備」を標榜し、不特定多数の国民が快適になつたと感じるような社会基盤整備（たとえば都市における電線の地中化など）を大々的に進めてはいかがであろうか。その一方で、数10年先を見据えて地道な社会基盤構築に努めることは当然である。

そのほか、オリジナルな技術やアイディアのアイデンティティを認め、それらに十分なインセンティブを与える産業構造への転換、今後進められるWTO/TBT協定にも整合が取れるようなグローバルスタンダードに近づけた産業構造への転換などに加えて、技術者一人ひとりが脳細胞を活性化させ、変化の激しい時代に前向きに対応する気概が不可欠であろう。明治の初期に土木の近代化を目指して、命をかけた明治の先人の気概を見習いたいものである。

以上

訪中談

名譽教授 楠崎正也

久しくご無沙汰しております。予てより何か書くように云われて居ましたが、入退院を繰り返すなどで、心ならずも延び延びになっていました。漸くお蔭様で体調も安定し、今年3月に山中、甲谷先生などの尽力で空衛学会の用件に託けて、久しう振りに上海に行きました。

私が最初に訪中しましたのは1980年の冬で、文化大革命騒乱もやっと終息し、海外の情報を吸収しようという気運が高まっていた時期で、同濟大学で教鞭を執っていた同窓の黃孔明君の計らいで、運よく招聘されました。当時はまだ日本人が珍しく、上海、北京、蘇州、杭州などどこへ行くのも女性通訳と案内人が付ききりで、あちこちで熱烈歓迎を受け、大変感激しました。厳しい入国手続きを受け、上海空港に降り立つと、先ず石炭の燃焼排ガスのにおいが鼻を衝きました。人々は殆ど人民服を着ており、女性は化粧気なし、街のあちこちでまだ痰や唾を吐く人を見かけました。道には車が殆どなく、歩行者と自転車が我が物顔で往々來していました。

あれから4・5年おきに訪中し、其の都度近代化が進んでいるのを体験しました。また、中国からの留学生を研究室に受け入れ、私はすっかり中国顔面になってしまいました。しかし、ここ10年程はご無沙汰していましたが、今回突然の訪中です。

一行は山中教授、桃井助教、小林院生、中国留学生の俞君と私の5名でしたが、往路は大和ハウスの子さんの上海単身赴任と重なり、彼女にはその後色々とお世話になりました。上海空港に着き、先ず驚いたのは整備された広大な空港です。また、空港から都心まで時速400kmで走るリニアモーターカーや、バンド（外灘）の向かいにある浦東新区の101階建ての金融センタービルなどすっかり近代化され、ある面では日本を凌ぐ勢いです。昔のように大気汚染は感じませんし、人々の服装は全く日本人と変わらず、ファッショナブルです。街には自転車が少なくなり、縦横に高速道路が架かり、すっかり車社会に変貌しています。

訪中の主目的である上海制冷学会との懇談会では、建物のエネルギー評価や万博後の跡地利用など来年開催される上海万博に関連する研究テーマに関心が強く、大阪万博を経験した構築会諸氏の情報を知らせれば、喜ばれるとと思いました。

講演した同濟大学も昔とずいぶん変わり、高度経済成長で、急増する学生に対応するためか、最新のビルを建てるだけでなく、郊外に新キャンパスを設けたり、学校周辺には大学に関連するレストランやホテルなどがあちこちにあります。また、現在課題になっているグリーン計画ビルやバーチャル・リアリティ技術を駆使した施設などを見学しました。さらに、同濟大学でずっとお世話になった譚教授は省エネを図るため、電力使用量の分析など建物マネジメントを積極的に推進する活動を、整備された綺麗なオフィスのような環境で行っており、阪大と比べ、羨ましく思いました。

最後に、訪中の折に、いつもお世話になりました黃君と范先生（元同濟大学教授）には慌しいスケジュウルでしたので、ゆっくりと旧交を温めることができずに残念でした。黃君は足腰が幾分弱っている様子でしたが、まだまだ元氣で、同窓の皆さんに宜しくとのことでした。

以上、僅か4日間の旅でしたが、印象深いものでした。健康の許す限り、今後も見聞を広めてゆきたいと思います。

私の実験室その後など

名譽教授 脇 山 広 三

昨年、私の実験室として、本物の実験は家では出来ないので Macintosh を 3 台と Windows を 2 台で、実験に相当するコンピュータ解析をしたことを書きましたが、その後も、鉄塔用の铸造フランジジョイントの解析をしたり、ウェブに 6 角孔付きのハネカムビームの力学性状を求めたり、角鋼管柱の座屈を材料の応力ひずみ関係・細長比・初期の偏芯量との関係を求めたり、ボルトとナットの鋼材の降伏点比率を変えて、軸強度に対応する必要ねじ山数を求めたりしました。これらの解析は、どうなるか自分で知りたくて求めたものもあれば、依頼を受けたものもあります。

依頼を受けた場合は、会社の都合で公的な機関があればと求められ、生産技術振興協会に依頼することになりました。この協会は、幸いなことに、五十嵐研究室で研究し学位を持っておられる巽昭夫君 (AD79) が事務局長をされているので、話はスムースに運び、第一期の解析は終了し、報告も出来たところです。

この解析を通じて、次に、エポキシ塗装鉄筋について、相談を持ちかけられましたが、20 年近く前に沖縄那覇市の大城武先生 (CM64) の住宅の建設で、初めて使用したということを思い出し、数年ぶりに大城先生に電話しましたところ、先生は研究を続けるのに、100 社ほどの会社で運営している沖縄ビーシーの工場内に研究室を持たれているとのことで、お伺いすることになりました。沖縄に行くのも東京に行くのと時間は変わりませんが、何かいろいろと気遣いしてしまいます。

沖縄について、まず、大城先生の研究室にお伺いし、沖縄の鉄筋コンクリートの現状やエポキシ塗装鉄筋の使用状況を教えていただきました。3 時間ほどの会合で多くの情報を頂きました。

夕方には、那覇市内の老舗沖縄料理店での会食でしたが、五十嵐研究室で 1989 年に修士課程を修了、現在、琉球大学教授の山田義智先生が加わり、楽しい会話で盛り上りました。

私は建築工学専攻で、大城先生は大学院時代土木工学専攻でしたし、年代も 4 年ほど違うのですが、いろいろと縁がありましたことを少し述べたいと思います。

私がイリノイ大学に Research Associate で参りましたのは、イリノイ大学でボルトの研究を担当していた Chesson 助教授がデラウエア大学のチアマンで出たので、その研究を続けるために Munse 教授の招聘に応じたものでした。

そのすぐ後に、大城先生はデラウエア大学の Chesson 先生のもとに留学され、Phd 取得後、米国で実務的な仕事を数年続けた後、琉球大学の教授で戻されました。

それから数年後、大城先生から、琉球大学の学生を修士コースに受け入れてほしいとのことで、荒川清則 (AM86) 君と前出の山田義智君に受験してもらい、阪大に来てもらいました。また、話は変わるので、大城先生の紹介で、英国の Surrey 大学の Nooshin 教授の開発した立体トラスの自動生成に効果的な FORMEX Algebra を知り、その実用化のために開発された FORMIAN ソフトを我々の Mac で走らせるようにいたしました。このソフトは当時、川鉄建材の研究所におられた今井克彦先生 (AM70) が実用的に利用され、かなりの実績をあげられました。

1990 年 7 月には、彼が中心になって、" Preprocessing and Case Studies in Computer Aided Design of Space Structures" なるシンポジウムを開催しましたし、1993 年頃、湯浅友希夫君 (A92) は Surrey 大学に留学いたしました。

このように、一つのきっかけが次々と繋がっているのを感じています。

さて、私の実験室の方は試験体データ山積みになりつつあり、コンピュータの方は健全ですが、私の頭の中は少し混乱気味となっています。しかし、ソフトウェアの虫取り、ソフトの使い勝手を改善しては、うまく行ったと楽しんでいます。

随想：構造設計は今のはよいのか

名譽教授 鈴木計夫

先日テレビを見ていると、ある装飾品を製造販売している会社の社長さんが“売って儲けよう、儲けよう、ではなく、買っていただけるものを作るよう心掛けています”、と云つておられた。同社の業績が順調に伸びているのは当然の事である。これは儲けることを第一主義とするよりも、お客様の要求・希望を第一義に考えて製品を用意すれば、結果的に自然と会社の業績は伸びる、という“哲学”を表わす良い例である。これは当然とは言え現実社会ではなかなか実行されていない。最近使っている電器製品で次のようなことがあった。

パソコンプリンターの支障：インククリーニングのときに出るインクかすを溜めるインク溜部が一杯になって来たため“その部分の取替えが必要”的サインが出た。そこで、問い合わせたところ、その取替えにはメーカーの工場（長野県）に送り返す必要があり、少なくとも1週間かそれ以上、また約1万円が必要とのことであった。即ちこの期間はお客様はプリンターが使えなくなることをメーカーは考えていない、1万円あれば新品も買えることも考えていない、その溜部分を簡単に取り替える方式にする技術も開発していない、のである。

結局新しいのを買わざるを得なかったが、最近の電気系の技術の発展には目を見張るものがあるにも拘わらず、未だこのようにお客への配慮不足の一面向があることを知った。

電気系でも他に若干の経験があるが、それは省略して、我々建設の分野に於いてお客様がこの様な見方をするとどうなっているのであろうか。お客様・施主と直接接觸するデザインの分野はともかくとして、構造の分野ではお客様の要望・願いに沿っていない設計をしていることを強く感じている。すなわち阪神大震災や建築紛争の場で経験してきた一般の人達の要求を考えて、“お客様の要望を考慮する構造設計の必要性”を強く指摘したい。

社会がこれから建築構造に求めるもの：項目を列挙すれば以下のようになろう。

- ・大地震時にもあまり被害を受けない、出来ればあまり揺れない
- ・地震が終わると殆んど元の状態に戻る（コンクリート造であれば、ひび割れは元のようになり、残留変位=0）
- ・地震後の補修・補強も殆んど無いか、僅かである、さらに
- ・大きな使い易いペランダが欲しい（ただし、その面積は部屋面積には加えない）
- ・一階が、利用し易いピロティの建物が欲しい
- ・増改築が容易で耐久性大であること、等々

これに対する現状：特に構造的には、“全層降伏設計”が原則となっているので各層の梁端が塑性ヒンジとなって壊れる。そのため地震後は基本的に全ての階の補修・補強が必要となる。上記その他の事項にも現時点では対応していない。

これらの解決方法として：

- ・免振構造とする（△価格が高め、その層は建築空間として使いにくい）
- ・Soft-story 構造とする（上記△が解決、杭基礎の場合はそのままこの構造に利用可能？）
- ・プレストレスの技術を利用した“圧着工法”とする（鉄骨構造もこの技術で梁端の溶接破断の危険性が解消）
- ・“全層降伏設計”は今後徐々に原則から外し、必要最小限に利用する
- ・レベル3地震入力を正式に設計に考慮する（レベル2入力は断面設計用に、このレベル3は変形能力用に使う→コストは余りupしない）
- ・塑性域の変形能力を安全に確保し減多に来ない大地震に対してはこの塑性域を積極的に利用する
- ・塑性化による“減衰効果の増加”を積極的に利用（=“限界耐力設計”的思想）、等々。

以上、先日講演の機会をえていただいた「阪大建築構造研究会」での話しの一部の集録です。

歴史的な景観保全

名誉教授 柏 原 士 郎

「トキを焼き鳥にして喰ってしまうようなこと」とは、今年2月に東京中央郵便局の建て替え計画に直面し、某元総務大臣が発した言葉です。記憶に止めておられる方も多いでしょう。建築の専門家の間では重要文化財に登録されても可笑しくないと言う評価を得、日本建築学会でも何度もその保存を訴えてきました。それだけに、門外漢の大臣の発言が、モダニズム建築の文化財としての価値について少しでも国民の関心を高めることに寄与したことは、政治的な意図とは別に価値ある発言でした。10月になって、世界遺産級の歴史的景観、アニメ「崖の上のポニョ」の舞台ともなった「鞆の浦」の埋め立てに、待ったをかける画期的な判決が出ました。いずれも、「保存」か「開発」か、「景観」か「生活」かが問われる難問で、この時代の大転換期に、私たちが真剣に考えるべき課題が与えられたように思われました。市場原理や利便性、効率性にウエイトを置いた現代社会の行動原理に意義申し立てを行った出来事として、微かな希望の光を見たような気がしました。「不便忍んで生きる哲学を持て」という宮崎駿映画監督の言葉も重要なヒントを含んでいるようにも思われます。しかし、判決がその根拠を「歴史的景観は国民の財産」としたからには、当事者の住民の生活の質を保証する国家、国民の自覚と支援が伴わねばならないでしょう。優れた歴史的建造物や景観を保護するためには、国の文化政策と同時に英國のナショナルトラストのような国民の歴史的環境保全への認識を高める必要があります。

このようなことを考えながら、今年も時間を見つけて、製蝋の町、内子（愛媛県）、鯖街道の宿場町、熊川（福井県）、醤油の町、湯浅（和歌山県）、東海道の宿場町、関（三重県）を訪ねました。いずれも国的重要伝統的建造物群保存地区に指定されたものです。この制度は1975年にスタートし現在85件が指定されています。毎年2、3件指定されていることになります。地区の種別は武家町、商家町、宿場町、門前町、城下町、寺内町、山村集落、農村集落、港町といった地理的なものと、鉱山町、製磁町、製蝋町、製塩町など、土地の産業に特色をもつものなど多様です。指定区域の面積も、最も広い長野の妻籠宿の1245haから京都の祇園新橋の1.4haと幅があり全体の70%が20ha以下とヨーロッパの歴史的景観保存地区より相当狭いのが現状です。その価値に気づき、保存すべきだと考えた時には既に破壊、開発が進行してしまっていたというのが実情でしょう。不思議なことに、先の「鞆の浦」は未だに指定されていません。おそらく開発派と保存派の永年の対立が影響しているためでしょう。今回訪れた地区は住民や行政の方々の努力により、歴史的景観が保存され、その見事さに感動を感じました。しかし、熊川や関の宿場町は、再現が見事なだけに、何か映画村のようで空しさを感じました。「トキを剥製にして残る形で・・・」といった空しさです。生活のにおいが感じられる生きた歴史的景観を、如何にすれば再生し生活環境の中に実現できるか、その方法を探らねばならないと思いました。



図1 関宿の街並み



図2 熊川宿の街並み



図3 内子の街並み

安心って？ 安全って？

名譽教授 橋 茂三郎

以前にミュンヘンで撮った写真-1を見ていただきたい。池の端に浮輪と梯子が置いてある。子供が池に落ちたらこの浮輪を使ってください、冬にスケートなどをして氷が割れた時には、この梯子を使って助けてあげて下さい、と書いてあった。



写真-1



写真-2

写真-2は豊中市内の公園の、立ち入り禁止の掲示とフェンスだ。詳しく調べたことがないので何とも言えないが、どうも「安全・安心」についての考え方はドイツと日本ではちょっと異なるようだ。多分、日本なら浮輪と梯子だけでは「安心」できない「無責任」だ、という声があがるのではなかろうか。

安心といえば、写真-3も見ていただきたい。ミラノに建つベラスカの塔だ。頭でっかちの上層部分は頼りなさそうな頬杖で支えられている。この上で住んでいる人は安心なのだろうか？ 私だったらお尻がこそばゆくてとても住む勇気はない。1階にあったバーの名前が「Crazy Tower」で、さすがのイタリヤ人できえCrazyだと感じている人もいたようだ。(今でもそのバーがあるかどうかは知らないが)

ところで「安心」の尺度といったものはあるのだろうか？

例えば屠殺場にひかれる牛のような気持ちで病院に行く。「異常ありませんよ」と医者に言われたとたんに「安心」して菜の花畑で蝶が舞うような気分になる。又、猜疑心の強い人は医者を信用せず「それでも安心できない」と病院遍歴をする人もいる。検査データを見せても、こんなへっぽこデータに騙されない、と疑う。あたりまえではあるが「安心」の尺度はこのように「人や時に応じて」女心のようにコロコロ変わる。

では「安全」のほうはどうだろうか？

例えば耐震安全基準は時代とともに変化する。少しずつ進歩はしているが、時には退歩したり硬直化した潔癖症が基準の精緻化および細分化を推し進めて設計者を悩ませる。巨大地震こそが真の耐震安全性の判定者となるが、惜しむらくはそれでは手遅れで、ただ次に進む一步となることを願うより他にない。

さて、私の近況については、日本総合研究所から分離した（株）JSOLで技術顧問をしており4年目を過ぎようとしている。家賃がわりの一つとして“橋サイバー研究室”をネット上に開設した。Google や Yahoo ! JAPAN で二つの検索キーワード「JSOL」と「橋サイバー研究室」を入力し、検索結果のトップをクリックすると、少しテレクサイ私の写真と15編ほどのコラムのリストが表示される。リストから適当なものを選んでクリックしていただければ読める。言葉は放たれた矢のごとしというが、ビールを流し込みながら書いたのもあるので、後悔の種にならなければと危惧している。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝をお祈り致します。



写真-3

当方は神戸地震の翌年に阪大定年になりました。大学の学術活動を示す各種の出版物が名譽教授にも配達され、大学の近況を知ることができ、また、在宅のまま、附属図書館提供の電子ジャーナル・アクセスサービスをうけることができ、構造研究の世界の動向等を即座に知ることができます。ありがとうございます。

この8月16から20日まで、鋼構造（建築・橋梁）の耐震挙動の国際会議（STESSA 09）がフィラデルフィアであり参加してきました。当方が半世紀近く前に、数年滞在したLehigh大学（会議場から北100キロ）の大型構造実験研究所見学者が国際会議のプログラムの一部としてあり、ホームカミングとなりました。旧友らとの再会に懐古のときをもち、一方、若い連中との交流からエネルギーをもらうことができました。

以上、近況まで。

名譽教授 福本 哲士

福井工業大学への5年間の毎週出張の生活に終止符を打って、4月1日より立命館大学客員教授として勤務しております。最低、週に1日の出講ですので、これまでに較べて自由度が増え、快適な環境になっています。ただし、新規の授業の準備や大阪における活動の増加など、まだ定常的なペースにはなっておりません。近い将来には、淀屋橋のオフィスに居る時間も増えてくると思っています。

9月末から10月にかけて約2週間、エジプトに行ってきました。アレキサンドリアで開催された第7回国際地盤工学会議に出席しました。この会議は、4年前の前回は大阪で開催され、副実行委員長を務めたものです。また、カイロ大学とアルアズハル大学で講演をしてきました。小生は、エジプトからの3名の留学生に博士号の指導をしましたが、アルアズハル大学のBahr君が教授になっており、コンサルタントとしても成功を収めているようです。久しぶりの再会で家にも招待され、ご家族とともに非常に楽しい時を過しました。

その前後にはエジプトの遺跡等を訪れました。エジプトの白砂漠でオープンエアの中で1泊し、サンライズ、サンセット、満月、満天の星に感激しました。また、アブシンベル神殿を訪れました。寺院の奥のラムセスII像まで光が差し込む日が年に2回ありますが、その日より10日ほど早かったので、隣の像に差し込む場に居合わせることができ、感動的でした。その後、アスワンハイダムでできたナセル湖クルーズ（3泊4日）でゆったりと至福のときを過ごしました。

名譽教授 松井 保

昨年夏、後輩の方々が開いて下さったあるお祝いの席で、「森の中の梟のように、世の移り変わりを見詰めながら静かに過ごしたい」とご挨拶しましたが、その後、身辺に格別の事もなく、読書と散策の平穏な生活を繰り返して居り、まずは有難いことと感謝しています。

ただ友人知己の訃報に接して淋しさを覚え、とりわけ後輩の不幸に心の痛みを感じることが増えてきました。

高度経済成長の挙句の果てに厳しい競争社会が展開し、若い方々がご苦労なさっていることは腹立たしい限りですが、どうか健康専一にお過ごし下さい。

名譽教授 五十嵐 定義

本文欄の随想に書いたようなことを最近ますます痛感しておりますが、“全層降伏設計”の代わりに例えれば“圧着工法”にすべきと考えている人は、元建築学会会長の先生も含めて結構多いことを付け加えておきます。

倉本先生にもご活躍いただいた、コンクリート工学協会に設けた“ピロティ構造の耐震対策研究委員会”も2年の活動を終え、9月末に報告会を開きました。これからその設計指針（案）、また高強度鉄筋緊張のPRCの設計指針（案）、手縫めPC工法の設計施工マニュアル、等の作成準備、さらにはPC構造の啓蒙活動、耐震診断における種々の問題点、司法支援関係、等々、福井工大を”無罪放免“されて自由の身となりましたが、いろいろ課題を抱えている状態です。

日中建築技術交流会は名誉会長として、また建築学会ゴルフ同好会も名誉会長としてこれは気軽に参加しています。サッカーは年一回の磐田での試合に向けて本格的準備？の段階です。

名誉教授 鈴木 計夫

お陰様で元気になります。

先日、2009年10月3日（土）の「第一回 阪大建築構造研究会」に出席し、久し振りに吹田キャンパスを訪れました。「阪大本部前」バス停から、S1棟までの共同実験棟横の道もきれいに整備され、並木道の両側には新しい建物が建ち並んでいて、見違えるようでした。

研究会は、U2棟3階の講義室に百名以上の人人が集まり、なかなかの盛況でした。各講座（現在では研究領域）の紹介や、鈴木計夫名誉教授の講演の後、院生・若手の先生方の研究報告と盛り沢山でしたが、分かり易い発表で、活発な質疑とともに楽しく拝聴しました。

その後は、懐かしい学生食堂での懇親会となり、スタッフの皆さんや卒業生の方々（在学中の諸君も多くいたようでした）と、様々な話で盛り上がりました。

阪大退職後10年近くになりますが、講義やゼミ、卒論・修論発表会、食堂での談義、果ては講義室での入試監督など、キャンパスでの種々のシーンを思い出させてくれた午後の半日でした。

今迄になかった大変ユニークな企画で、来年以降、卒業生の話も加えるとのことですので、楽しみにしたいと思います。

お世話を下さった先生方にお礼申し上げます。

名誉教授 井上 豊

教職員、卒業生、在学生の皆様、お元気でご活躍のことと存じます。

定年退職して1年6ヶ月程経ちました。現在は構造性能評価、耐震診断判定、鉄骨加工工場の大臣認定審査、歴史的建造物の保存修理等、各種の委員会委員を務めさせて頂いていますが、教員の先生方や卒業生の皆様とはこれらの委員会等で大変お世話になっています。建築を取り巻く環境は非常に厳しいものがあり、私どもにもひしひしと感じるときも増えて参りました。しかし、建設は未来永劫、無くなるものではありません。将来に夢をもって着実に夢んで行きたいものです。構築会の益々のご発展をお祈り致しております。

名誉教授 甲津 功夫



《卒業 50 年》

卒業後の 50 年を顧みて

清水 正貴 (C59)



社会人となって半世紀、以来今日迄多くの出来事に出会い、その都度貴重な体験を重ねて來たが特に印象に残っているものを年代順に辿ることとする。

私達が卒業したのは昭和 34 年でこの年を起点に考えると、丁度この頃、我が国は戦後復興期に入り経済の高度成長、所得倍増計画が始まった時であった。4 月には皇太子殿下の御成婚があり、妃殿下の美智子様は阪大学長正田建次郎先生の姪御さんであった。

御成婚の馬車のパレードを新入社員の研修現場のテレビで拝見し心から祝福した事を思い出す。

慶事の次は災害、同年 9 月 26 日深夜に伊勢湾台風の直撃をうけ現場（長野県大町市、関電黒四第二工区）が水没の危機にさらされ、付近の河川の水位を見廻っている最中に漆黒の暗の中、叩きつける雨に打たれながら偶然関電に入社した同級生の竹村陽一君と卒業以来はじめて劇的な再会をした事が忘れられない。昭和 38 年クロヨンダムが完成し、池田首相を迎えて竣工式が催され NHK テレビで全国に放映された。この式典は戦後の日本の復興を象徴するような大イベントであった。

続いて昭和 39 年には東京オリンピックが開催され、東京を中心とした都市整備や東海道新幹線、名神高速道路等のインフラの整備が急ピッチで始まり先進国の仲間入りを果すべく奮闘努力した時であった。

昭和 45 年には大阪で万国博覧会が開催され、大阪北部の千里丘陵を中心に大規模な開発が行われ、住宅、道路、鉄道、商業施設等が周辺各地で整備された。同時に大阪湾岸で進められていたベイエリアへのアクセスとして港大橋の建設が始まった。これは大阪港の軟弱地盤に世界最大の RC 潜函基礎を沈設する難工事で、私は主任技術者としてこの工事に挑戦することになった。

幸い恩師伊藤先生が企業者である阪神高速道路公団の技術委員会のメンバーであったためいろいろ指導をしていただいた。

潜函掘削が終りに近づいた頃、世間で学生運動が激しくなり、日本赤軍が人質をとって浅間山荘に立て籠り、銃撃戦となり警察官が殉職する大事件が起きた。事件の現場を工事用テレビモニターで見ていたが、阪大では当時の伊藤富雄工学部長を教室に監禁するという不遜の輩がいたと聞いている。我が国全体が復興ブームに沸いている間に社会では陰の部分が顕在化して來た。即ち公害問題、自然破壊工事災害等が頻発し一般市民の反発を買う事になった。この諸問題を解決するため新工法の開発、機械の改良、計測機器の開発等真剣に取り組んで來たと思っている。私の最後の現場生活は本四公団明石海峡大橋の橋脚の施工法を検討するための調査工事（舞子浜沖）であったがこれを期に管理部門に入った。以後 67 才で職を辞し、卒業以来 50 年の歳月を過ぎたが現在も元気に悠々自適の生活を送っているが、日々感じている事は、現在のこの平穏な生活が出来るのは恩師伊藤先生を始め構築工学科の諸先生、先輩、友人のおかげであると云うこと、これに尽きると思う。一方家庭にあっては仕事に夢中になっている私に代り家庭をしっかり守ってくれた妻にも心から感謝している次第である。

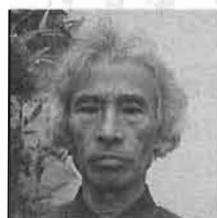
卒業後 50 年の生活を総括すると、

「我が人生に悔なし」の心境である。

《卒業 50 年》

卒業後 50 年

木村 公之 (A59)



C・A59はよく群がります。ゴルフも旅行も仲良く楽しんでいます。この秋(9/28.29)は、50周年ということで箱根・伊豆下田方面を竹村・谷の幹事が企画し24名(内夫婦5組)が参加しました。昨年(9/29.30)は清水・三吉の世話で奥飛騨温泉郷を、一昨年(10/3.4.5)は任田(宮崎在)の宮崎神話の国巡りとゴルフ大会の周到なプランで伊勢海老を堪能し夜は品のよい居酒屋で気炎をあげました。この他にC・A58と合同で「沙羅の会」という20年近く続いている集いがあります。これは6月の梅雨時期に日本の湿気をしつつと味わおうという趣旨のもので初回は村岡・木村が立案し有馬温泉で沙羅の木の許で一弦琴を鑑賞しました(H4/6/24 雨)。今年は上根(鳥取在)が湯村温泉砂丘付を考えて日本海のとび魚のお造り(絶品!)と大乘寺(応挙で有名)で舌と目を刺激しました(6/24.25 曇)。345花縁会というC・A S33・4・5・6・7・8に亘る年2回のゴルフ会も続いています。卒業50年ですから年齢は73歳前後であり幼少壮老(初期)のそれぞれ同時代の人生体験と共に話題を持ち合わせており、各人少しずつ違う価値観とが交じり合って話はいつも盛り上がります。構築という社会基盤分野に関わってきたということが更に絆を強めているのでしょうか。

この73年の倍の146年前はどのような時代だったのでしょうか。遠いようで近い・・・。

ペリーの浦賀来航が1853年。日米和親条約1854年。日米修好通商条約1858年同年相次いで日蘭・日露・日英・日仏間に修好通商条約締結。スエズ運河建設着工・リビングストンが南東アフリカ(ニアサ湖)到着・ダーウィン「種の起源」・ミル「自由論」が1859年。桜田門外の変・米大統領に共和党のリンカーンが当選したのが1860年。ハリス米大使を助けた秘書兼通訳ヒュースケン(蘭)の暗殺・南北戦争が1861年。生麦事件・榎本武揚・西周等幕府最初の海外留学生渡蘭・ユーゴー「レ・ミゼラブル」が1862年。薩英戦争・上海共同租界成立・ロンドン地下鉄開通(世界初)が1863年。南北戦争終結・奴隸制度廃止が1865年・・・等々年表を繰っていると切がない。時代の流れを記憶(受験勉強のお陰か)をたどりながら反芻するのも一興です。最近外国人から見た幕末前後の日本及び日本人に関する記述を2・3読みました。①オールコックの江戸(中公新書)②シュリーマン旅行記 清国・日本(講談社学術文庫)③日本奥地紀行(平凡社ライブラリー) イザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読む(平凡ライブラリー)。当時のわが国の庶民は異国人には相当優秀に見えたらしい。反して役入たちは頑固で柔軟性に欠け馬鹿とまで言われながら賄賂を頑なに拒むことには感心しています。質素な生活にも拘わらず庶民の明るい表情、勤勉さそして豊かに暮らしている様子に驚嘆し逆に彼らの貴金属や贅沢な調度品に憧れるモノ中心の生き方には反省すらしています。

三種の神器を経て工業化住宅の普及で便利な生活ができるようになりましたが、個人的には気になることがあります。畳の部屋・縁側がなく床の間の存在感がうすく小便器が洋風便器に置き換えられバリヤーフリーということで玄関の上り框がありません。衣食足りて礼節を知るといわれますが、昨今の若者の因人ルックは将来の日本を示唆しているようで頂けません。食事も



果物ナイフしか使わず手間をかけたものは少ないのではないでしょうか。家事・料理は認知症予防に効果があるといわれています。デパ地下やスーパーの食品売り場は宇宙食とペットフード売り場かと見紛う様相で洋菓子コーナーだけが輝いています。

我々日本人は最近手を合わせることが少なくなりました。神に対して仏に対するとして食べものをいたたくとき。

50周年の旅では下田を訪ね、ハリス・唐人お吉の記念館（三ヶ所あります）でヒュースケンも登場させての実話として説明をうけました。軍人のベリー提督に対して民間人の敬虔なクリスチャンでフェミニストであったハリス。小説・戯曲・芝居で有名な「唐人お吉の物語」は事実とはかなり違っていました。ある日ハリス（53歳）は体調優れず看護婦（当時わが国にはいわゆる看護婦はいなかった）を役人に頼んだのだが、役人が情事と解し奇貨おく可とお吉を差し出したのですが、実は大変な酒色にすさんだ女でその上腫物を脂粉で隠していたのがバレ、三日で家に帰されます。「一度異人館の門をくぐった以上は世間に疎まれ且つは向後の洗濯女にも差し支える」と慰謝料下付の嘆願書が出された（その証文が残っている）のでハリスは30両の解雇手当を与えています・・・。日米修好通商条約締結11ヶ月前のことです。有能なヒュースケン（ハリスより28歳若い）は仕事もやるが女も好きでした。その2年半後ヒュースケンは攘夷派に暗殺されました・・・。

50周年組は75歳のバリヤーをクリヤーすべくこれから一層頻繁に群がることになるでしょう。恒例の忘年会では男の料理と老老介護が話題になるでしょう。

だらだらとシマラヌものとなってしまいました。

《卒業40年》

卒業40年を振り返って

油谷 進介 (C69)



私たちは構築工学科最後の卒業生であり、また、東野田校舎最後の卒業生です。

最近は政権交代で、公共事業も改変の大波の下にありますが、私たちの学部から大学院にかけても激動の時代でした。日米安保条約改正やベトナム戦争がもとになった全国的な学園闘争（その中で全学卒業式が中止）がピークを迎える一方で、人類初の月面到着、大阪国際万博が開幕し、高度経済成長が始まって、現在の中国のような活気に溢れた時代でした。

臨海部の重化学工業地帯の建設、新幹線や高速自動車道や黒四ダムの建設等、土木技術が脚光を浴びる一方で、水質や大気等の環境汚染が問題になりつつありましたが、経済優先の時代であったと思います。

このような時代を背景として、就職についても、土木専攻卒業生33名のうち（大学院に進学した11名を含めて）建設会社に16名、公務員に7名、鉄鋼・橋梁メーカーに5名、コンサルタントに3名、教員・研究所に2名と、現在では考えられないほど多くの卒業生が建設会社を選んだ時代でした。

私たちの同期の特徴として、入学年次が1学年上のものが多く含まれるということです。彼らは、はじめておとなしいという阪大生のイメージを超えて、



ある意味で世事に強い個性的な学生が多かったと思います。

私自身については、71年に大学院を修了し、当時の運輸省に就職して以後26年間、全国各地を転勤しました。仕事は港湾・空港に関連するものでしたが、各地の風土や人々の気質の違いを肌で感じ、仕事のみならず生活面において多くの刺激と洗礼を受けました。

土木の仕事は、技術面に限らず政治や社会との兼ね合いが大きな部分を占めますが、これも様々な失敗と経験から教えられました。また、問題解決へはいろいろな道筋があることや時間が重要であることもわかりました。

特に、予算要求や新規制度要求から事業実施計画作成、各種調査設計、工事の実施とそれにともなう漁業補償や用地買収など、専門性とともに総合的な能力が求められます。

転勤や新しい部署に就くたびに一から対応する必要があり、故前田先生（橋梁工学）の「君たち、勉強しているか？」という言葉を常々思い出していました。

私は50歳で、役所を早期退職し、その後現在まで13年間建設コンサルタント会社に勤めていますが、その間に時代は激変しました。

いわゆる天下りが民間会社にとってメリットがある時代では最早ありません。O Bとして真剣に自分の役割に取り組まなければ存在価値を認めてもらえない時代になっています。

最後に'69学部卒業組の同窓会について報告します。

運輸省を辞め大阪に戻ったとき、ちょうど学部卒業後30年でしたので、記念行事を平成11年10月16日に開催することになりました。

東京在住者を含めて12名が発起人となり、大阪に戻った私が代表を務めることになりました。当初、建築と一緒に開催することも考えましたが、土木教室の先生方を招待したいということになり、とりあえず土木卒業組だけで開催することになりました。室田先生は逝去されていましたが、伊藤先生、前田先生、榎木先生をはじめ現職の先生方を含めて9名の先生方をお招きして26名（東京8名、名古屋1名）の同窓会が会し楽しく時間を過ごしました。50歳を過ぎ、各人が企業や官庁の幹部クラスになり、これを皮切りに毎年同窓会を開催しようということになりました。また14年の第4回からは建築の卒業生（代表北村君）も参加し、名実ともに構築工学科の同期会になりました。幹事は土木は井上君、白井君、林君、建築は上田君、北村君です。

今年の会合はちょうど卒業後40年で、私たちも同窓の半分以上が退職することになるようです。ただ、自己実現をなお求めるもの、社会への貢献を追い求めるものなど、各人の生き方も多様化しており、互いの近況報告や思いなどを交換する場として、極力続けたいと考えております。



《卒業40年》

来し方、行く末

大津 俊雄 (A69)

神戸国際大学経済学部教授
大阪大学外国語学部非常勤講師

（株）アーバン・アンド・マネジメント

1 時代の背景：1960年代の日本は経済の高度成長を果し、世界に仲間入りした象徴として'64東京オリンピックと'70大阪万博を開催した。建築の学生は丹下健三の優雅なパビリオンにあこがれ、土木の諸君は黒部第4ダムの男らしさにあこがれて進学してきた。やがて急成長の負の現象として'73オイルショックや産業公害が生じて成長は鈍化するが、都市への人口集中による道路・住宅など施設不足の解決には、この後10数年かかる。更に田中内閣の列島改造論により、土建パワーがニーズをリードする時代となる。エコとか市民などは、まだ言葉すらなかった。

2 学生生活：女性にもてるという理由だけで私は建築コースを選んだが、すぐに不適性は露呈し、やがて勉強もせず運動に明け暮れることになる。つまりスポーツ、学生運動、文化活動。当時の世界は米ソ冷戦下でベトナム戦争が激化し国内も安保など左右の政治対立が激しい時代であり、インテリたるものは長髪でフォークを歌い、マルクスの資本論を脇に社会矛盾を告発し、来るべき理想社会を描くのがオシャレであった。私も自分の能力は差し置いて、学外で伸びびして青い不満を解消していた。大学時代に一切勉強はせず以後無頼派となるが、青春のモラトリアム期に世間と海外に触れた事が人生最高の師となった。

3 大学の教育：4年次のゼミは都市計画を選んだので、大久保先生（現阪大名誉教授）の指導を仰いだ。先生は住宅公団の平城ニュータウン建設所長であって、勤務帰りに立ち寄って下さるので、まるで夜学であった。京橋キャンパスは飲み屋やバチンコ屋に囲まれ、ゼミの始まる夕方にそこを通り抜けて来た先生はもう出来上がっていて、皆を笑顔で眺め回すとすぐにゼミを切り上げ、学生を連れて立ち飲み屋の暖簾に肩を突っ込むのであった。各自100円玉をカウンターにたたきつけて2級酒をグイッとあおってハイ解散。それ故先生から技術的なことを教わった記憶はない。しかしheart and mindは何故かしっかりと植えつけられていて、社会問題への不満を都市問題の関心へと向けて下さり、その後の私の方向付けをして頂いたようだ。この手品が何だったのか、自身が教師となった今でもこの種明かしを追いかけているが、先生が「オヤジの背中」を示してくれたからと理解している。

4 ビジネスの限界：70年代の都市はインフラが大混乱していたので都心整備が急務となり、再開発手法が社会問題を解決する黄金の刀に見えた時代であった。その計画事務所に十数年勤務し、私も私鉄駅前を数々担当してそれなりの充足感を得たが、矛盾の解決よりも拡散を感じてそこを卒業した。80年半ばに都市開発のコンサルタント事務所を創立した。その後バブル経済が始まり、京阪神の大プロジェクトの構想作りに多々参画して全能感を覚えた。しかし近年それらの破綻も伝え聞き「三十年しか持たない構想では、サステイナブルとは言えないな」と感じ、景気や政治を超越した都市経営は無いものかと模索している。

5 阪神大震災で変革：'95震度7でマンションの壁がバリバリに崩壊する被害を受けた。神仏を恨みながら市民の自立を信じて焼け野原を駆け巡り、ボランティア活動をし、復興案を立てて事業化した。その時の主体をNPO法人化

した。「立ち上った人々がアソシエーションを形成し、地方分権を行い、ガバナンス社会に、、」と構想もしたが、EUと違って市民社会の歴史のない日本ではまだ空想に過ぎない。「半歩前進できたが、宿題が半分残った」と複雑な思いを抱きながら、震災の跡形もなく再建された街並みに住んでいる。NGOで海外支援にも行ったが、無力感も大きい。（全国建築学生会議の人脈が復興に役立ったことを有難く思った。）

6 人生の総括：元気で仕事が出来るのは後何年か。世に奉仕できる仕事を最後1つでも残せるのか。今は時間との勝負で生きている。学生時代に勉強しなかった反動で、今や勉強が趣味である。「政治体制と都市の意味の歴史的変遷は？ 公共哲学は社会規範たりうるか？ 社会的起業は次世代を切り開くか？」等。世界の歴史と経済への不勉強を後悔しながら、人生のまとめ方を脱んでいる。グローバルに変化する近代の渦の中で「建築・都市系の大学教育はどうあるべきか」こちらも難問であろう。

《卒業 30 年》

阪大土木 C79(S50 入学) 卒業 30 年会を開催して

大本 和弘 (C79)



今年3月で卒業30年と漠然とは意識していたが、会を積極的に開こうとは個人的には考えていなかった。それが、急遽30年会開催が決定されたのが3月銀座のビール屋で恒例の東京会いわゆる飲み会をやっている最中であった。この東京会 자체が現在金沢在住の北川氏が東京に転勤中の10年近く前に開催を呼びかけたもので、現在年に3回程度開催し、毎回10名近くが集まる会となっている。北川氏は関西でも同様の会を催すきっかけを作ったと聞いており、C79の同窓会関係では氏の功績によるところが大きい。

この3月の東京会に集まっていたのが7名で、この時に幹事長大本、東日本担当幹事児島氏、そしてそこに参加していない関西在住の大西宣二氏にも電話をかけ西日本担当幹事を引き受け頂き、会を6月6日から7日にかけて有馬温泉で開催することも決定した。私が幹事長を引き受けたのは、本来そのような任に当たるほどの人間ではないのであるが、東京会の幹事を北川氏、松田氏に任せていた手前、贅罪の意味も込めて引き受けた次第である。昭和50年入学は40名+シンガポールからの留学生1名の41名、それと留年されて我々と同じ卒業年次となられた数名の方々にも声をかけさせていただき、総勢22名の参加を得る次第となった。結局、連絡の取れなかつたのはわずか3名であり、幹事の児島氏、大西宣二氏には本当に頭の下がる思いで一杯である。

6月6日当日、私自身は早めに到着し、皆様をお待ちしていたのであるが、30年ぶりという人も数名はいたにも関わらず、やはり面影は残っているもので、自然と名前が出てくるのには我ながら驚いた次第である。

有馬温泉特有の金泉、銀泉でひと風呂浴びた後は、2時間飲み放題の宴会に入ったのであるが、30年ぶりの再会を果たした御仁もあり、再会を懐かしみ、ひとしきり酒を酌み交わした。宴会中に近況を自己紹介する予定であったが大人数の参加となつたため、個人が自由に席を移動する方法で近況を報告しあい、欠席者からの近況報告も児島幹事が事前に準備し回覧された。ほ



ろ酔い気分の1次会も終わりを迎える、撮影したのが以下の集合写真である。皆それが30年の年輪を感じさせる老け方をしているのであるが、一人、中村雄二郎氏（写真後列一番右の眼鏡をかけている御仁）のみが30歳で通る風貌を維持されており、学生時代と変わらぬシャープさを有しているには驚かされた。この後、2次会はカラオケ、3次会は大部屋に移り、午前2時ごろまで語り合った次第である。

卒業後30年が経過し、体型、頭髪等、外見は多少変わったところはあるが、頭の中身は30年前と何ら変わっていないことを確認したひと時であった。

新型インフルエンザの日本上陸が初めて神戸で確認され、いろんな風評被害が有馬温泉をも襲っており、当初参加予定だったシンガポール在住の留学生Quek氏の日本訪問がかなわなかったのは残念でならない。

土木と全然関係のない職業に就いている人も数名いたが、大部分が多かれ少なかれ土木に関係している職業に就いている。昨今の土木離れ（我が阪大土木も学科名が変わってしまった…）、公共事業批判は悲しむべきこともあるが、土木の結束は固いものがあると再確認しあった卒業30年会であった。

5年後の北陸地方での35年会を約束し、6月7日朝、皆それぞれ帰途に就いた次第である。

阪大土木万歳！



《卒業30年》

建築を取り巻く社会的枠組みはかわった

石丸 信明（A79）



高度経済成長時代の余韻が残っていた1975年に、入学した。入学した年には、年間1万2千円が3万6千円になる学費値上げに反対するため、全学ストライキが行われ、何ヶ月も講義がない状態が続いた。結果、大学には3年と少しで、卒業した。

私自身は、組織事務所、アトリエ事務所を経て、17年前に独立し、現在設計事務所を経営している立場になっている。何を根拠に設計するのかが見えない不安を孕みながら、日々の活動を行っている。

20世紀から21世紀の変わり目に、社会は激変した。さながら、現代史の中に個人がさまよい、右往左往しているかのようである。

私たちの学年は、職業的自立をはかる時期に、この激しい世の流れに晒され、

あるいは抗い、自らの職能を作り上げてきたともいえる。建築も時代とともに変わることもある。建築は経済および政治の産物でもある。

1970年大阪万博開催 1976年南北ベトナム統一 1978年日中平和友好条約調印 1985年日航機御巣鴨山墜落事故 1987年国鉄民営化 1989年ベルリンの壁崩壊 1989年天安門事件 1989年大阪花の万博開催 1990年湾岸戦争 1991年ソ連邦崩壊 1995年阪神淡路大震災 1995年地下鉄サリン事件 1999年欧州連合単一通貨ユーロ導入 2000年9.11同時多発テロ 2005年福知山線脱線事故 2006年耐震偽装事件 2008年北京オリンピック開催 2008年リーマンショック 2009年民主党政権樹立

さらに経済をみてみると、石油ショックから始まり、バブル経済、その崩壊、リーマンショックとその浮き沈みに、とりわけ建築の仕事は、その影響を受けてきた。

私自身は、阪神淡路大震災での被災の経験が、その後の設計活動に大きく影響を与えた。住んでいた鉄筋コンクリート造9階建てのマンションが中層破壊をおこし、家族とともに避難生活を強いられた。また、関西建築家ボランティアに参加、応急の診断士となり、壊れている建物の診断判定を多くおこなった。数多くの建物の被災現場に立ち会ってみると、ひどい状況であった。建築技術がきちんと使われていない。技術に対する判断ミス、コスト優先、メンテナンスの欠如等々。安全、安心が確保された建物の中に人々の暮らしがある。技術は、暮らす人のために使うべきである。業界や、作り手の利益のためではない。当たり前のことを教えられた。

医者は生命、弁護士は法律、建築家は財産を扱うと大学時代に習った記憶がある。建築物の設計は、社会にとって大切な職能である。大学で学んだ建築技術等を、人々の生活、文化、経済、教育のために使い、さらに思想や哲学を込め、建築を構築する。

建築は、どこに向かってゆくのか。私たちはどこにむかってゆくのだろうか。それが、わからない。自問自答の毎日である。設計するときに、私たちは「モノ」を設計しているのであるが、「未来」も設計している。私たちの設計する建物は、次の30年にもあるべき姿になっているのであろうか？

21世紀に入り、設計者に高度な判断が求められている。情報開示の時代、オーナーや使い手等に十分説明を、果たす必要がある。われわれを取り巻く環境や地球全体のことを考える。計画、デザイン、構造、設備、と分野ごとの成立だけでなく、その建物の総合的な価値が問われる。

時代がかわろうと、世紀がかわろうと、かわらないのは人間である。建築は人間の生活を内包し、人間を昇華、止揚する一つのメディアである。建築が時代を切り拓く時代ではなくなり、時代が、生きている私たちが次の時代を切り開く。今、私たちに新しい建築のありかたが、問われているのではないだろうか？



《卒業 20 年》 卒業 20 年

小野 正博 (C89)



この度、平成元年卒の学年委員として、卒業 20 年目を機に「卒業生たより」を執筆させていただくことになったので、近況や思いとともに私の 20 年の歩みを紹介したい。

私は、学部卒業後大学院 2 年を経て、平成 3 年に運輸省（現国土交通省）港湾局に入省して以来、現在までに 12箇所の部署を経験させていただいた。国家公務員でありながら、国以外の機関（JICA 等）への出向が 3 回、港湾局採用でありながら、港湾・空港関係以外の部署が 5 回と、多様な経歴となっている。また、現場の工事事務所勤務は既に 3 回を数える。（現場勤務 3 回の経験を活かし、一級土木施工管理技士の資格を取ろうと、ちょうど昨日、その試験を受けたところ。実は平成 19 年からもう 3 回目の挑戦になる。）

現在の職場は、内閣府の経済社会システム担当部局（旧経済企画庁総合計画局）の社会基盤班であり、自民党政権の元では、経済財政諮問会議の事務局の仕事をさせてもらっていた。新しい政権では、経済財政諮問会議を廃止するとのことなので、今の部署がどういう役割を果たしていくことになるのかまだ不透明である。とはいえ、本来、この部署は、社会基盤にかかわる政策が経済に及ぼす影響を勘案しつつ、今後向かうべき方向を見定めていく役割があるので、腰を据えてそれに取り組むことが肝要だと考えている。

趣味・遊びに関して卒業後の 20 年を振り返ると、数年おきに、いくつかの資格を取得してきた。卒業後しばらく携わったアメリカンフットボールの審判を始め、卒業 5 年目に、小型船舶操縦免許、卒業 8 年目に、ダイビングライセンス、卒業 13 年目に、居合道初段といったところだ。ただ残念なことに長続きせず、その時限りで終わってしまっている。卒業 10 年目頃までは、英会話を習得したいと、教室に通ったりラジオ講座を聴いたりして頑張っていたが、これもものにならないまま現在に至っている。英会話だけは、いつまでたっても必要性、重要性が増すばかりなので、あきらめずに勉強を再開したいと思う。

家庭では、2歳になる娘を抱えている。かわいい盛りで毎週土日に遊び相手をしてやるのを楽しみの 1 つにしている。一方で、まだまだ先が長いことを考えると、大変だなとも思う。娘が一人前に自立して生活していくようになるまで、今後さらに 20 年はしっかり働き、家計を支えていかなければならない。同期のお子さん達がもう 10 歳になるとか聞くとうらやましく感じる。

年齢は不惑の 40 歳をとうに過ぎ、社会を、職場を、家庭をばりばり引っ張っていくべき時期を迎えているが、まだまだ惑うばかりの人生を過ごしている。今後も、親のこと、子供のこと、仕事のこと、老後のことなど、頭を悩ますことがいろいろ出てくるだろうが、その時々で、頑張って乗り切っていきたいと考えている。

以上、私の卒業 20 年と近況でした。

最後になりますが、この場を借りて、同期の皆様、諸先輩方々、構築会関係各位の益々のご活躍、ご健勝をお祈り申し上げます。

《卒業 20 年》

20 年目の感想

小野 貴英 (A89)



私が横水ハウス株式会社に入社したのは平成元年ですから今年で入社 21 年目ということになります。入社から現在にいたるまで戸建て住宅によるまちづくりを仕事にしています。平成 11 年に社内のプロジェクトではありましたが、まちの景観や風土、環境を形成していく上で、人間による細やかな手入れのもとに様々な生き物が共生していた、里山をお手本にして日本の在来種の緑による住宅環境づくりの必要性に注目した「5 本の樹計画」を立ち上げたことをきっかけに「住宅と緑」の関係を社内外に伝える役割が増えました。私は日本の建築学教育においてもこのような樹木や緑化の知識を得る機会が増えることを願っています。大きなまちを計画する前に環境アセスメントを行うのは一般的ですが、1 戸の住宅、数十戸の住宅地を作る際にでも、まちあるき（フィールドサーベイ）を兼ねて風・光・気温といった自然環境の特徴や地域の植生を知ることは設計者にとっても大切な過程となりつつあります。本当にこの 10 年間に「環境」という言葉が持つ意味や力は大きく変わったことを再認識しています。そんな情勢の変化の中で社内のいくつかの興味深いプロジェクトに関わることができました。1 つは平成 17 年からの 2 年間関わった東京都国立市の閑静な住宅地内に計画した実験住宅「サステナブル・デザイン・ラボラトリー」の建築プロジェクトです。このプロジェクトでは、燃料電池や薄膜太陽光発電パネルなど新技術を住宅に取り入れる他に、長く使えば味わいの出てくる丈夫な材料を使うというという古くから受け継いでこられた住まいの文化を見直すことの大切さを「経年美化」という言葉を用いてコンセプトに組み込んだことが特徴でした。この実験住宅は現在も実際の通風や採光データを記録しながら一般の方々にも公開しています。平成 19 年からは、M I T (マサチューセッツ工科大学) 建築計画学部と共に持続可能なコミュニティデザインと住宅のあり方を研究するプロジェクトに参加し、建築・都市デザインの専門家であるアデル・サントス建築計画学部長をはじめとする複数の教授陣との交流の機会を得たことが会社としてはもちろん、個人的にも有意義な財産になりました。日本の都市における少子高齢化や人口減少、環境問題、コミュニティの崩壊などは、先進諸国に共通する問題であり、発展途上国においても将来的に検討すべき課題と考えられます。ケーススタディとなる対象敷地として多摩ニュータウンを取り上げましたが、この研究がもちろん千里ニュータウンやその他の開発地の将来にとっても意義のあるものにしたいと考えています。

最近の身近な興味は介護と農作です。まさに年齢的な興味だと感じます。親世代の介護に回る側に立って初めてこの問題を真剣にとらえることが出来た気がします。住宅においては介護を受ける側にとっての工夫や配慮はもちろんのですが、在宅介護をする側の立場でいかに負担を少なくサポートできるかが大切だと実感しています。農作は自分自身の将来を含めて、定年後の楽しみとして簡単な家庭菜園だけでなく、例えば後継者のいない農地を借りて本格的農作生活を始めている方等もいるようです。まちづくりという面から考えても、都会の中の農地のあり方は税制も含めて国民の課題として再考される点が多いと考えています。そんな自分の行く末のことも考えながら仕事に取り組んでいる時に、ふとこの仕事の楽しさややりがいを感じる次第です。



《卒業 10 年》

10 年間を振り返って

小池 洋平 (C99)



構築会事務局より、「卒業してから 10 年経った卒業生を対象に…」ということで、原稿作成の話を頂いて初めて、卒業してから 10 年（大学院に 2 年間通ったため、社会人になってから 8 年）も経過したことに気づきました。月日が経つのは早いもので、この 10 年間で公私ともに色々な変化がありました。折角頂いた機会ですので、自分への備忘録の意味も含め、拙文ではありますが、雑感を書かせて頂きます。

まず、仕事面についてですが、私は大学院を卒業してから、鋼橋メーカーに約 8 年勤務しています。子供の頃からものづくりに対する関心が強く、また、新浜寺大橋や港大橋などランドマークとなる橋を目にする機会も多かったこともあり、橋梁の製作や架設に携わることができる今の仕事を選びました。

私が社会人になってから、建設業界での出来事をキーワードで思いつくままに挙げると、「談合事件」、「道路公団の民営化」、「耐震偽装」、「天下り問題」、「道路特定財源の活用問題」、「東海地震を初めとする大規模地震の逼迫」、「ミネソタのトラス橋の落橋事故」、「団塊世代の退職」など本当に多くの変化がありました。…が、変化の中に明るい話題は少なく、また、明石海峡大橋のような大きなプロジェクトも減少しています。客観的に見ると、業界の魅力が失われつつあるように感じられるのかもしれません、スケールが大きく、地図に残るこの仕事は、やはり私にとって魅力のある仕事です。

私は入社して 7 年半は研究職に従事し、約 1 年前に設計部に異動になりました。研究所に在籍していた時は、主に橋梁の耐震に関する技術開発や製品開発を行いました。中でも、地震時の挙動を確認するため、アーチ橋の模型を作成して、大規模な載荷実験を行ったことが、最も印象に残っています。実験準備では肉体労働でへとへとなり、実験後は膨大なデータと格闘し、毎日遅くまで残つての作業でしたが、社内の先輩方と協力して実験成果を纏めた論文が評価され、土木学会から賞を頂いたことは、大きな喜びとともに、今も励みになっています。現在は、設計部に籍を置き、新しい分野での仕事で、心機一転頑張っています。橋梁は本当に奥が深く、設計・製作・架設・維持管理…など様々な知識が求められ、まだまだ日々勉強中ですが、今の職種は、橋梁の設計から完成に至るまで関わることができ、橋梁が形になっていく姿がやりがいであります。

一方、プライベートにおいては、入社 2 年目に結婚して、2 人の子供（長女、次女）にも恵まれ、年明けには 3 人目（性別？）が生まれようとしています。この 10 年間、プライベートについても大きな変化があり、学生時代、自分の生活管理すら危うかった私が父親になりました。嫁を筆頭に、来春小学校に入学する長女、幼稚園に入園する次女の女性陣のパワーに圧倒され、家では既にアウェイ状態で、この先が思いやられますが、日々自分の居場所を確保すべく奮闘しています。近況としては、先日、長女の幼稚園最後の運動会で、親子競技に参加しましたが、自分の頭と体が運動しないことを体感してしまいました（小さなトラックを 1 周走っただけですが…）。もともと運動が得意な方ではありませんが、社会人になってからは、仕事の忙しさを言い訳にし、運動不足が続いたため、とうとう脂ののった肉体が自重の増加に耐えきれず、警告を発しました。10kg 減のマニフェストは家族に信用してもらえませんでしたが、スリーサイズ 100, 100, 100 のシリエットを改善し、脱メ〇ボ・逆三角形目指して、肉体改造に取組みたいと思います。

以上、長々ととりとめの無い文章になりましたが、最後までお付き合い頂きありがとうございました。元々長いスパンで物事を考えることが苦手ですので、これからも仕事とプライベートのメリハリをつけ、毎日を全力投球で頑張りたいと思います。

最後になりましたが、同期をはじめ、構築会会員皆様の益々のご活躍を祈念して、結びとさせて頂きます。

《卒業 10 年》 阪大での毎日

安福 健祐 (A99)

大阪大学サイバーメディアセンター



大阪大学を卒業して早 10 年。経余曲折あり現在も大阪大学に通う日々を過ごしています。このような機会に、今回私の阪大での様子を少しご紹介させて頂きたいと思います。

今は 10 年前の学生の頃とは違い、毎朝決まった時間に大学内にある保育所に子供二人を送り出して出勤しています。皆さん保育所というと、工学部の生協にあった小さな「たけのこ保育園」を思い出す方もいるかもしれません。私も当時はこんな狭いところに赤ちゃんを預けて大丈夫だろうか? という不安を感じながら、長男を入園させた記憶があります。実際に入ってみると、保育士さんと父母が協力し合いながら、質の高い保育をして頂いているのが分かり、今では妻とともに、たけのこ保育園に預けてよかったです。ただソフトウェアは優秀でも、ハードウェア(建物)のほうが児童福祉施設最低基準ぎりぎりで、当時は大学の正式な学内保育所ではなかったことから補助も限られており、入園児が増えるにつれていろいろ不備が出てきました。そのような中、少子化に伴う女性研究者支援の波が押し寄せ、大学の英断によって、2008 年度からは、たけのこ保育園が正式な学内保育所となり、今では吹田キャンパスの一等地(本部と歯学部の間)に大きな新しい園舎を構えています。昨今の不況の影響で共働きが増え、保育所の待機児童が増える中、その前にこのような立派な保育所を整備できていたのはさすが阪大だと思いました。

さて私自身は、2007 年から大阪大学サイバーメディアセンターに所属しております。サイバーメディアセンターは 2000 年に設立され、こちらも約 10 年目を迎えています。設立当時、恩師である吉田勝行教授(現在、名誉教授)が、サイバーメディアセンターの一つ部門であるサイバーコミュニティ研究部門に移籍され、現在は、阿部浩和教授がその後任となり、私はその部門の助教になります。当部門は建築工学部門の建築・都市形態工学領域(第 7 領域)も担当しており、建築の学生の指導、研究室の運営に携わっております。また講義では、図学、図学実習を担当しています。図学といえば、私自身 1 年生のときに、その難解さに悶々としたのですが、今でもゆとり世代の 1 年生の相手に悪戦苦闘しています。図学というのは製図の基礎ともいわれていますが、建築設計の実務において製図はすべて CAD 化されており、ドラフターが姿を消して久しく、CAD/CG ソフトウェアも年々進化しているのを感じています。そんな中、大阪大学の図学教育では、昔ながらの手書きによる図学を残しながら、CAD/CG を利用した教育の導入に試行錯誤しているところです。また、来年度からは吹田キャンパスでも、ハイエンドの 3D-CAD/CG ソフトウェアが導入されて、建築工学科目でも自由に使える環境が整備される予定です。とはいえ、大学での建築設計教育において、手書き中心か、CAD/CG を最初からどんどん使わせるかという問題は度々議論されており、少し宗教論争のような感も出てきました。海外からの留学生が CG を自由自在に使っているのに、日本の学生はなかなか使いこなせていないという現状もあります。私個人の意見としましては、どちらも大切なのは確かですが、手書きが苦手なために建築設計をあきらめてしまう人でも、CAD/CG を利用することで、その人の才能が活かされることを期待しています。

話があちこちに飛び、なんだかまとまりのない文章になってしましましたが、現在の阪大の様子、建築工学部門の様子が少しでも伝われば幸いです。

研究生活に思うこと



社会基盤工学コース
博士後期課程1年

中谷 祐介

10月半ば。日中はまだ暖かさが残る一方、朝晩はここ数日でぐっと冷え込み、バイク通学には憂鬱な季節が近づきつつあります。もう半月もすれば銀杏並木の黄葉も始まりそうです。

さて、現在私は博士後期課程1年次に在籍しています。専門分野は環境水理学、昔で呼ぶところの第二講座に所属しており、大阪湾の水環境に関わる研究テーマを進めています。皆さん大坂湾へ足を運ばれたことはありますか？沿岸に建つ高層ビルから、または神戸の高台から眺められた方は多いかと思いますが、間近で実際に海水にふれたという方は案外少ないかもしれません。というのも、大阪湾はその海岸線の9割以上を人工護岸で囲まれており、一般人が気軽に近づくことのできない環境にあるからです。コンクリート護岸は私たちを災害から守ってくれますが、一方で私たちと海を物理的に隔ててしまうため、身近にあるはずの海に対する関心がどうしても薄れてしまいかがちになります。

私の研究室では、研究の一貫として、調査船に乗って大阪湾の流況や水質の現地観測を度々行っています。海に出て調査してみると、夏場の沿岸域の水は濁りがひどく、ペットボトルなどの浮遊ごみが多く漂っています。また、海底には真っ黒かつ硫化物臭を発するヘドロが堆積しており、貝やカニといった生物はほとんどみられません。さらに、水深の浅い海面付近では植物プランクトンの異常増殖現象、いわゆる赤潮が発現する一方で、水深数mから海底までは海水中の酸素が欠乏し、魚が生息することができない環境が広がっています。こうした現状を実際に目の当たりにすると、この海ではとても泳ぐ気になれないなと感じます。

私の研究は大阪湾の水質汚濁のメカニズムを明らかにすること、さらに将来、人が泳ぐことのできる海を取り戻すためにはどういった施策展開が適切か、その結果どこまで水質を改善させることができるのか、ということを科学的に評価しようという内容です。自然現象が相手ということもありなかなか順調に伸展とは

いきませんが、四苦八苦しながらもわずかな前進に気付いた時の手応えにやりがいを感じています。研究室とアパートを往復する地味な毎日ですが、周囲の環境に恵まれ、充実した研究生活を過ごすことができています。

ふと振り返れば大学生活も7年目、研究室に配属されてからは4年半が経ち、部屋の中ではそれなりの年長者になってしまいました。同年代の多くは社会で活躍し、既に家庭を築いた友人も少なくありません。博士前期課程をともに過ごした同期生も大半が卒業・就職し、フレッシュマンとして社会で活躍されている一方、26歳学生という立場に不安や焦りがないわけではありませんが、好きなことに打ち込む時間があるうちにできるだけ多くのことを学びたいと思います。

二度目の学生 二つの人生



建築工学コース
博士後期課程3年

竹村 明久

不意に先生に渡された執筆要項、何も考えずに二つ返事で引き受けてしまいました。今思うところについて、徒然に書かせて頂きます。

社会人生活を離れて、二度目の学生生活に入ったのがもう2年前。当時は、これから自分が向かう方向に具体的な道が見えない不安、途中で会社を抜けてしまうことによりご迷惑をお掛けしてしまう各方面的の皆様との関係、経済的な先行き不透明感、そして改めて若い学生さんの中で生活できるのかという心配、家族への負担など、希望よりも様々な不安や申し訳なさ、重圧を感じながら二度目の学生生活へと踏み出したのがもう遠い昔のことの様です。

正直なところを言えば、前職では初めての事態の連続に四苦八苦しつつも楽しんでいたので、職を離れてよかったのか等と考えながら、S1棟から吹田の町を眺めた時期もありました。いい年をして学生をやっているという負け目を感じることもありましたし、実際に経済的に余裕がないのも事実です。しかし、学生料

金でカラオケに行ったり、金銭的なことを気にしないで建築を考えてみたり、国際学会で英語が聞き取れずになあたふたりしたり、専門学校で教壇に立って教鞭を取ったり、TAとして学生さんの質問を聞いたり、そして何よりも研究で実験（においを被験者に嗅がせます！）をしたり、先生方とその内容で議論したりと挙げればキリがないくらい、学生生活に漫ることは幸せですし、辞めずに仕事を続けていたらどうなっていたのかな…という自分の姿を想像するに、二種類の人生を楽しんでいるような贅沢ささえ感じています。そういった時間を二年と半分ほど続けるうちに、心の整理もできてきた気がしますし、町を眺める機会もほとんどなくなりました。具体的ではないにせよ、前を見ながらゆっくりと一歩ずつですが、進めていると思っています。このような機会を与えて頂き、そしてご迷惑をお掛けしてしまった先生方、会社の皆様、周囲の方々、家族には本当に感謝しています。

二度目の大学生活は、初めての大学生活と大きく異なって見えます。前回は初めて降りかかることに精一杯対応しているだけで過ぎた感がありました。今回は指導する先生の立場、学生の思うところ、そして年間スケジュールなど見ることができる範囲が少しは広がったと感じますし、それを駆使すれば何が何だか分からないことが多かったゼミでの議論や講演会の聴講、学会参加なども自分の分かる範囲へ咀嚼できるようになったかなと思います。そして、会社員時代の知り合いの方々との交流も、依然続けて頂けていることで、世界をあまり狭めずに生活できている状態です。このように社会人の三年間も、決して無駄ではなかったのだと思えることも、一つの幸せです。

まだまだ足りない部分が多いとも感じる日々ですが、そこは「今日の自分と明日の自分」であるように、今後とも微増でもいいので少しずつ前に進んでいける様に心掛けたいと思っています。残り時間は（順調にいけば）あと半年、残された時間の中で、学位論文を何とかまとめ、研究者としての力をつけつつも、会社員ではできなかつたであろうことにもどんどんチャレンジしよう！と、この文を書くことでまた再確認し、精進しようと心に誓いました。そうすれば、仕事を辞めずに社会人を続けていたの世界の私が、羨ましがってくれる様な自分になれるだろうから。

学生時代とこれからについて



社会基盤工学コース
博士前期課程2年

川原 大典

構築会よりの執筆にあたり、大学、大学院で過ごした6年間を振り返ってみました。この6年間は入学時に想像していたものとは大きく異なるものとなりました。

最近私は、友人に「東京ファイティングキッズ」という本を教えてもらい、ものすごく面白かったので、それから私はその筆者の他の本やブログを読みあさっています。筆者のブログに、大学で学ぶというのは「自分が知らないこと」を学ぶのではなく「自分がそれを知らないことさえ知らないこと」を学ぶことである、大学の中では「生産的に無為な時間」を過ごすことが大事ということが書かれていました。

視野の狭い私は、すぐに面白い人の意見に傾倒してしまうのですが、もしそうならば、私自身この6年間は楽しかったですし、大事に過ごせたのではないかと思います。後悔がないといえば嘘になりますが。この本を読んだことで、ただただぼーっとして、のんべんたらりんと過ごした時間や、友人と夜遅くまでとりとめもない話をして、くだらないことを必死でしゃべった時間、というのは、かけがえのないものだったと将来思うようになると思います。

しかし、かけがえのないものになるかもしれないけれど、課題もたくさん見つかった6年間でもありました。成長を実感できた6年間というよりも、自分がいかに何も知らないでここまで来たかを知ることになった6年間であったという感じがしており、これから更なる勉強が必要になってくると感じています。

特に自分が何を知らないのか、もっと知る必要がある、と痛感した経験は、昨年夏のU.A.E.での生活です。

IAESTEという理系の学生を対象に海外でのインターンシップを斡旋する団体のプログラムに参加しU.A.E.で約2ヶ月間、建設現場での就業研修を行いました。

私はシャルジャという州の大学の寮に宿泊させてもらい、平日は朝9時から17時まで建設現場で就業体験、夜は現地の学生や、私と同様IAESTEのプログラムに参加していた他国の学生と過ごし、週末は現地のIAESTE学生委員が企画してくれたレジャーに参加と



いう生活を送りました。

研修内容自体は簡単で、現地の方に多くの善行をしていただいたり、気の合う他国の学生と過ごし、毎日が楽しかったのですが、同時に自分の未熟さを痛感する体験もありました。現地の方たちは「日本は Safety First だが、俺たちは Tea First だ。」といつても笑いながら、非常に長い時間休憩を取るので、その休憩中に日本の土木、建設、コンクリートなどの技術や習慣、政治、経済、宗教などの質問をたくさん受けました。学生からは一緒にいるとき、ほぼ毎時間何かしらの質問を受けていました。日本に関することなのに知らないということや、知っていてもうまく伝えられない自分の語学力に慣れを覚え、自分の未熟さを痛感しました。

また公共交通機関の不足が巻き起こすさまじい交通渋滞、敬虔なムスリムの宗教に対する姿勢、ドバイの開発、それを支えている劣悪な労働環境で労働しているインド人労働者、アラビア海沿岸の厳しい気候条件、砂漠の景観などは、写真や本、インターネットを通して知っていると思っていたのですが、雑学程度の知識でしかなかったと分かりました。体験することは重要なと強く思います。

これから先、自分の知らないこと、厳しい経験はもっとたくさん出てくると思います。そういう時の為に、またそういう経験を自分の糧にし、さらに成長するためにもしっかりと本を読み、貪欲に体験し、謙虚に日々を過ごしていきたいです。

● ● ●

利用方法選択可能長時間、残りわずか



建築工学コース
博士前期課程2年

不動 剛志

「大学とは職業に就く為の専門的な知識を学ぶ場所だ。」そんなことを思いながら学生生活を送っている人が何人いるだろうか。確かに、大学生生活は職業に就く前段階と言うことが出来る。しかし、単に仕事のために学ぶ場所ではないということは多くの人に共感していただけるはずである。

大学生活というのは、それまでの人生に比べて時間

的な制約が極端に少ない。単位を取るために授業に出なくてはならないから時間的な制約は大きいと言いたい人がいるかもしれないが、果たしてそうであろうか。大学の授業の単位などは工夫次第でどうとでもなる。というのが私の思う所である。つまり、大学生活は利用方法を選択できる時間がとても長いのである。そういう意味で大学・大学院生活を利用方法選択可能長時間と呼ぶ。その時間はアルバイトをしてお金を貯める為に使うこともできるし、本を読むこともできるし、友達と遊ぶこともできるし、恋愛に邁進することもできる、もちろん授業に出て将来に向けての専門的で有意義な勉強をすることも出来るし、どこか遠くへ旅に出ることもできる。時間を使う可能性は無限に広がっている。

しかし、修士2年の折り返し地点を過ぎた私にとってはやはり無限に広がっていたという方が正しいのかもしれない。そう思うほど残り時間は少ないのである。気付いてみれば、長期間ゲージの大半を使い果たしてしまったことに気付くと同時にこれまでの5年半の大学生活を、この利用方法選択可能期間を私は活用してきたのか振り返ってみる。過去を振り返ることを好む人が少ないように、そんなことを思い返してもただ虚しいだけのような気がするので、あまり気が乗らないが。

振り返り中・・・

良い記憶よりも、悪い記憶ばかりが残ってしまうのと同じで、無駄なことばかりして来たことが浮かぶ。あの時ああしていれば、あんなに異性を交えての飲み会(○コン)ばかり行かずに本でも読んでいれば。もっと時間をかけて設計課題に取り組んでいれば結果は変わっていたかもしれない。そんなことばかりが思い返されるのである。

しかし！問題は今からである。残り少ない利用期間をいかに活用するか、それが今の自分に課せられた課題である。修士論文という大きなハードルはてっぺんがまだ雲に隠れた状態だし、残されたわずかな時間で何ができるのかはわからない。しかし、社会人になった自分が「あの半年はこんなことをやった」と言えるような日々を過ごしたい。社会に出てこの先自分の力を発揮するためにもできる限り多くのことを吸収したいのである。自分の専門ジャンルのものに限らず古典を読んでみたいし、アジアを旅もしてみたい。自分のHPを作成してみたい。この文章を書いている間にも時間は過ぎている、そう思い始めると睡眠することも勿体無く思えてくる。しかし、寝ないと人間としての機能しなくなるのできちんと寝るようにはしようと思います。それではおやすみなさい。

人生で一番濃い夏休み



社会基盤工学コース
博士前期課程 1年

吉田 基次

長野から大阪へ帰るバスの中、今まで完全に忘れていた構築会だよりの締め切りを思い出した。構築会だよりの執筆依頼を受けたのは 1 ヶ月以上も前のことだが、気づくと締め切り 3 日前であった。私はこのシルバーウィークを含む 1 週間、長野県の某ホテルで行われた軽音楽部 ROCK の合宿にOBとして参加していました（一緒に参加した後輩の方々、お疲れ様です）。夏休みは学会や実験といった研究に関連することが生活の大半を占めていただけあって、日々にバンド漬けの生活を送ることができ、最高の 1 週間であったと言えます。今回の合宿は同窓や後輩と一緒にバンドをしたり、また、新しく入った 1 回生のギターの子 1 人に対して 1 対 1 で教えるという、いわばチューターのようなこともしました。もちろん、日々に思いっきりバンドを楽しめたこともよかったです。何よりもチューターで教えていた子の 1 週間での成長がはっきりと目に見えたことが素晴らしい思いました。また、自分の持っている経験や知識をアウトプットすることで自分自身でも忘れかけていたことを定着させることもできます。来年も時間に余裕があれば是非行きたいものです。

そしてそろそろ研究関連の話を入れなければ…。8 月の上旬にはドイツ・ミュンヘンで行われた学会に研究室のメンバーで参加しました。初めての学会が海外で、しかも、海外に行くこと自体初めてという状況なだけあって、一度に多くの貴重な経験を積むことができました（研究室の先生方には本当に感謝しています）。ドイツはもちろんドイツ語ですが、一応英語も通じる場所です。帰国後は自分の英語力の無さから英語に対する意識が大きく変わりました。また、1 年前までの自分は海外に行きたいと思ったことは一度も無かったが、今では何度も行きたいと思っています。個人的には次は是非スペインへ行き、メッシやイニエスタ、カカ、イブラヒモヴィッチといったスター選手を一度は生で観たいものです（すみません、サッカーの話です）。

9 月の上旬には、福岡大学にて土木学会全国大会が

行われ、こちらも同じく研究室のメンバーで参加しました。実は福岡は私の地元であり、学会期間中、中学・高校の同級生らと飲みに行きました。大阪に来て 5 年、今まで全く違和感のなかった「何しよ~と？」や「今駅にあるけん！」といった博多弁に最近違和感を覚えることが残念です。すみません、話がそれてしましました。学会の話ですね。実は、私は大学院に進学するにあたり、もちろん研究を頑張るという目標もありましたが、それとは別にプレゼン能力（人前で上手く話す力）を向上させるというのもありました。きっかけとなったのは、学部 4 年で就活に失敗したことです（単純に面接で上手く喋れなかっただけですが…）。今では、学会やゼミを通して少しずつではありますが成長できていると感じます。少なくとも、人前に立つことで緊張することなくなりました（このことに関しては軽音のおかげだとも思っていますが…）。

とまあこのように、実験、学会 2 回、軽音の合宿といったように非常に内容の濃い夏休みとなりました。大学生活はあと 1 年半となりましたが悔いの残らないよう頑張っていきたいと思います。研究や就活はもちろんですが、学生でしかできないこと（聞こえはいいが、要は遊ぶこと）を大いにやっていきたいです。嘘です、すみません、研究頑張ります。

10月14日（水）



建築工学コース
博士前期課程 1年

仁居 智子

只今 10 月 14 日（水）午後 9 時 37 分。ホテルの個室にて書く。それにしてもここは贅沢なホテルだ。間違いなく東京は神保町に居ながら、外国にいる気分である。すでに宿泊を始めてから 3 日経つのでだいぶ慣れたが。室内にあるのはベッドと小さなテーブルとイス、あとごみばことカード制のテレビだけである。2 m四方の本当に小さな部屋だ。

今わたしは設計事務所のオープンテスクのために東京にいる。二週間ほどの日程とはいえ自宅生のわたしには初めての一人暮らしである。トイレもシャワー

ルームも共用の小さなこの部屋に住んでみると、2m四方あれば意外とやっていけるものだと思う。それに周りに外国人しかいないというのもなかなかユニークだ、と思う。そこまで考えてそういうえば9時頃洗濯機を回してきたからそろそろ終わった頃だと気づく。通りにいく。

エレベーターが5階まできて開いたら30代くらいの女性が降りてきた。そしてgood nightと言った。たぶんスペイン人かフランス人だと思う。洗濯物は、まあ普通に洗濯されていた。古そうな洗濯機だったし脱水が甘かったら乾燥機にかけようかと思っていたけどこの程度なら部屋干して朝までには乾きそうだ。簡単に洗濯物を干してしまってからまたベッドの上のスケッチブックをとる。東京にいる間、夜はスケッチブックに何かを書くか本を読むことにしている。テレビは見ない。西宮にいるときもニュースとドキュメンタリー以外はあまり見ないので苦ではない。

作業は単調なものだったがオープンテスク自体は今日も楽しかった。昼休みには皇居の前の緑道でドトールの生ハム入りサンドイッチを食べた。周りにいたのはたぶん全員サラリーマンとOLのようだった。オープンテスクに来てから、違う町に来ているせいもあるのだろうけれど、学生でもなく、社会人でもないふらふらした浮遊感があって面白い。しかも住んでいるのが外国人ばかりの宿泊するホテルなので、なおさらおかしな気分になる。

鉄製の無愛想なドアの向こうからパタパタという足音がして、同じく無愛想なドアの閉まる音が聞こえた。共用の水回りは各階の中心コアにあるため廊下を挟んで出入りの音がよく聞こえる。わたしは混んでいない12時過ぎにシャワーを浴びることに決めている。それにはまだ小一時間くらいあるのでもうしばらく何か書くことにしよう。

ホームページを見ただけではわからなかったが、このホテルは外国人のバックパッカー向けのようだ。しかしもちろん日本人でも宿泊できる。ここら界隈のなかでは宿泊費は安めで、1階のラウンジの掲示板には「カメラ売ります」といった伝言が貼られている。ラウンジには常に何人かの外国人たちが腰かけていてパソコンを覗いたり談話している。朝には日本人のサラリーマンもやってきてコーヒーを注文する。今のところまだ外国人たちと会話らしい会話はしていないけれど、そのうち話しかけてみようか。

平凡道を非凡に歩め



社会基盤工学科目
4年

木下 真一

7月中旬に、この原稿の執筆の依頼がきました。このような原稿を書くのは高校卒業後に書いた合格体験記以来です。つまり、約3年ぶりに筆をもつことになります。文才に乏しい私ですが、以下で一生懸命綴りたいと思います。

先日、夏季休業を利用して実家に帰省した際、出身高校を友人と訪問しました。そこで目にしたのが社会教育者や政治家として活躍された田澤義鋪の座右の銘である（標題にもなっている）「平凡道を非凡に歩め」という言葉です。この言葉は「普通のことを普通にやっていたのでは進歩ではない。真剣に、本気に、熱心に、人並み以上に進め。一挙に非凡なことはできないが、その積み重ねが大事である。」ということを意味しています。高校時代はことあることに聞かされていた言葉でした。これまでの大学生活を振り返ってみると、平凡に歩んだことの方が多い多かったです。単位を無難に取得し、授業内でも効率的に点数を稼ごうとし、率先して何かを行うということは少なかったです。大学という機関は、学生に対して成長できる具体的な何かを与えてくれることは少ないように感じます。ただ、自分が行動することにより、多くのチャンスを与えてくれる機関もあります。実際、3回生の夏に参加したインターンシップでは、ゼネコンの業務の一部を体感させてもらうだけでなく大阪大学を卒業された先輩方とお話しする機会もありました。インターンシップに参加するという行動が、新たな知見を得ることや人脈を築くという結果につながり非凡な歩みの積み重ねの一部になるのだと思います。

私は今4回生になり、3回生までとの違いを日々感じています。3回生までは、高校より若干授業に目新しさが加わる程度でしたが、4回生では研究テーマに関し方向性を自分自身で考え、確認する。また、行き詰ったときにはアイデアを提供していただき、さらに考える。同時に研究室は小さな社会であり、報告、連絡、相談といったいわゆるホワレンソウを徹底しなければ協力をもらうこともできません。発表の場な

どもこれからどんどん与えられていくと思います。人前で発表したりすることが苦手で社交的ではない私ですが、小さな社会の中で生きるために真剣に、本気に、熱心に、人並み以上に取り組み卒業まで非凡な行いの積み重ねをしていきたいと思います。また同時に、一生懸命遊び楽しい学生生活を送りたいと思います。この機会をかりて簡単な決意表明をさせていただきました。

○ ● ○

ENJOY MY SCHOOL LIFE



建築工学科目
4年

中安 智子

八月末。大学院入試を終えた私は、とあるキャンプ場にいた。

写真部合宿。といっても誰もカメラは持っていない。コテージを借り、川で遊び、夜はお酒を片手にBBQ、翌日温泉。毎年恒例の一泊二日キャンプ旅行だ。

夜の宴が始まった。花火を振り回してはしゃぐ新入生。肉をほおばる男の子達。となりで彼氏とのなれそめをのろけるかわいい後輩、とそれをほほえましく聞く私。みんな自由気ままに時を過ごす。阪大写真部独特の言いようのないこちよくゆるい雰囲気が私は好きだ。

今年で入部二年目。写真部には三回生の四月に入った。大学途中からの入部にはわけがある。前のサークルが二回生の終わりに引退と早く、引退後手持ち無沙汰になった私は何か新しく始めなくてうずうずしていた。そんな中、短期バイトで知り合いの一回上の先輩と一緒にになった。どこか新しいサークルでも探そうかと思ってるんですよーと冗談半分で彼女に話すと、思いもかけず意気投合。翌日のサークルオリエンテーションに一緒に行くことになった。とはいえ、もちろんこのイベントは一回生対象。三回生と四回生が行っても相手にされないので?といった不安から、二人で新入生のふりをして、会場を回った。そうやって新しいサークルを一から探すのは一回生の時とはまだ違うわくわく感があった。(しかし、今思えばあの時対応してくれた学生は自分達より年下の二回生達。すっ

かり私達を新入生だと思い込み、こっちは既知の下宿や授業の事まで親切丁寧に教えてくれた彼らの姿はおもしろかったが、それをあたかもありがたそうなふりをして聞いていた自分達を思い出すと、彼らに少し申し訳ない。あの時はすみませんでした笑) そんな中、入部を決めたのが写真部だった。写真には元々興味はあったし、個人ワークなので、大学の途中から入部してくれる人も多いとのことで入りやすかった。そんな土壤からか、写真部には平成生まれのフレッシュな新入生から、高専からの編入生、元社会人男性看護師、一児の父親まで、様々な学生が集う。まさに阪大生のるつぼ。ひとりひとりが独特の雰囲気を持ち備え、彼らと過ごす日々は楽しくて飽きない。また一眼レフも使えるようになり、時々暗室で写真を焼いたりとする中で、一年で写真の知識も興味も、そして人脈もぐんと広がった。本当に途中からでも勇気を出して入って良かったと思う。

写真部のことに限らず、私は気が多いので、いつも新しくあれやこれや色々なことをやりたがってしまう。二回生、三回生と創っ展(ATC関西学生卒業作品展)のスタッフをした。講評会の講師の選定、イベント企画、二年目には全体マネジメントまで実に幅広い仕事に関わらせてもらった。また活動を通して、他大学の友達が増えた。この秋には、からほりまちアートというアートイベントのスタッフをやる予定だ。こちらもアーティストさんから、社会人、他大学の建築学科生など、個性豊かなメンバーがそろい活動がすごく楽しみだ。

また、院試後、9月の終わりまで写真部合宿に四国へのゼミ旅行、人生初海外、台湾へ女二人ぶらり旅。そして東京での犬島ワークショップ、ついでに横浜の友達と観光と四回旅行した。その合間に、地元の友達とカフェ、来年度の創っ展スタッフへの引継ぎ、フリーマーケットなど、あれやこれやと色々なことに手を出して残りの夏休みはあっという間にドタバタ過ぎていった。いつも気まぐれに行動して、落ち着きはないし、色々やり過ぎて時々消化しきれず自分でもアホやなーって思うこともあるが、私にとってそんな毎日はとても楽しいし、充実している。残りの学生生活も私もしく、色々な新しいことに挑戦して、色々な人に出会ってドタバタ過ぎていったらなと思う。

○ ● ○

感謝



社会基盤工学科目
3年

木本 早苗

ブーブーブーブー

「あっ、6時！！今日も寝坊。急がなきゃ……。」
もうちょっと寝させてと思いつつも、夏休みもほぼ毎日朝からクラブがあるため、朝6時前起きです。幹部学年なので、遅刻できません。しかし、クラブ尽くめの私の3回生の夏休みも残すところあとわずかになりました。クラブは、しんどいことが多いですが、とても楽しいです。クラブの友達は、学年を超えて仲が良く、何でも話せるし、大好きです。そして、クラブ以外は、バイトか買い物かミルク（私の愛犬です）と遊んで夏休みを過ごしました。こんな私ですが、せっかく原稿を書かせていただくので、これを期に、少し今までの自分を少し振り返ってみようと思います。

スイスにいた母は、私を産むために一人帰国し、実家で私を産んしてくれました。小さい時は（も？）とてもやんちゃで、お供え物のリンゴを全部フォークでつついて遊んで笑っていたそうです。一年後には、妹も生まれ、二人でイタズラばかりしていました。しかし、こんな私も小学生になると、優等生を演じていました。そして、中学生高校生になり、私の通っていた学校は、学校行事がとても多い中高一貫校で、友達もたくさんでき、楽しかったです。高校の友達とは、今でも遊びに行きます。夏休みにはみんなでUSJに行ったのですが、12時間聞いても全く疲れないし、全然もの足りませんでした。しかし、勉強をした記憶はあまりなく、陸上部に入っていた私は、真っ黒になって陸上に明け暮れています。その黒さと言うと、グアムに旅行に行った時、黒すぎて現地の人と間違えられた程でした。さすがに人種を超えてしまった時は、自分でも驚きました。こんな感じで高校3年生の夏前まではクラブばかりして過ごし、引退してからは、勉強嫌いで、大学に行くつもりもなかった私は、遊んばかりいました。しかし、ある時、そんな私を見かねた母はついに怒り、大喧嘩してしまいました。そして、結局母が泣いて私に大学に行くようにお願いし、私は大学に行くことになりました。しかし、当時の私は親の気持ちも分からず、

「あ～うるさい。とりあえず大学行けばいいんでしょ？」

というような考えでした。そして、なんとか偏差値を倍ぐらいに伸ばして、誰も予想していなかった阪大に来ることが出来ました。高校の友達は、今でも私が阪大生であることが信じられないみたいで、「賄賂」とか言います。最初は、阪大工学部とか、きっとビミョーな雰囲気なのだろうと思っていた私は、1回生のクラスを見て驚きました。クラスの女の子はみんな可愛く、男の子もお洒落だったからです。そして、楽しい大学生活が始まりました。しかし、大きな問題点がありました。それは、大学が遠いということです。下宿は両親が許してくれない上に、寂しがり屋の私は、一人で生活するのは嫌で、自宅から約2時間30分かけて通学しています。そのため、1回生の頃は、3回生から自宅近くの大学に編入するつもりでした。しかし、私は現在もこうして阪大に通っています。私がこうして阪大に通い続けられたのは、やはり周りの人の支えだと思います。クラブや学科の友達、そして両親や先生方。勉強が大嫌いだった私も、先生方の工夫された授業で、色々な分野にも興味が出てきました。また、社会基盤に分属されてから、人見知りな私は、最初は特定の人としか話せなかったのですが、3回生になって、女の子みんなとも仲良くなり、男の子もとても優しくて面白いので、とても楽しいです。女の子が少ないので、特に悩みもありません。これから、就職をしたりして、またたくさんの人にお会いいますが、今までの出会いと、これからの出会いに感謝の気持ちを忘れずにいたいと思います。そして、本人の前では言えませんが、母にはとても感謝しています。

● ● ●

一番熱い夏休み in カナダ



建築工学科目
3年

山口 敦子

伊丹空港に着陸するとき、大阪の夜景を見て、「大阪は都会だなあ」と感じました。この夏、約2ヶ月間私はカナダのモントリオールで過ごしました。カナダ第二の都市モントリオールの中心地に泊まり、語学学校で英語を勉強しました。バイトをすることもなく、課題に追われることもなく、英語の学習と、映画やナ

イトライフを満喫し、いろんな国から来た同じ年位の人々とたくさん交流し、そして好きな人のそばでずっと過ごしたこの夏休みは、私の人生の中で、忘れられない時間となった。また語学学校の授業を通じて、「自分とはどういう人間か」ということを深く考えさせられたと思う。それは今まで多忙だというのを理由にして目をそらしてきたことであった。今まで約20年間大阪の郊外に家族と一緒に住んできたので、繁華街の近くで、炊事や洗濯、買い物なども全部自分でこなす生活はかなり刺激的でした。カナダ第二の都市といつても、繁華街は歩ける距離内の大きさなので、メトロに乗らずによく歩いたので健康によかった。あと終電を気にせずにバールやシネマに行ってみんなで夜遊びできるのも都会に住む魅力だなと思った。でも飛行機から見た御堂筋線を走る車や大阪中心部のビル群からの光の多さに、やっぱり大阪は都会で、一番好きな街だと思った。

都会といえば、この夏ニューヨークに旅行に行った。今まで東京やパリなど大都市を見てきたけど、ニューヨークの街は、他にはない何か人を惹きつける力があると思う。知り合いのお母さんの知人のアパートメントに2日間泊めてもらった。マンハッタンのダウンタウンにあるNYのおしゃれなアパートメントに泊まるなんて本当にすごいって思った。あの2日間はホテルに泊まつたが、これはマンハッタンのミッドタウンにあって本気で都会のど真ん中だった。私は、それなりの都会で育ったせいか、この年齢だからなのか、都会にすごく魅力を感じる。都会を形作る建物一つは誰かによって考えられた作品なんだと気づいたとき、自分が魅力的だと思うものー部分でも自分が携われる建築の仕事ができたら、それは幸せだと思った。

それともうひとつ、外国について意識させられたのは、自分は日本人であるということ。モントリオールはフランス語圏なので、その語学学校を選ぶ人が少ないせいか、日本人はクラスの中で私一人で、日本についていろいろ質問された。中には私の知らない日本のことともたくさんあり、会話を上手に続けるのには、もっと知識を蓄えなきゃと痛感した。日本のことに対する他の生徒の豊富な知識と、素早い回答能力にはかなりあせったし、触発された。日本人でよかったと思うことは何度もあった。私はカナダからアメリカに2度旅行してそのときただパスポートを見せるだけで国境を渡れたが、南米や他のアジアから来た友達は、彼らの国籍だけで判断されてしまい、そう簡単には外国に行けなくて、何日もかけて、お金を払ってビザを取得し

なければならない。日本人は礼儀正しくて謙虚であるという一般常識的のプラスイメージもあってか日本人には親切だなと感じることもよくあった。

先週、オタワの大学に通っている建築専攻の友達にポートフォリオを見せてもらった。同学年だけどユニークさと完成度の高さに驚かされた。昼夜、土日をまわす、課題に追われるのどこも同じだった。いろいろな刺激を受けて、チャレンジ心に富む今年の秋です。

夢



社会基盤工学科
2年

西本 佳名子

二年前のわたしの夢は、「大阪大学に合格すること」でした。大阪大学の地球総合工学科を目指したのは、実家から通える場所にある大学の建築系の学科だからでした。志望校を決めてからは、その夢に向かって一生懸命に勉強をしました。

大阪大学に合格し建築家を目指して入学したはずだったのですが、「大阪大学に合格する」という数年来の夢が叶ってしまい、向かっていく夢を失ってしまったために、大学に入ってからはなんとなく勉強に打ち込めない日々が続きました。何のために頑張って勉強をするのか分からず、建築家になりたいという思いも徐々に薄れていきました。

そんなときに、わたしの尊敬するアーティストの方がブログでこんなことを書いていらっしゃいました。

「夢はいつまでも遠くに遠くに掲げて、見つめながら生きていく方がいい。叶えちゃったら、夢を失うから。」「その道のりをしっかり歩く為には、いろんな目標をクリアしていくかなければなりません。その“目標”を“夢”とごちゃ混ぜにせず、“目標は目標”“夢は夢”としっかり分けて考えると、今の“夢の色”がはっきりと見えてくると思います。」

この言葉は当時のわたしの状況にぴったり当てはまることがだったこともあり、大変影響を受けた言葉の一つになりました。

二世帯住宅を建てて父と母と自分の家族と一緒に暮らすこと。子供染みた夢のように思われるかもしれません、これが今のわたしの夢です。

わたしの家族は父と母、姉が二人の五人家族です。男の兄弟がないので、いずれ結婚し家を出ることになれば、父と母は二人で離れて暮らすことになってしまいます。そこで、わたしは大阪に二世帯住宅を建て、両親と一緒に暮らしたいと思っています。

わたしの家はあまり裕福な方ではないだろうと思います。わたしと東京の大学へ通う姉の学費や生活費のために、両親は自分のものを我慢してくれていることも、わたしは知っているので、わたしが大人になったら、出来るだけお金の苦労はかけたくないし、いろいろなところへ連れていってあげたいと思います。

この夢を叶えるための大きな目標の一つは、希望の職に就くことですが、わたしは将来自分がどんな職に就き、どんなことをしたいのかまだ分かりません。自分が何に向いていて何ができるのか、また何をしたいのかを見つけるために、今わたしがすべきことは、大学の勉強をしっかりこなして出来るだけ多くのものを吸収することだと思います。

The Freewheelin' Bob Dylan



建築工学科
2年

森下 悟史

建築を志す身になり、いくつも有名な建物を直に、あるいは、写真で見るようになりました。圧倒的な迫力を備える建築、歴史に根付く建築、潤沢な予算に基づく建築。様々な建物があります。なかでも前衛的な建物。憧れます。たとえば、目の回りそうな曲線。大量のアクリルやガラス。凝りに凝ったティール。ため息が出ます。建築として、挑みたい世界です。しかし、アヴァンギャルドな建物で過ごしたいと思いません。ましてや住みたいなんて、思えません。プレタポルテ・コレクションの服装で街を歩かないように。

もちろん、古ければ、伝統的であればよいわけではありません。谷崎潤一郎に憧れながらも、もう、陰の中で暮らせるカラダではなくなりました。「まあどう云う工合になるか、試しに電灯を消してみ」ましても、わたしの居場所はありません。わたしの城はあくまで、蛍光灯が照らす小さなワンルームマンションです。コリーナ、コリーナ。

作家になりたい。それが、はじまりの夢。物書きの意味ではありません。作り手になりたい。もちろん、物書きだってひとつの道。春琴抄に至りたい。

手元にサヴォア邸の写真が1枚あります。無限遠の2倍に焦点が当てられたピンぼけ写真。美術館で見たときは、よく分からなかった写真。杉本博司。写真家の著作を読んだとき、目に見える被写体ではなく、写真が浮き出しました。同時に、コルビュジエの考えが。建物を通して、さらに写真を介して伝わるもの。コルビュジエに対する数多の批評と大判カメラへの語りの内にようやく現れるもの。くよくよするなよ。

スピーカーからはボブ・ディランが流れます。アメリカを代表するシンガー・ソングライター。望もうと望まざるとコルビュジエに捕らわれているように、わたしたちはティランズ・チルドレン。はげしい雨が降る。ティランの声が好きです。彼のメロディが好きです。乾いたギターが好きです。でも、社会的に評価されるのはティランの歌詞。戦争の親玉。だって、概念そのものは言葉を介さないと伝わりませんから。その語りのためにも、ティランの旋律は、ボブ・ディランのブルースは単独で美しい。まるで、ピンぼけ写真のように。

建築を目指す以上、歌歌いのように歌歌いたい。ティランのカバーでピーター、ポール&マリーがヒットしたように。0からではなく、既存の枠組みからつくる世界。本歌取りであり、レディ・メイド。風に吹かれて。そう、はじめから住みたい空間は、派手なプロテ Stanton・ソングではなく、心地よい空間。両眼を失うた佐助と春琴のような。ティランがスーズ・ロトロと腕を組み歩くような世界。北国の少女。前衛よりも、わたしの6畳半から生まれるような空間を。既存を組み立てて言葉を紡げるような。ウシ・モア・チャンスがヘンリー・トマスを下敷きにしたように。そのためにも、学部で、その先の院で、必要なことを精一杯、学びたいです。ボブ・ディランの夢、あらため、わたしの夢。

2009年度構築会役員会報告

日 時 : 2009年5月22日（金）17:30～19:00
 場 所 : 大阪大学中之島センター 2階会議室
 参加人数 : 23名

主な議題 :

1. 2008年度事業報告・会計報告

(1) 本部事業報告・会計報告

玉井旧幹事長、猪井旧幹事、松原幹事より、本部2008年度事業報告、会計報告があり、了承された。

(2) 支部事業報告・会計報告

東京支部・高井副支部長、愛知支部・石井支部長、大阪支部・山口幹事長、兵庫支部・中山支部長、広島支部・坂手支部長より、各支部の2008度の事業報告と会計報告があり、了承された。

2. 2009年度役員選出

会長に昨年度副会長の橋本氏(A72)、副会長に井上氏(C73)が選出された。監事に豊田氏(C92)、飯田氏(A92)、幹事に三好氏(CM00)、2009年卒業生代表役員に谷上氏と小幡氏がそれぞれ選出された。

3. 2009年度事業計画案・予算案

(1) 本部事業計画案・予算案

木多幹事長、松原幹事より、本部2009年度の事業計画案、予算案について説明があった。記念品贈呈費と支部援助金は大幅に減額される案であるが、なお単年度収支は赤字であることの理解が求められた。

(2) 各支部事業計画案・予算案

各支部より事業計画案、予算案についての説明があった。

(1)、(2)について審議の結果、運用により本部予算の他の費目を圧縮し、相当分を支部援助金に充当することを条件に本部予算案ならびに各支部予算案が認められた。

4. その他

構築会財務状況の改善について様々な意見が交わされ、名簿とたよりのウェブ化、慶弔費の削減・取りやめ、記念品贈呈の取りやめ、会費の徴収方法の改善、若い世代の同窓会離れへの対策などについて、本部・支部がより一層の連携を取りながら継続的に検討していくこととした。

【幹事長 木多 道宏 (A88) 記】

◇2008年度 会計報告◇

(2008年5月1日～2009年4月30日)

●収入の部

	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2007年度実績	2008年度実績	2008当初予算
会 費	5,077,520	4,840,636	5,581,710	4,836,050	7,705,116	4,375,660	4,153,420	5,700,000
広 告 料	718,740	438,845	419,340	379,380	379,220	359,370	260,000	360,000
利 息	5,152	57	422	4,408	2,569	3,562	4,032	0
寄 付 金 他	0	0	0	100,000	0	0	0	0
そ の 他	0	54,000	0	10,005	11,000	12,000	400,000	0
単 年 度 小 計	5,801,412	5,333,538	6,001,472	5,329,843	8,097,899	4,750,592	4,817,452	6,060,000
前 年 度 繰 越	8,512,609	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	5,562,594	5,391,680	5,391,680
收 入 計	14,314,021	11,873,233	12,176,645	9,876,960	12,950,431	10,313,186	10,209,132	11,451,680

●支出の部

	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2007年度実績	2008年度実績	2008当初予算
名簿印刷費	4,126,710	2,106,696	4,115,679	2,230,000	3,510,000	2,152,500	3,002,042	3,000,000
名簿発送手数料	0	0	0	0	0	0	0	0
郵便通信費	170,447	77,764	86,126	95,511	223,170	75,923	103,110	100,000
謝 金	285,000	312,000	322,000	312,000	322,000	339,500	322,000	320,000
記念品代	243,660	124,330	153,580	186,061	257,375	209,129	106,540	266,000
支部援助金	1,823,450	1,697,450	1,678,100	995,800	1,744,800	788,500	1,400,700	1,200,000
教室寄付金	800,000	800,000	800,000	800,000	800,000	600,000	600,000	600,000
行 事 費	0	0	0	0	0	400,000	0	0
食 合 費	239,335	405,500	197,400	228,820	230,084	241,354	234,197	250,000
出 張 費	0	59,760	47,400	61,160	59,960	61,160	61,200	70,000
慶弔費	63,300	105,833	215,890	66,600	66,600	45,738	58,900	150,000
備 品	0	0	0	0	0	0	0	0
消 耗 品 費	13,604	462	1,218	18,045	2,832	6,652	2,242	10,000
振替手数料	8,820	8,265	12,135	3,891	3,341	1,050	2,799	10,000
会費滞納分催促費	0	0	0	0	167,675	0	0	150,000
そ の 他	0	0	0	26,540	0	0	30,000	0
支 出 計	7,774,326	5,698,060	7,629,528	5,024,428	7,387,837	4,921,506	5,923,730	6,060,000

	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2007年度実績	2008年度実績	2008当初予算
残 高	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	5,562,594	5,391,680	4,285,402	5,391,680

●繰越金内訳

	2002年度実績	2003年度実績	2004年度実績	2005年度実績	2006年度実績	2007年度実績	2008年度実績
定額賛助金	5,204,990	5,204,990	4,200,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000	2,000,000
郵便為譲	2,930	32,620	5,870	11,866	295,090	8,750	28,520
郵便貯金	1,174,118	438,308	0	2,422,402	2,728,853	43,552	1,702,513
銀行預金	30,584	439,442	340,023	339,404	436,231	3,110,184	108,714
現 金	127,073	54,813	1,324	78,926	102,420	229,194	445,675
合 計	6,539,695	6,175,173	4,547,117	4,852,532	5,562,594	5,391,680	4,285,402

◇2009年度 事業計画◇

事業項目	実施時期
1. 構築会よりの発行・配布	2009年11月頃
2. 記念品の贈呈 卒業者、新規修了者（シャープペンシル） 卒業30周年の会員	2010年3月 2010年3月
3. 支部活動への補助 支部活動への補助金交付	2010年3月
4. 社会基盤・建築工学教室への寄付	2010年3月
5. 役員会の開催	2009年5月22日
6. 「構築会を考える会」の開催	随時

◇2009年度 予 算◇

●収入の部

	2009年度予算	備考	2008年度実績	2007年度実績	2006年度実績	2005年度実績	2004年度実績
会費	4,200,000	前年度並み	4,153,420	4,375,660	7,705,110	4,836,050	5,581,710
広告料	300,000	前年度並み	260,000	359,370	379,220	379,380	419,340
利息	0		4,032	3,562	2,569	4,408	422
寄付金他	0		0	0	0	100,000	0
その他	0		400,000	12,000	11,000	0	0
単年度小計	4,500,000		4,817,452	4,750,592	8,097,899	5,329,843	6,001,472
前年度繰越	4,285,402		5,391,680	5,562,594	4,852,532	4,547,117	6,175,173
収入計	8,785,402		10,209,132	10,313,186	12,950,431	9,876,960	12,176,645

●支出の部

	2009年度予算	備考	2008年度実績	2007年度実績	2006年度実績	2005年度実績	2004年度実績
名簿印刷費	2,000,000	前々年度並み	3,002,042	2,152,500	3,510,000	2,230,000	4,115,679
郵便通信費	100,000	平年並み	103,110	75,923	223,170	95,511	86,126
謝金	320,000	平年並み	322,000	339,500	322,000	312,000	322,000
記念品代	300,000	平年20万円+2008年度未納分	106,540	209,129	257,375	186,061	153,580
支部援助金	900,000	昨年度並み	1,400,700	788,500	1,744,800	995,800	1,678,100
教室寄付金	600,000	昨年度並み	600,000	600,000	800,000	800,000	800,000
行事費	0	実施予定なし	0	400,000	0	0	0
会合費	250,000	平年並み	234,197	241,354	230,084	228,820	197,400
出張費	60,000	平年並み	61,200	61,160	59,960	61,160	47,400
慶弔費	60,000	平年並み	58,900	45,738	66,600	66,600	215,890
備品	0	-	0	0	0	0	0
消耗品費	5,000	平年並み	2,242	10,060	2,832	18,045	1,218
振替手数料	3,000	平年並み	2,799	1,050	3,341	3,891	12,135
会費滞納分催促費	0		0	0	167,675	0	0
その他	0		30,000	0	0	26,540	0
単年度小計	4,598,000		5,923,730	4,924,914	7,387,837	5,024,428	7,629,528
次年度繰越	4,187,402		4,285,402	5,388,272	5,562,594	4,852,532	4,547,117
支出計	8,785,402		10,209,132	10,313,186	12,950,431	9,876,960	12,176,645

構築会役員一覧

会長 橋本 彰 (A72)
 副会長 井上 章 (C73)
 監事 豊田 裕司 (C92) 飯田 国 (A92)
 幹事長 木多道宏 (A88)
 幹事 松原茂樹 (A98) 三好崇夫 (CM00)

学年委員

	土木	建築
1950		
1951	木田五一郎	伊藤俊夫
1952	竹山喬	木村康彦
1953	高野浩二	大久保昌一
1953	濱宏	片倉健雄
1954	松山巖	杉原正昭
1955	堤道夫	荒木兵一郎
1956	波田凱夫	山田俊満
1957	広内徹	秦洋一郎
1958	豊島良三	脇山広三
1959	上根善教	金田宏
1960	小野敦	藤井象一
1961	村上昇	真塙達夫
1962	榎木通男	入江恂一
1963	松井保	中江新太郎
1964	濱田圭一郎	森田晴美
1965	島田壮八郎	小島孜
1966	宇野剛正	川畑幸一郎
1967	梶川靖治	竹嶋祥夫
1968	谷口剛也	香西喜八郎
1969	武内一彦	大津俊雄
1970	阿部信晴	木林長仁
1971	伊藤伸司	角彰
1972	木村正二	森田孝夫
1973	森永勝登	木村修治
1974	青木利博	巽昭夫
1975	富士川洋一	家倉泉
1976	長谷川善信	鈴木克彦
1977	蓮輪賢治	古宮嘉之
1978	後野正雄	吉村英祐
1979	正田正一	有坂伸二

	土木	建築
1980	辰谷義明	多田元英
1981	戸上拓也	菅原正晴
1982	中田憲正	山中俊夫
1983	山辺建二	丁野成人
1984	藤田眞	板田昌彦
1985	玉井昌宏	杉本正三
1986	山内一浩	桐野健治
1987	武藤和好	芦田智之
1988	鍋島康之	椎名辰之
1989	小野正博	川合通裕
1990	山見晴三	中塚光一
1991	村上茂之	向井洋一
1992	小野潔	岩井潔
1993	大西弘志	若松達史
1994	神田忠士	澤井祥晃
1995	荒木進歩	西豊
1996	松本忠	田中聰
1997	山内淳平	八木秀樹
1998	木村充	橋本武士
1999	下村公一郎	寺前隆
2000	内田美範	多田正治
2001	橋本保則	軸丸久司
2002	竹口直樹	山本訓久
2003	蒲原武志	藤本正基
2004	青木康素	柴田景太
2005	窪田勇輝	川島尚教
2006	宮田亮	竹島健一朗
2007	峯澤博行	堀本明伸
2008	矢田尚樹	岩本卓麻
2009	谷上裕明	小幡正裕

支部役員一覧

大阪支部 支部長 松田好史(C74)

副支部長 富士川洋一(C75)

副支部長 垣内真治(A84)

幹事長 長山喜則(C77)

愛知支部 支部長 石井湧太郎(C76)

副支部長 青木伸一(C81)

幹事長 降旗達生(C83)

東京支部 支部長 上阪恒雄(C70)

副支部長 高井正行(A77)

幹事長 山本和伸(A84)

兵庫支部 支部長 中山久憲(C73)

副支部長 本井敏雄(C75)

幹事長 福本豊(A82)

広島支部 支部長 芥川省三(C74)

副支部長 島田伸彦(C74)

幹事長 石井和夫(C85)

【大阪支部たより】

構築会会員の皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお慶び申し上げます。また、平素は大阪支部の活動のご理解、ご協力を賜りまして、厚く御礼申し上げます。

大阪支部では、見学会や講演会の行事を行っていますが、平成21年度は、11月21日（土）に、見学会「山陰本線余部橋梁」と総会を開催しました。余部橋梁の見学会のご報告は次回に譲ることとして、平成20年度の構築会大阪支部の活動につきまして報告させて頂きます。まず、平成20年11月には、建設中の阪神なんば線の見学会を開催しました。ドーム前駅及びドーム前駅から九条駅間のシールドトンネルの一部を歩きながら見学させて頂きました。ドーム前駅には、大きな吹き抜けの広間が設けてあり、壁にはレンガ積みの仕上げがされ、開放感とレトロ感の溢れる個性的な印象でした。その後、大阪大学中之島センターにおきまして、社会基盤工学部門長の鎌田教授、建築工学部門長の多田教授をお招きし、総会を開催しました。さらに、平成21年2月19日には、第2回として「環境」をテーマとした講演会を開催しました。土木の新田教授から「環境と福祉の統合型交通まちづくりについて」、また、建築の山中教授から「環境配慮建築のための技術開発」と題したご講演を頂きました。各々、交通、建築の分野からの環境に対するアプローチをご講演頂き、大変興味深く拝聴致しました。参加者からは、活発な質問がいくつも上り、大変好評でありました。お二人の先生には、ご多忙のところ、我々大阪支部の活動に心良くご協力頂きましたこと、この場をお借りしまして、御礼申し上げます。その後、懇親会、総会では、福田構築会会長をお招きし、盛況のうちに終えることができました。これも、ご来賓の方々をはじめ、皆様のご協力があつてこそと支部役員一同感謝いたしております。



阪神なんば線見学の様子



総会・懇親会の様子

今年度も残り少なくなりましたが、今後とも会員の皆様のご要望等を十分拝聴しながら、大阪支部ひいては構築会の一層の発展に、微力ながら精一杯努力して参りたいと存じますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

なお、平成21年度の新役員が以下のとおり決まりました。

支 部 長 松 田 好 史 (C74)

副支 部 長 畠 土 川 洋 一 (C75)

垣 内 真 治 (A84)

監 事 今 井 雅 則 (A76)

柳 原 範 明 (C78)

幹 事 長 山 喜 則 (C77)

【愛知支部たより】

愛知支部は、東海三県といわれる愛知県、岐阜県、三重県に在住もしくは勤務している会員で構成しています。東海三県での近況をお知らせします。

愛知支部総会を開催しました。

2009年7月3日愛知支部総会を開催しました。総会では、27名の方に参加していただきました。連絡先の判明している会員数は164名ですので、参加率16%です。

会計報告、事業報告ののち、役員を改選しました。石井支部長以下、下記に記載しました9名の役員を新たに選任いたしました。さらに2009年度の活動計画として、これまで毎年3月に総会を開催しておりましたが、今後は年度末の繁忙期を避け、7月に総会、1月に例会を開催し、これまでに増して支部活動を活性化することを決議いたしました。

その後、大阪大学工学部 建築工学科教授 倉本 洋様に大学の様子も含めてお話しいただきました。さらに、愛知県豊橋市 副市長 野崎 智文様(C87)にご講演をいただきました。

総会、講演後の懇親会では、常連メンバーに加えて、新役員の声掛けで多数参加いただいた初参加者を交えてにぎやかにすごしました。

次回は、2010年1月29日に支部例会を予定しています。多くの方のご参加をお待ちしています。

今年度の愛知支部役員は以下のとおりです。

支 部 長	石 井 洋太郎	(C76)
副 支 部 長	青 木 伸 一	(C81)
監 事	福 西 清 香	(A79)
幹 事 長	降 篠 達 生	(C83)
幹 事	宮 丸 孝 史	(A83)
	安 藤 渉 二	(A84)
	鈴 木 正 紀	(C88)
	石 田 豪 史	(C91)
	三 宅 修 司	(C97)

【幹事長 降篠 達生 (C83) 記】



【東京支部たより】

東京支部では、平成 21 年 7 月 31 日に、第 23 回支部総会・懇親会を開催しました。

総会・懇親会においては、来賓として構築会本部から橋本会長、大学から西田先生、山中先生に、お忙しいスケジュールの合間を縫ってご参加いただき、約 60 名の支部会員とともに懇親を深めることができました。

総会では平成 20 年度の活動報告および会計報告と平成 21 年度の活動計画が承認されました。また、来年度は支部長の改選期にあたることから、次期支部長として高井正行様 (A77) が選任され、次期副支部長として山下廣行様 (C74)、監事として大田哲也様 (C83) の指名および紹介がありました。

また、平成 21 年 9 月 12 日に、東京国際空港 D 滑走路建設外工事の現場見学会を開催しました。大林組 JV 所長：黒川修治様 (C80) 他に案内して頂いて、埋立工区、棧橋工区、連絡誘導路工区など壮大な現場を興味深く見学し、有意義な時間を送ることができました。

なお、東京支部役員については若干の交代があり、平成 21 年度は以下の役員で活動を行っています。

支 部 長	上 阪 恒 雄 (C70)
副支部長	高 井 正 行 (A77)
監 事	新 村 洋 行 (A81)
幹 事 長	山 本 和 伸 (A84)
幹 事	鬼 丸 貞 友 (A82) 長 坂 誠 司 (C89)
	佐 脇 宗 生 (A82) 竹 内 一 郎 (A91)
	大 田 哲 也 (C83) 橋 口 也 人 (C92)
	高 久 雅 喜 (C84) 野 呂 好 幸 (C93)
	福 岡 篤 信 (A84) 澤 井 一 淳 (C93)
	藤 沢 一 善 (A84) 山 仲 俊一郎 (C03)
	町 田 博 紀 (C86) 山 下 直 紀 (A05)
	谷 村 幸 裕 (C87)

【幹事長 山本 和伸 (A84) 記】



懇親会での記念撮影



現場見学会での記念撮影

【兵庫支部たより】

兵庫支部では、例年、見学会と講演会の2回の行事を開催しています。平成21年度の行事として8月27日に見学会を開催しましたので紹介させていただきます。

今年度は、環境と景観をテーマとして、会員34名が、淡路島内の3カ所を見学しました。

最初に見学したのは、淡路島の北部（淡路市野島）にある「兵庫県立淡路景観園芸学校」です。日本で唯一の園芸分野の専門教育研究機関で、開校10周年を迎えたこの4月に大学院を設置したところです。豊かな自然の中にある13haのキャンパスには、フィールドワークの場である庭園を取り囲むように教育施設が配置されており、人と自然の共生の思想が具現化された景観の美しさに感銘を受けました。また、学校OBの方に愉快な口調でご案内いただき、和やかな雰囲気のなかで見学をさせていただきました。

続いて、淡路島の中部（淡路市富島）にある「富島震災復興土地区画整理事業地区」を車内から見学しました。阪神・淡路大震災で家屋の80%が全半壊し、2ヶ月後には骨格的な都市計画を決定、住民意向を反映するための段階的な変更を経て、ようやく完了の時期を迎えた地区です。漁師町特有の網道に沿った細街路、随所にある祠や神社と一緒に公園などを見て、震災からのふるさとの復興に込められた関係者の様々な思いを感じ取ることができました。

最後は、淡路島の南部（南あわじ市阿那賀）にある「南あわじウインドファーム」を見学しました。北海道根室市の発電事業者「クリーンエナジーファクトリー」が建設し運営する、年間9,200万kWの電気を生み出す国内最大級の風力発電施設で、海拔120m、南北約4キロの丘陵に、高さ85mの風車15基が海に向かって立ち並んでいます。山の斜面に敷かれた進入路は、建設時の機材搬入路で、バス一台がぎりぎり通れるだけの幅しかなく、スリルを味わいながら風車の足下までたどり着きました。塔は直径4.3m。ドイツ製の回転翼一枚の長さは44m、FRP製で重さは8.5t。6秒に1回転しています。塔に近づき機械的な風切り音を聞いてみると、まるで巨大なロボットを見上げているようで、近未来的な不思議な感覚になりました。

見学会の後、構築会の橋本会長（兵庫支部会員）と社会基盤工学部門の奈良先生をお迎えし、41名の参加のもと、JR神戸駅近くの和食料理店で懇親会を開催しました。見学先からの到着が若干遅れたため、バス車内で総会を開催し、店では懇親会のみを開催するというイレギュラーな方たちとなりましたが、貸し切りの店ということもあり、気兼ねなく歓談することができ、親睦が大いに図られたのではないかと思います。

例年、年度後半には講演会を開催してきましたが、今年度は、若手会員の参画を促すための行事を行う予定です。また、兵庫支部のホームページを開設することも考えています。このような多彩な催しや企画を通じ、会員間の交流と情報交換の場を提供していくべきと考えています。

支 部 長	中 山 久 憲	(C73)
副支部長	本 井 敏 雄	(C75)
監 事	園 田 学	(A78)
顧 問	松 浦 勢 一	(C53)
	入 江 拘 一	(A62)
	岸 田 威	(C66)
	志 波 秀 明	(C71)
相 談 役	長 尾 直 治	(A69)
幹 事 長	福 本 豊	(A82)
	藤 原 一	(A79)
	王 柏 群	(A54)
	神 田 徹	(C53)
	西 田 泰 晴	(A68)
	橋 本 彰	(A72)
	川 谷 充 郎	(C72)
	道 奥 康 冶	(C77)
	木 村 公 之	(A59)
	明 渡 稔 輔	(C65)
	佐 保 千 載	(C71)

【文責：兵庫支部幹事長 福本 豊 (A82)】



兵庫県立淡路景観園芸学校
学校OBの方から説明を受ける参加者



南あわじウインドファーム
長さ44mの回転翼(見本)の前で集合写真

【広島支部たより】

平成20年度は支部発足から10周年を迎えました。7月に開催した総会では、今までの活動内容をPRし、これからますますの発展に向けて決意を新たにしました。

また、恒例の現場見学会として9月に広島工業大学の新講義棟の建設現場を見学しました。完成に向けての内装工事の途上にありました。制振装置は講義室の歩行による振動の低減のために各階の床面の下（天井裏）に設置されていました。効果を体感するため起振機による振動実験も実施してもらい、普段ではできないような貴重な体験となりました。また、広工大の学生さんも見学会に参加されるなど、大変有意義な見学会でした。

平成21年度は役員を改選して次の10年に向けて新たなスタートを切って、よりいっそうの支部の発展に努めていきます。また、恒例の現場見学会の開催を季節の良くなるこの秋ごろ企画しておりますので、改めてご案内致します。

最後になりましたが、他地区より広島地区に転入された方がおられましたら、広島支部役員までご連絡頂けますようお願い致します。



広島工業大学
新講義棟

支 部 長	芥 川 省 三 (C74)
副支部長	島 田 伸 彦 (C74)
幹 事 長	石 井 和 夫 (C85)
監 事	中 出 收 (C86)
幹 事	蒲 原 幹 生 (C87)
	小 西 英 明 (C95)
	南 博 高 (C95)
	下 村 和 也 (C97)
	久 保 充 司 (A98)



起振機による
振動実験の説明

【前幹事長 増田 伊知郎 (C80) 記】



制振装置の
設置状態



構築会会則

平成17年4月1日改正

総 則

- 第1条 この会は構築会という。
- 第2条 この会は会員の親睦を計ることを目的とする。
- 第3条 この会は事務局を大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻のうち、社会基盤工学コースあるいは建築工学コースのいずれかに置く。
- 第4条 必要なときは役員会の議決によりこの会の地区支部、職場部会を設けることができる。

会 員

- 第5条 この会の会員は
- (1) 大阪大学工学部構築工学科、土木工学科、建築工学科、地球総合工学科の土木工学科、社会基盤工学科目ならびに建築工学科目の卒業生、学生
 - (2) 大阪大学大学院工学研究科構築工学専攻、土木工学専攻ならびに建築工学専攻、旧 地球総合工学専攻の地球保全総合工学領域および地域文化デザイン工学領域、地球 総合工学専攻社会基盤工学コースならびに建築工学コースの卒業生、学生
 - (3) (1) (2) に対し、教育および指導を行った旧教官、旧教員、現教員および役員会の 議決によって入会を認められた者とする。
- 第6条 この会の会員に次の3つの種別を設ける。
- (1) 正会員：卒業生、教員。
 - (2) 特別会員：名誉教授、元教官、非常勤講師、元非常勤講師および役員会の議決よつて入会を認められた者。
 - (3) 学生会員：学部学生および上1号に該当しない大学院生。

役 員

- 第7条 この会に会長1名、副会長1名、幹事長1名、監事2名、委員若干名、幹事若干名の役員を置く。
- 会長は本会を代表し会務を総括する。副会長は会長を補佐し職務を代行する。
- 幹事長は会長を補佐し幹事団を総理する。監事はこの会の会計を監査する。
- 委員は会務を評議する。幹事は会務を処理する。
- 第8条 会長および副会長は正会員の中より役員が推薦する。
- 幹事長は地球総合工学専攻社会基盤工学コースおよび建築工学コースの教授、准教授、講師のうちから互選する。委員は各卒業年次から2名ずつ、各支部から1名ずつ互選する。
- 監事は委員のうちから互選する。幹事は地球総合工学専攻社会基盤工学コースおよび建 築工学コースの教員から選出する。
- 第9条 役員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

役員会・総会

第 10 条 役員会は会長、副会長、幹事長、委員および幹事によって構成され、年 1 回これを聞く。但し、会長が必要と認めたときは隨時これを召集することができる。

第 11 条 会長は必要に応じて総会を開く。

会 計

第 12 条 この会の費用は会費および寄付金その他をあてる。会費の変更は役員会の議決によってこれを定める。

第 13 条 会費は 1 ケ年、正会員 3,000 円とする。ただし、他大学を含めた大学院在学中の正会員は半額とする。

また、卒業 45 周年を迎えた会員は、会費を滞納していない限り卒業 46 年目以降の会費を免除する。

第 14 条 この会の会計は監事が監査し、その承認をえて役員会でこれを報告する。

事 業

第 15 条 幹事団は次の各号の事業を行う。

- (1) 会員名簿の刊行と配布。
- (2) 講演会、見学会などの開催。
- (3) その他の行事。

第 16 条 会員が叙位、叙勳などの栄に浴した場合、会長より祝電を打つことができる。

第 17 条 会員が弔事の際は、次の各号による。

- (1) 正会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、櫻または盛花一対を呈する。
- (2) 特別会員が逝去の場合は会長より弔電を打ち、櫻または盛花一対を呈することができる。
- (3) 学生会員が逝去の場合は会長より弔電を打つことができる。

会則の変更

第 3 条 この会の会則の変更は役員会の議決によってこれを定め会員へ報告する。

付 則 この会則は平成 17 年 4 月 1 日より実施する。

教室たより

KOUCHIKU-KAI

◇社会基盤工学部門

・社会基盤工学講座

社会基盤設計学領域	内 線
教 授 鎌 田 敏 郎	※ 7619
准 教 授 大 倉 一 郎	※ 7620
助 教 大 西 弘 志	※ 7618
特任助教 内 田 慎 哉	※ 7618

構造工学領域

教 授 奈 良 敬	※ 7600
助 教 亀 井 義 典	※ 7599
助 教 三 好 崇 夫	※ 7599
特任研究員 宮 寄 靖 大	※ 7599

地盤工学領域

教 授 常 田 賢 一	※ 7623
准 教 授 阿 部 信 晴	※ 7624
准 教 授 小 田 和 広	3517

地球環境保全工学領域

教 授 中 辻 啓 二	※ 7603
准 教 授 玉 井 昌 宏	※ 7604
助 教 小 泉 圭 吾	※ 7346
事務補佐員 松 浦 由 子	※ 7603

・社会システム学講座

国土開発保全工学領域

教 授 出 口 一 郎	※ 7613
准 教 授 荒 木 進 歩	※ 7614
助 教 有 田 守	※ 7615

みず工学領域

教 授 西 田 修 三	※ 7606
助 教 入 江 政 安	※ 7605
事務補佐員 松 橋 加寿江 (部門長付)	※ 7622

交通システム学領域

教 授 新 田 保 次	※ 7608
准 教 授 飯 田 克 弘	※ 7611
助 教 猪 井 博 登	※ 7610
事務補佐員 梶 川 祥 子	※ 7609

◇建築工学部門

・建築構造学講座

建築地震地盤学領域	内 線
教 授 宮 本 裕 司	※ 7634
助 教 柏 尚 稔	※ 7634
事務補佐員 坂 田 奈緒美	※ 7633

コンクリート系構造学領域

教 授 倉 本 洋 藏	※ 7635
准 教 授 岸 本 一 藏	※ 7636
助 教 中 川 隆 夫	3526
事務補佐員 坂 田 奈緒美	3526

鉄骨系構造学領域

教 授 多 田 元 英	※ 7651
准 教 授 葉 原 進	※ 7652
助 教 向 出 静 司	※ 7653
事務補佐員 森 容 子	※ 7653

建築・都市環境デザイン学領域

教 授 相 良 和 伸	※ 7566
准 教 授 小 浦 久 子	※ 7627
助 教 澱 野 敦 夫	※ 7355

技術専門職員 松 井 貴 志	※ 7653
----------------	--------

・建築・都市デザイン学講座

建築・都市計画論領域

教 授 奥 俊 信	※ 7639
准 教 授 鈴 木 育	※ 7641
准 教 授 木 多 道 宏	※ 7640
助 教 松 原 茂 樹	※ 7640
助 教 吉 岡 聰 司	※ 4479
事務補佐員 吉 住 優 子	※ 7641

建築・都市人間工学領域

教 授 横 田 隆 司 ※ 7647
講 師 飯 田 匠 ※ 7648
助 教 伊 丹 康 二 ※ 7649

事務室

中 原 勝 治 ※ 7628
宮 下 勝 裕 ※ 7628
松 田 千 博 ※ 4220

建築・都市環境工学領域

教 授 山 中 俊 夫 ※ 7643
准 教 授 甲 谷 寿 史 ※ 7644
助 教 桃 井 良 尚 ※ 7645
事務補佐員 望 月 奈帆子 ※ 7645
事務補佐員 永 吉 美 穂 ※ 7655
(部門長付)

図書室

新 名 麻紀子 ※ 7592

建築・都市形態工学領域

教 授 阿 部 浩 和 ※ 5827
助 教 安 福 健 祐 ※ 5825

技術専門職員 川 端 修 ※ 3532

代表 : 06-6877-5111

※はダイヤルイン 06-6879-〇〇〇〇



事務局たより

2009

会員の皆様には、平素より構築会の運営にひとたなご支援、ご助力を賜り、事務局一同心よりお礼申し上げます。

1. 「構築会たより・会員名簿」の発送と会費納入について

2007年度より、会費請求時に12,000円を超える滞納をされている会員の皆様方への会員名簿・たよりの発送を停止いたしております。ただし、滞納額の多少に関わらず3,000円以上の会費を納入して頂いた場合には、会費納入の意思があるものと判断させて頂いて、会員名簿・たよりの送付を再開させております。

2. 事務局役員の交代

今年度の役員会をもちまして、玉井昌宏幹事長(C85)、猪井博登幹事(C99)が任期満了のため退任し、新たに幹事長として木多道宏准教授(A88)、幹事として三好崇夫助教(CM00)が就任しました。松原茂樹幹事(A98)とともに3名体制で事務局の運営をしております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

3. 財務状況の改善について

昨年度は例年ない財務状況の悪化を経験いたしました。若手会員の会費未払い、広告収入の減少などが急激に進んだ結果であり、この傾向はますます強くなると推察されます。これまで様々な支出の節約を進めてまいりましたが、今年度は各支部の支出に多額を占める通信費の節約を行うため、電子メールへの切り替えを行うことといたしました。各支部役員を窓口として、会員の電子メールアドレスの調査を進めておりますので、会員の皆様にはご協力いただきますようお願い申し上げます。

4. 名簿のウェブ化の検討

昨年度より幹事会では名簿のウェブ化に関する検討を始めました。ウェブの維持費が年間40万円程度で済み、支出の抜本的な改善につながるためです。昨年度に会員各位の皆様方にウェブ化に関する意向調査を行った結果、約8割の方々がウェブ化に賛成される結果となりました。なお約3割の方々は印刷を希望されており、ウェブ化の時期や、注文方式による印刷の継続などについてより具体的な検討を進めております。ウェブ化に切り替えるためには、システム構築に約250万円程度の予算が必要であり、年々繰越金が減少する中、できるだけ早い時期のウェブ化が必要です。皆様のご理解とご協力を願い申し上げます。

5. 本会ホームページと事務局メールアドレス

2002年度より、構築会のホームページを下記のURLで運営しております。構築会たよりのバックナンバーなども掲載していますので、是非一度ご覧下さい。

<http://www.arch.eng.osaka-u.ac.jp/kouchiku/index.html>

事務局への連絡用としてメールアドレスを設置しております。住所変更、会費のお問い合わせ、ご意見などございましたら、ご遠慮なくご利用下さい。なお、このアドレスに送信されたメールは、事務局役員全員に配信される様になっております。

kouchikukai@arch.eng.osaka-u.ac.jp

6. 住所変更はがきのメールアドレス欄について

昨年度より、巻末の住所変更はがきに連絡用Eメールアドレス欄を設けております。3でご説明いたしましたように、事務局、支部からの通信費を節約するためにも、できるだけご記入いただきますようをお願い申し上げます。

【2009年度幹事長 木多 道宏 (A88) 記】



業界案内

KOUCHIKU-KAI

業界案内目次

(株) 総合資格	87
(株) 大林組	88
(株) 奥村組	88
五洋建設(株)	89
(財) 災害科学研究所	89
ジャパンパイル(株)	90
大成建設(株)	90
(株) 竹中工務店	91
中央復建コンサルタンツ(株)	91
戸田建設(株)	92
(財) 日本地下水理化学研究所	92
(株) 横河ブリッジホールディングス	93

平成20年度 1級建築士 設計製図試験

合格者
占有率
近畿2府3県

No.1

近畿2府3県の合格者の
2人に1人以上は、当学院の受講生でした。

近畿2府3県合格者占有率
近畿2府3県=大阪府・京都府・兵庫県・奈良県・滋賀県

近畿2府3県
合格者
672名中
373名

55.5%

※ 総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者は一切含まれておりません。

*Catch your dream,
get the future!* 建築士・宅建

平成20年度も多くの

大阪大学OB

が当学院の講座を利用して
合格されました!

大阪大学卒業合格者43名中
当学院合格者30名

当学院占有率

69.8%

※ 総合資格学院の合格実績には、模擬試験のみの受験生、教材購入者、無料の役務提供者は一切含まれておりません。

※ 卒業大学合格者数は、(財)建築技術教育普及センター発表による。

全国に拡がる合格ネットワーク

全国 63 拠点

確かな実績に基づく指導ノウハウで合格に導きます

開講講座

1級・2級建築士

宅地建物取引主任者

1級建築施工管理技士

実務講座 木造建築構造設計コース/建築構造計算実践コース

株式会社 総合資格

(社)日本建築学会会員 登録技術者講習実施機関 登録番号 7
(社)全国産業人能力開発団体連合会会員 宅建登録講習機関 登録番号(2)第D09号
宅建登録実務講習実施機関 登録番号(1)第5号

株式会社 総合資格学院法定講習センター

一级建築士定期講習 登録番号 第5号
二级建築士定期講習 登録番号 第4号
管理建築士講習 登録番号 第2号

受験対策書籍出版 —— お求めは全国有名書店および当学院ホームページにて

WEB
SITE

総合資格 検索 いますぐ! ウェブ検索

www.shikaku.co.jp



総合資格学院

梅田校 TEL.06-6374-1411 新大阪校 TEL.06-6101-1911 京橋校 TEL.06-6882-8211 なんば校 TEL.06-6648-5511
堺校 TEL.072-222-9311 尼崎校 TEL.06-6430-6811 神戸校 TEL.078-241-1711 姫路校 TEL.0792-24-1411
京都校 TEL.075-352-3011 草津校 TEL.077-566-6911 奈良校 TEL.0742-30-1511

工法は変わっても
創るスピリットは
変わらない。

一八九二年、大阪に一つの建設会社が生まれました。
それから、一一〇数年、
便利な建設機械が、つぎつぎに増える今でも
創る人間の情熱が、いちばん大切。
その考え方には、変わりはありません。
使う人の気持ちを考えることができるのは
人間にしかできないことだから。
きちんと創る。私たちは大林組です。



www.obayashi.co.jp

創業時店舗の看板

人と自然を、技術でむすぶ。

人と自然を大切にし、よりよい未来づくりに貢献したい。
その“こころ”を、「人」という字をモチーフにした
シンボルマークに込めました。
「人」と出会い、「人」と響きあう街づくり、環境づくり。
奥村組は建設事業を通して
人と自然のお役に立てるよう歩みつづけます。

 奥村組
OKUMURA CORPORATION

本社：大阪市阿倍野区松崎町2-2-2 TEL. 06(6621)1101
東京本社：東京都港区芝5-6-1 TEL. 03(3454)8111
<http://www.okumuragumi.co.jp>

ワクワク未来

創りだす



Mr. PENTA

揺るぎない技術力と時代の先見性
をベースに、人が、自然が、地球が
夢見る理想の姿へ向けて前進する。
私たち五洋建設は、潤い豊かな未
来を育んで参ります。

つくることから 育むことへ――



本社 東京都文京区後楽 2-2-8 大阪支店 大阪市北区芝田 2-6-23 オーエックス梅田ビル本館
<http://www.penta-ocean.co.jp>

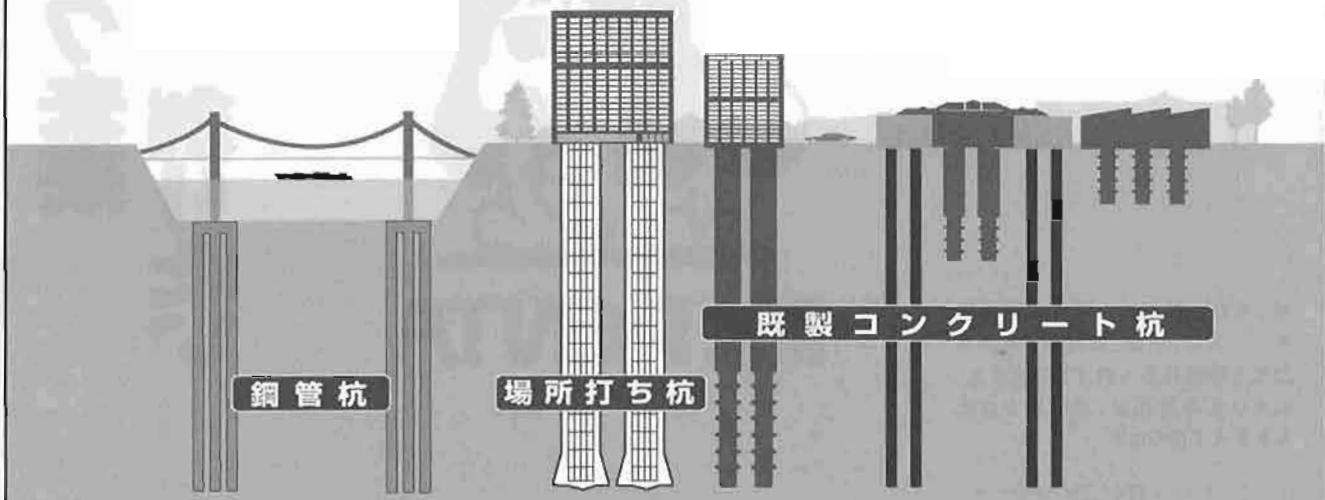
災害を科学して
豊かな国土を創造する。

財團法人 災害科学研究所
理事長 楢木 亨

〒530-0005 大阪市北区中之島3丁目2番4号 大阪朝日ビル
TEL 06(6202)5602 FAX 06(6202)5603

総合的な基礎建設会社である『ジャパンパイル株式会社』は、
皆様に信頼される建物基礎を提供させて頂きます。

業界最大の品揃えをもち、複雑な地盤と 建物条件に応じた最適な基礎を提案いたします。



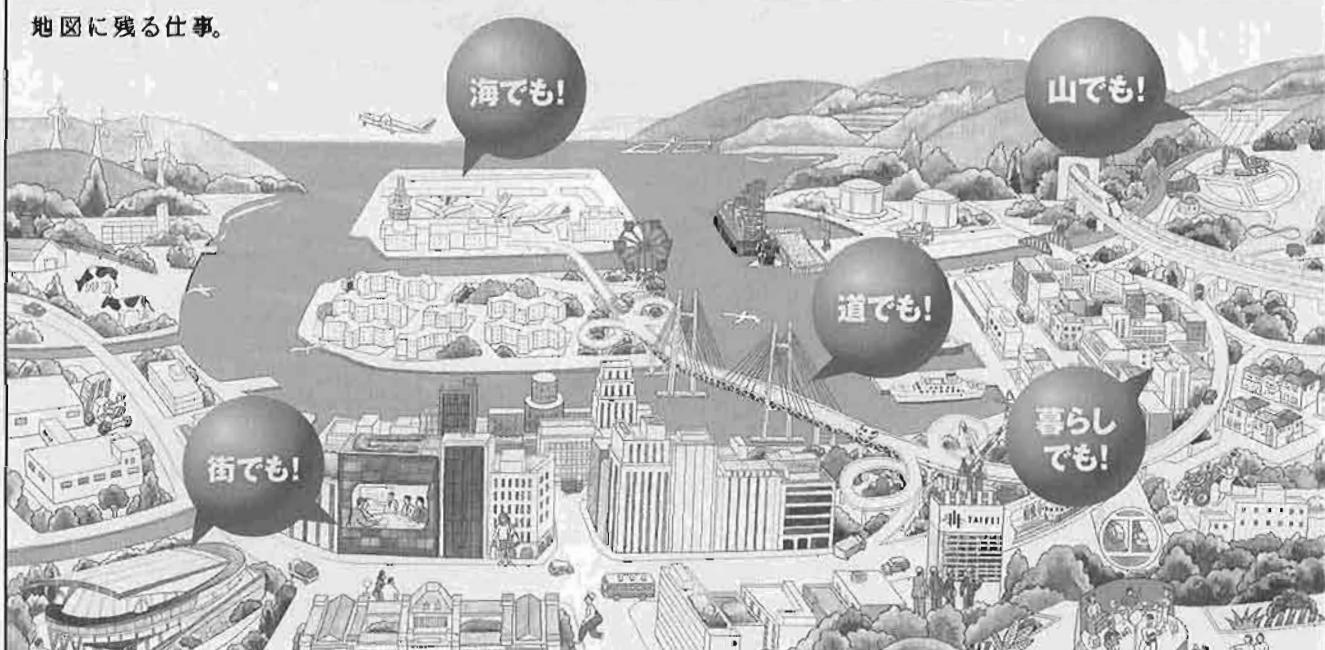
ジャパンパイル株式会社

<http://www.japanpile.co.jp/>

本社 〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-1-1 田辺浜町ビル
TEL.03-5843-4192 FAX.03-5651-0192

支店／北海道・東北 支社／関東・中部・関西・中四国・九州

地図に残る仕事。



人がいきいきとする環境を創造する

暮らしをもっと便利に、安全に。地球環境に配慮した社会基盤づくりから、
次世代へと引き継ぐべき、さまざまな施設まで。

大成建設が目指す、人がいきいきとする環境へ。私たちのチャレンジはつづきます。

 大成建設 <http://www.taisei.co.jp>



サステナブル建築は
地球がのぞむスタンダード。

SUSTAINABLE WORKS®

サステナブル・ワークス

持続可能な社会を未来へ

例えば、生物多様性の保全、資源循環の推進、地球温暖化対策……。

美しい地球を未来の子供たちに遺すため、

建築に課せられたテーマは、たくさんあります。

私たちは、皆さまのパートナーとして

サステナブルな社会を、一緒に築き上げたいと願っています。

想いをかたちに



竹中工務店

お問い合わせは _____ 広報部へ
〒136-0075 東京都江東区新砂1丁目1-1 Tel.03(681)05140
〒541-0053 大阪市中央区本町4丁目1-13 Tel.06(626)5605

知を活かし 人・地域・地球との調和を実践する
創造的で総合的な知的サービス



CREATIVE & FULL KNOWLEDGE

中央復建コンサルタンツ株式会社

<http://www.cfk.co.jp>

本社：大阪・東京 支社：名古屋・神戸・広島・福岡

(卒業生) 油谷 進介(昭46修 常務取締役)

神原 康樹(昭62修 構造系部門 橋梁グループ プロジェクトマネージャー)

名越 聖子(平10 鉄道系部門 地下鉄グループ サブリーダー)

齊藤 智和(平11 道路系部門 道路設計グループ サブリーダー)

和田 りえ(平14修 鉄道系部門 鉄道グループ)

品質
信頼
技術
革新

人間のことを、考える。
環境のことを、もっと考える。



ISO 9001・14001認証取得

戸田建設

本社 / TEL 03-3535-1354 東京都中央区京橋1-7-1 □ (03) 3535-1354

<http://www.toda.co.jp/>

育水しよう 地下水 使おう

地下水の流動と汚染

地下水の流れをみよう
地下水位の変化に注目しよう
土壤・地下水汚染を防ごう

地下水・地盤の災害や障害

用水と地盤沈下の関係を知ろう
液状化やビル浮き上りを防ごう
漏水や浸透の影響を解明しよう

地下水・地下熱の利活用

地下水を100%使おう
地下熱を100%使おう
地下水で低炭素社会を作ろう

理事長 村岡 浩爾 (C34)

大阪大学名誉教授 (平32)

土木学会名誉会員

日本水環境学会名誉会員

副理事長 日野 峻栄

専務理事 陳 活雄

役員・所属 (大阪大学出身者)

前田 泰 敦 C53 監事 元近鉄造園土木株社長

佐藤 邦 明 C56 理事 論文建設技術研究所顧問

中辻 啓 二 C69 理事 大阪大学大学院教授

天野 順 正 C66 評議員 關東本鐵工所顧問

阿部 信 賢 C70 評議員 大阪大学大学院准教授

鍋島 康 之 C88 評議員 明石工業高等専門学校准教授

松井 保 E63 所員 立命館大学客員教授

端野 道 夫 C65 所員 大阪大学名誉教授

平田 健 正 C73 所員 徳島大学名誉教授

福原 博 幸 CM79 所員 和歌山大学教授

福水 勲 発酵64 所員 篠井大学教授

元大阪人間科学大学教授

財団法人 日本地下水理化学研究所

Japan Research Institute of Groundwater
Physico-chemistry

〒532-0011 大阪市淀川区西中島6丁目5番3号
(サムティフェイム新大阪) 607

E-mail : zaidan@tikasui.or.jp
tikasui@skyblue.ocn.ne.jp

URL : <http://www.tikasui.or.jp>

TEL : 06-6100-1555 06-6100-1554

FAX : 06-6100-1550



鷹島肥前大橋（長崎県・佐賀県）

つなぐ、ひすぶ、広げる。未来へ

The Next Perspective



株式会社 横河ブリッジホールディングス

取締役社長 佐々木 恒容

本社 〒108-0023 東京都港区芝浦四丁目4番44号

TEL. 03-3453-4111 FAX. 03-3453-4616

<http://www.ybhd.co.jp/>

1880-1881
1881-1882
1882-1883
1883-1884
1884-1885
1885-1886
1886-1887
1887-1888
1888-1889
1889-1890
1890-1891
1891-1892
1892-1893
1893-1894
1894-1895
1895-1896
1896-1897
1897-1898
1898-1899
1899-1900
1900-1901
1901-1902
1902-1903
1903-1904
1904-1905
1905-1906
1906-1907
1907-1908
1908-1909
1909-1910
1910-1911
1911-1912
1912-1913
1913-1914
1914-1915
1915-1916
1916-1917
1917-1918
1918-1919
1919-1920
1920-1921
1921-1922
1922-1923
1923-1924
1924-1925
1925-1926
1926-1927
1927-1928
1928-1929
1929-1930
1930-1931
1931-1932
1932-1933
1933-1934
1934-1935
1935-1936
1936-1937
1937-1938
1938-1939
1939-1940
1940-1941
1941-1942
1942-1943
1943-1944
1944-1945
1945-1946
1946-1947
1947-1948
1948-1949
1949-1950
1950-1951
1951-1952
1952-1953
1953-1954
1954-1955
1955-1956
1956-1957
1957-1958
1958-1959
1959-1960
1960-1961
1961-1962
1962-1963
1963-1964
1964-1965
1965-1966
1966-1967
1967-1968
1968-1969
1969-1970
1970-1971
1971-1972
1972-1973
1973-1974
1974-1975
1975-1976
1976-1977
1977-1978
1978-1979
1979-1980
1980-1981
1981-1982
1982-1983
1983-1984
1984-1985
1985-1986
1986-1987
1987-1988
1988-1989
1989-1990
1990-1991
1991-1992
1992-1993
1993-1994
1994-1995
1995-1996
1996-1997
1997-1998
1998-1999
1999-2000
2000-2001
2001-2002
2002-2003
2003-2004
2004-2005
2005-2006
2006-2007
2007-2008
2008-2009
2009-2010
2010-2011
2011-2012
2012-2013
2013-2014
2014-2015
2015-2016
2016-2017
2017-2018
2018-2019
2019-2020
2020-2021
2021-2022
2022-2023
2023-2024
2024-2025
2025-2026
2026-2027
2027-2028
2028-2029
2029-2030
2030-2031
2031-2032
2032-2033
2033-2034
2034-2035
2035-2036
2036-2037
2037-2038
2038-2039
2039-2040
2040-2041
2041-2042
2042-2043
2043-2044
2044-2045
2045-2046
2046-2047
2047-2048
2048-2049
2049-2050
2050-2051
2051-2052
2052-2053
2053-2054
2054-2055
2055-2056
2056-2057
2057-2058
2058-2059
2059-2060
2060-2061
2061-2062
2062-2063
2063-2064
2064-2065
2065-2066
2066-2067
2067-2068
2068-2069
2069-2070
2070-2071
2071-2072
2072-2073
2073-2074
2074-2075
2075-2076
2076-2077
2077-2078
2078-2079
2079-2080
2080-2081
2081-2082
2082-2083
2083-2084
2084-2085
2085-2086
2086-2087
2087-2088
2088-2089
2089-2090
2090-2091
2091-2092
2092-2093
2093-2094
2094-2095
2095-2096
2096-2097
2097-2098
2098-2099
2099-20100

構築会たより

2009

2009年11月1日 現在

2009年12月2日 印刷

2009年12月10日 発行

発行責任者 橋本 彰

編 集 木多 道宏
松原 茂樹 三好 崇夫

印 刷 株式会社 進 光
TEL.06-6449-5853

表紙デザイン 株式会社 ココティ工
TEL.06-6367-9921

発 行 構築会
〒565-0871 吹田市山田丘2-1
大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻 社会基盤工学・建築工学部門内
TEL.06-6877-5111(代) FAX.06-6879-7629
E-mail : kouchikukai@arch.eng.osaka-u.ac.jp

異動・変更通知はがきの記入上のお願い

Eメールアドレスの登録を開始しました。
御協力よろしくお願ひします。

- ・変更箇所は朱書き等で区別しやすいようご記入下さい。
- ・卒業年及び修了年は西暦表示でご記入ください。特別会員または現教員の方は該当の所を○で囲んでください。
- ・住所に下宿（在学生の場合）・留守宅を記入する場合には該当の所を○で囲んでください。
- ・Eメールアドレスは名簿には記載しませんが、経費節減のため、本部・支部からの連絡の際に使用する場合があります。登録に御協力よろしくお願ひします。
- ・出向（留学）されている方の場合、勤務先名欄には元の勤務先名記入し、出向先、留学先欄に現在の出向先または留学先をご記入ください。（記入例1を参照）
- ・名簿に掲載したくない項目がありましたら、不掲載を希望する項目名に×印を付けてください。データとして保存いたしますが、本名簿には記載いたしません。（記入例2を参照）

なお、名簿編集作業と会計作業は分離していますので、会費振替用紙の通信欄による変更通知はご容赦願います。

●記入例1（出向されている方の場合）

勤務先	職種	省庁、公社・公園（新会社を含む）、地方自治体、学校、団体、建設業、コンサルタント、設計事務所、鉄鋼業、建設材料業、電力・ガス、電鉄、情報・ソフト、不動産・金融、外団、その他	
	名称 (出向の方は元の連絡先名を記入)	構築県	出向先 構築県住宅供給公社
	所属・役職	再開発事業部 工務課 ニュータウン担当課長	
	住所	〒 000-0000 構築県 築土市 構木 2-11-18	
	TEL	00-0000-0000	

●記入例2（自宅の電話番号を不掲載とする場合）

自宅	住所	〒 000-0000 構築県 築土市 構木 2-11-18	下宿・留守宅
	TEL	00-0000-0000	
	Eメールアドレス	kouchikukai@arch.eng.osaka-u.ac.jp	

※なお、異動・変更は下記Eメールでも受けつけております。

kouchikukai@arch.eng.osaka-u.ac.jp